賞田廃寺発掘調査報告

1971年3月

賞田廃寺発掘調査団

正　誤　表

頁	行	誤	訂　正
目次・挿図	第5図	第Ⅰ(塔)基壇実測	第Ⅰ(塔)基壇実測図
3	24	おり，，中形	，を削除
11	4	岡市教育委員会	岡山市教育委員会
16	5		行末のにを削除
16	12	ずぐ西の	すぐ西の
18	9	東え延び	東へ延び
18	32	型	形
19	14	状態であ	状態である。
25	5	かしれない。	かもしれない。
26	19	判明しさ。	判明した。
28	5	間題点	問題点
36	5	圏があぐり	圏がめぐり
45	3	教条	数条
46	14	杯が	杯で
51	18	隷属化	隷属化
押頁3	第8図	WiN トレンチ	WiTN トレンチ
挿頁3	第11図	第Ⅰ基壇	第Ⅱ基壇

序

わたしたちの吉備の国は，古来大和，出雲，北九州などとともに，高度の文化の華をさかせた舞台であり，すぐれた文化遺産の数々を誇っていることはご承知のとおりであります。

わたしたちの祖先がのこしたこうした文化遺産をたいせつに保護するとともに，後世にうけついでいく努力はわたしたちに課せられた責務であることは言うまでもありません。

ところが，最近の急激な地域開発の進展にともない，各所で文化財の破壊がつたえられていることはまことに憾憾にたえません。わたしたちが，よりよい将来をつくりだすために，いわゆる地域開発がたいせつであることは当然でありますが，そのために，ひとたび姿を消すと，とりもどすことのできない文化財をかるがるしく取り扱うということは決して許されるべきではありません。そこでわたしたちに課されている緊急課題は，地域開発か文化財の保護かという二者択一の考え方でなく，賢明な思慮により両者の正しい調和の姿をみつけだすにはどうしたらよいかということであります。

このようななかにおいて，わが岡山市においても解決すべき課題がいくつか起っていますが，とくにこのたび岡山県教委の援助のもとに岡山市教育委員会が実施した賞田廃寺跡の緊急発掘は開発とともに文化財の保護がいかにたいせつかということを周知していただいた好事例であったと思います。

すなわち，今日各地でさかんにおしすすめられている地域開発と同じ事情のもとに，岡山市賞田地内において一市民の方が宅地造成をすすめられたところ，多数の古瓦が出土したのであります。この地区は以前から白鳳時代にさかのぼる賞田廃寺跡とみられていたため，瓦の出土により廃寺跡であることが確実となったのであります。そこで，岡山県教育委員会は直ちに保護のため，史跡としての仮指定措置をとり，宅地の代替地を周せんするとともに，国，県の補助を得て岡山市教育委員会において緊急発掘調査を実施することにしたのであります。こうした緊急措置は，従来からみると全く画期的な措置でありました。それだけに直接当事者の市民の方，ならびに賞田町内の方々にひじょうなご迷惑をかけたのであります。幸いにも，賞田の祖先の業績を顕彰することになるとともに，永く将来にこの遺跡をうけつぐことになるという立場から格別のご理解をいただき発掘調査が実施できたのであります。調査の結果，賞田廃寺は中央寺院にも匹敵する高度の様式をもつ伽藍をそなえていたことが判明したのであります。

調査結果を文化庁に報告したところ国指定史跡となることが決定し，今後保存のための具体的施策をすすめる段階になりました。ついては，関係の方々のいっそうのご理解ご協力をお願いするしだいであります。

このたび，ようやく，この調査の報告書がまとまり詳細を公にすることになったのでありますが，直接ご協力いただいた方々に対しては心からのお礼のしるしとも考え，また，寺院遺跡研究にたずさわられる方々への参考資料にでもなればと願うしだいであります。

さいごに，この機会に調査実施に直接たずさわっていただいた研究関係者の各位，ならびに，再三にわたってご来岡いただきご指導くださった文化庁三輪技官，調査実施に格別のご理解をたまわった岡崎岡山市長，などに，心から謝意を表します。

昭和46年3月20日

岡山市教育委員会

教育長　難　波　輝　夫

例　　言

1，この報告書は，岡山市教育委員の主催により編成された賞田廃寺発掘調査団が，昭和45年5月から8月にかけて実施した岡山市賞田・賞田廃寺跡の発掘調査に関するものである。

2，この報告書の作成は，調査顧問，調査委員の協力を得て岡山市教育委員会が実施し，その執筆は，第一章，第三章を出宮徳尚，第二章を水内昌康，第四章を伊藤晃，出宮，第五章を水内，伊藤，出宮が分担した。

3，遺物の整理，実測，及び実測図の浄写は，中村義市，岡本俊朗両君の助力を得て出宮がおこなった。

4，遺物の写真撮影，及び編集は，出宮がおこなった。

5，この報告書で用いたレベルの数値は，海抜絶対高である。

6，この報告書で用いている時代区分は，飛鳥時代が6世紀末から645年（大化改新）まで，白鳳時代が645年から710年（平城遷都）まで，奈良時代前半が710年から741年（国分寺，国分尼寺造営の詔）まで，奈良時代後半が741年から794年(平安遷都)までである。以下平安時代，鎌倉時代は，一般的な用い方である。

目　　次

第一章　歴史的環境 ……1頁
第二章　調査経過 ……10頁
第三章　遺　構 ……16頁
第四章　遺　物 ……30頁
第五章　結　語 ……49頁

図　　版

図版第1，全　景
図版第2，第Ⅰ基壇
図版第3，第Ⅰ基壇
図版第4，第Ⅰ基壇
図版第5，第Ⅰ基壇
図版第6，第Ⅰ基壇
図版第7，第Ⅱ基壇
図版第8，第Ⅱ基壇
図版第9，第Ⅲ基壇
図版第10，第Ⅲ基壇
図版第11，第Ⅲ基壇
図版第12，第Ⅲ基壇
図版第13，西門基壇
図版第14，西門基壇
図版第15，西門基壇
図版第16，西門基壇
図版第17，西門基壇
図版第18，西門基壇
図版第19，E I T
図版第20，南築地
図版第21，S W_3T　窯
図版第22，窯
図版第23，出土瓦
図版第24，出土瓦
図版第25，出土瓦
図版第26，出土瓦
図版第27，出土瓦

図版第28, 出　土　瓦
図版第29, 遺　　物
図版第30, 須　恵　器
図版第31, 須　恵　器
図版第32, 須恵質土器
図版第33, 須恵質土器, 土師器
図版第34, 土　師　器
図版第35, 土釜, 土鍋
図版第36, 土　　鍋
図版第37, 瓦器, 磁器, その他
図版第38, 中国製磁器, 鬼瓦片
図版第39, 鉄　　器

挿　　図

第 1 図 賞田廃寺跡周辺地形, 遺跡分布図 …… 2頁
第 2 図 網之浜廃寺出土瓦 …… 7頁
第 3 図 賞田廃寺跡附近略図 …… 8頁
第 4 図 ①地元見学会 …… 14頁
第 4 図 ②市長視察 …… 15頁
第 5 図 賞田廃寺址地形測量図 …… 挿頁1
第 6 図 第Ⅰ（塔）基壇実測 …… 挿頁2
第 7 図 第Ⅰ（塔）N_1S_1トレンチ東壁実測図 …… 挿頁3
第 8 図 第Ⅰ（塔）W_1Nトレンチ南壁実測図 …… 挿頁3
第 9 図 第Ⅱ基壇E_1W_1トレンチ南壁実測図 …… 挿頁3
第 10 図 第Ⅱ基壇E_2W_2トレンチ北壁実測図 …… 挿頁3
第 11 図 第Ⅱ基壇N_1S_1トレンチ東壁実測図 …… 挿頁3
第 12 図 第Ⅲ基壇トレンチ遺構実測図 …… 挿頁4
第 13 図 第Ⅲ基壇N_1トレンチ西壁実測図 …… 挿頁5
第 14 図 第Ⅲ基壇S_1トレンチ東壁実測図 …… 挿頁5
第 15 図 第Ⅲ基壇E_1トレンチ南壁実測図 …… 挿頁5
第 16 図 第Ⅲ基壇W_1トレンチ南壁実測図 …… 挿頁5
第 17 図 西門基壇実測図 …… 挿頁6
第 18 図 ＷⅠトレンチ南壁実測図 …… 挿頁7
第 19 図 ＥⅠトレンチ南壁実測図 …… 挿頁7
第 20 図 ＳⅠトレンチ東壁実測図 …… 挿頁7

第 21 図　ＳⅡ－Ⅰトレンチ平面，東壁実測図 …… 挿頁 8
第 22 図　ＳⅡ－2 トレンチ東壁実測図 …… 挿頁 8
第 23 図　SW_3トレンチ南壁実測図 …… 挿頁 8
第 24 図　瓦窯実測図 …… 挿頁 9
第 25 図　賞田廃寺第Ⅰ様式瓦，第Ⅱ様式瓦実測図 …… 32頁
第 26 図　賞田廃寺第Ⅲ様式瓦，第Ⅳ様式瓦実測図 …… 33頁
第 27 図　賞田廃寺第Ⅴ様式瓦～第Ⅷ様式瓦，築地瓦等実測図… 35頁
第 28 図　須恵器磁器実測図 …… 38頁
第 29 図　須恵器備前焼実測図 …… 40頁
第 30 図　須恵質土器土師器瓦器実測図 …… 42頁
第 31 図　土釜，土鍋等実測図 …… 44頁
第 32 図　鉄器実測図 …… 46頁

表　1　文様瓦出土状況 …… 36頁
表　2　平瓦，丸瓦出土状況 …… 36頁

第一章　歴史的環境

岡山平野の中央を北から南に縦断して流れる旭川の東岸平野部は，一般的に狭義の意味で上東（上道）平野と呼ばれている（倉敷市庄，上東遺跡の上東とは無関係）。上東平野は，北が竜の口山系，東が山王山，芥子山，南が操山山塊と三方をU字状に丘陵で囲まれ，中央には旭川の一支流の旧河道が北西から南東に延びて残っている。上東平野，及び周辺の丘陵には，先土器時代の石器散布地から中世の墓地，城跡に至るまで多数の遺跡が存在する。代表的なものを列挙すれば，百間川遺跡，雄町遺跡，備前車塚古墳，金蔵山古墳，唐人塚古墳，賞田廃寺，幡多廃寺，備前国府跡等をはじめとして，古墳群，集落址，廃寺址など重要な遺跡が存在し，また平野全般に条里制が残り特に東部には条里制区画が良好に遺存している。これらの遺跡の一つとして賞田廃寺が，竜の口山南山麓西寄りの緩やかな谷に存在している。この賞田廃寺の歴史的性格，内容を考える上からも，上東平野，旭川西岸平野部，及び，それぞれの周辺丘陵に存在する奈良時代以前の遺跡の概要について概略的に見て行きたい。

なおこの遺跡分布は，岡山平野研究会（代表水内昌康）の成果をもとに追加集成したものである。

1．古墳時代以前

現在まで上東平野，及び周辺丘陵の縄文時代の遺跡は，弥生時代前期の遺物に共存する晩期の土器以外には確認されないない（口矢津に前期の小貝塚があったと伝えられるが，現状では未確認）。

弥生時代になると，この沖積平野にもその初頭から遺跡が展開する。上東平野の弥生時代前期の遺跡としては，原尾島の百間川遺跡と，雄町遺跡が現在までに確認されている。両者は，自然堤防上に形成された遺跡で，いずれもすくなくとも縄文時代晩期後半から形成され出し①さらに弥生時代後期まで継続する（後者では，さらに古墳時代，奈良時代まで複合している②）。これらの弥生時代を通じて中核的遺跡の外に，中期，後期になると遺跡は，平野全般に展開し，周辺丘陵上にも甕棺墓地，銅鐸出土地等の遺跡がさらに拡大して形成されていく。

一方，旭川西岸の平野部（ダイミ山山塊以南，及び京山矢坂山〈笹ケ瀬川〉以東を示す。以下同じ）の縄文時代の遺跡は，弥生時代の前期の遺跡に共存する晩期のもの以外には，ダイミ山山塊西側の都月坂３号墳付近の石器散布地と後期の朝寝鼻貝塚（現在消滅）の二ケ所だけである。

弥生時代前期になると縄文晩期の土器を出土し近年の発掘調査により前期前半の住居址，倉庫等が検出された津島遺跡や上伊福遺跡を中核的遺跡として形成される。中期，後期になると，南方遺跡，大供，天瀬遺跡と沖積地の遺跡が拡大する一方，周辺丘陵にも甕棺墓群や，近年，古墳出現以前の墳墓として注目されている都月坂２号墓③等の遺跡が拡大的に形成されている。

古墳時代の平野部の遺跡は，旭川両岸を通して数ケ所で確認されているが，その内容が一部なりとも判明しているのは雄町遺跡④ぐらいのもので，大半は不明である。しかもこの時代の遺跡は，現在の集落と複合しているものが多く，研明しがたいものも多い。一方，古墳自体は，平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが，沖積地に築造された古墳は，かって周湟が巡っていたと伝えられる

第1図 賞田廃寺跡周辺地形遺跡分布図

○ 前半期古墳　　●後半期（横穴式石室）古墳　------ 古代山陽道（推定）
卍廃寺跡　卍の下の一は出土最古瓦が白鳳時代のもの
〃　＝は　〃　奈良時代前半のもの
〃　≡は　〃　〃　後半のもの

1賞田廃寺，**2**成光廃寺，**3**幡多廃寺，**4**井寺廃寺，**5**網浜廃寺，**6**備前国分寺跡，**7**備前国分尼寺跡，**8**荒神廃寺，**9**才の木廃寺，**10**神力寺址，**11**備前国庁跡（県指定史跡地），**12**推定備前国府跡，**13**雄町遺跡，**14**大安寺領大多羅荘原，**15**同長江原，**18**同比美荘原，**17**推定高月駅跡，**a**備前車塚古墳，**b**金蔵山古墳，**c**湊茶臼山古墳，**d**神宮寺山古墳，**e**都月2号墓，**f**ぎりぎり山古墳，**g**両宮山古墳，**h**牟佐大塚古墳，**i**唐人塚古墳，**j**一本松古墳，㉒は●が22基

この分布図は，旭川両岸平野部及び周辺丘陵の古墳，古代（奈良時代以前）寺院址を中心としたもので，その外の地域や，その他遺跡は割愛してあるものもある。

（1/50,000 岡山都市集成図再編）

現長約 150mの前方後円墳＝神宮寺山古墳⑤一基である。これら，上東平野，及び，西岸平野をとりまく古墳の概要を古墳時代前半期と後半期⑥に分けて眺めてみたい。しかし，上東平野及び，西岸平野周辺丘陵に存在する古墳で，発掘調査がなされ，その内容，時期等が判明しているのは金蔵山古墳，旗振台古墳，都月坂1号墳，備前車塚古墳（一本松古墳＝軍事工事により石室破壊，出土物の一部判明）等僅かで，大部分の古墳は，墳丘の形状，表面採集遺物，伝承出土物等に依拠している。

前半期古墳

岡山平野で最古の古墳と考えられるのは備前車塚古墳⑦で，この古墳は，尾根突端に築造された全長約50mの前方後方墳で，13面の舶載鏡を出土し，全国的にも重要視されている古墳である。備前車塚古墳に対する考古学的評価は，小林行雄氏の『古墳時代の研究』⑧等の論文で多くの成果を上げているので詳細は，省略するが，全国的にも最古の古墳の部類に入るもので，立地は全く孤立的状態で，他の古墳とは断絶的である。

車塚古墳に若干遅れるが，非常に古いと推定される全長約80mの前方後円墳＝操山109号墳が，操山山塊西端丘陵上に存在する。この操山山塊西端丘陵尾根上には，全長90mの網浜茶臼山古墳，全長130mの湊茶臼山古墳等，古式の比較的大形の前方後円墳が集まっている。　網浜茶臼山古墳は，都月坂1号墳と同一型式の特殊円筒形埴輪を出土している⑨が，109号墳よりは若干新しいようである。これらと距離的には若干離れているが，操山山塊中央に，上東平野を見おろして全長165mの金蔵山古墳が存在する。この古墳は1953年に発掘調査が実施⑩され，一応4世紀末に築造されたと推定されている。

上東平野の北側の竜の口山山系では前記の車塚古墳以外には，前方後円（方）墳は，現在まで確認されておらず，前半期の古墳は，比較的新しいと推定される中形，小形円墳，方墳が9基点在的に尾根上で確認されているだけである。

一方，東の山王山では，全長65mで前半期でも後葉と推定される前方後円墳＝山王山古墳を中心に，比較的新しいと推定される小円墳が確認されている。

南の操山山塊では，前記の大形前方後円墳を含めて6基（未確認＋1）の前方後円墳が確認されており，，中形，小形円墳，方墳を入れると現在まで前半期古墳は，総計25基（実数この2～3割増？）の内，前方後円(方)墳8基（＋1？）が現在までに確認されている。これら前半期古墳の内，4世紀代と考えられる古墳で，系統的に掌握できるのは，操山109号墳から網浜茶臼山古墳，湊茶臼山古墳，金蔵山古墳へ至る操山の大形前方後円墳の系統（湊茶臼山古墳の前後に一基すでに消滅したと推定される前方後円墳が入る可能性がある）だけである。車塚古墳は別として，残りの大半の古墳は，4世紀後半～5世紀代と推定される中形，小形前方後円墳，円墳，方墳が，丘陵尾根上に個別的に位置するもので，明確に古墳群として把握しがたい分布状況を呈している。ただ，山王山の古墳は，山王山古墳を中心とした小形円墳の古墳群と，小形円・方墳が数基集まった古墳群が認められ，前半期古墳でも後半の群集墳の前段階的な古墳群の可能性がある。

一方，旭川西岸平野部，及び周辺丘陵（ダイミ山系南部，矢坂山，京山を意味し，笹ケ瀬川に区切られた西の吉備中山山塊，楢津，の丘陵，及び津高盆地を囲む丘陸は除く，以下同じ）で前半期古墳として現在確認されているものは，約25基（実数2～3割増？）である。これらのうち西の矢坂山，

京山には，40mクラスの小形前方後円墳が2基と小形円墳が2基孤立的に存在するだけであり，過去に破壊消滅した古墳（前半期のものと推定される)を加えても6基程の小形古墳が点在的に存在するだけである。この分布現象は，矢坂山尾根上一帯に展開されている弥生時代中～後期の甕棺大墓址群のあり方とは極めて対照的な現象である。

一方，北のダイミ山南丘陵には，都月坂1号墳をはじめとし，都月坂古墳群，七つ坑(ぐろ)古墳群，一本松古墳群と三つの古墳群が存在する。

都月坂古墳群は，弥生時代後期末の方形墓⑪に引き続いて，吉備地方最古の特殊な円筒形埴輪を伴なう全長33mの前方後方墳＝1号墳⑫や，全長約30mの前方後円墳＝3号墳，円墳＝4号墳からなるこれらの古墳は，丘陵鞍部上に古い古墳が系統的展開を示し，それが一つの古墳群を形成している。

七ツ坑古墳群は，舌状尾根上に全長約40mの小形前方後方墳を中心に6基の小形円墳よりなる。この前方後方墳からも特殊円筒形埴輪片が出土しており，古い時期から形成された古墳群と推定される。

一本松古墳群は，ダイミ山東端尾根上に全長65mの前方後円墳，一本松古墳を中心に約10基の小形円墳，方墳からなるが，戦前の記録によれば，小形前方後円墳1基，小形円墳5基がさらに存在していたとのことである⑬。

一本松古墳出土遺物からみてこの古墳群は，前記の古墳群より新しく，前半期古墳でも後葉のものと推定される。

この他，ダイミ山山頂に小形方墳が一基あり，山麓にお塚様古墳と呼ばれる前長約60mの前方後円墳があった（工事で消滅）と伝えられる。

いずれにせよ，ダイミ山山系にみられる，上記の古墳は，前方後円墳を中心とした古墳群を形成するものが大半であるが，墳丘規模は小形のものばかりである。古墳群内で系統的に古墳がとらえられるのは，都月坂古墳群だけで，あとの二群については系統的に見ることはできない。また，西岸全体の前方後円墳についてみても，前記の操山西部の前方後円墳のように系統的には把握しがたい状況にあるようである。全体的に西岸の前半期古墳の展開は，上東平野に於ける前半期古墳の展開とはあまりにも対称的なあり方を示している。

一方，旭川西岸平野部自然堤防上に，かって周濠がめぐっていたと伝えられる墳丘現長約150mの大形前方後円墳の神宮寺山古墳が存在する。神宮寺山古墳と前記の旭川西岸丘陵部の古墳との質的，量的格差は，歴然たるものであり，それらの展開と神宮寺山古墳を直接系統的に結びつけることは不可能である。神宮寺山古墳は，むしろ前記の操山山塊の大形前方後円墳の系統的展開に結びつく要素が極めて大きいと考えられる。

以上，旭川東西両岸の前半期古墳の様相を極めて概略的に眺めてきたが，その展開に於て両者には，質的にも量的にも格差が著しく存在していることが目につく。また，古墳自体についてみると大半の古墳が，5世紀中葉以前のものと推定され，前半期古墳の末期的な古墳＝後半期古墳へ直接結びつくようなものは，現在まで確認されていない。

後半期古墳

上東平野，及び西岸平野部の周辺丘陵には多数の後半期古墳が存在するが，発掘調査がなされ，その内容，様相，性格等が判明しているのは一，二例である。従って現状では後半期古墳は，横穴式石室が確認できる古墳であり，後半期古墳即横穴式石室墳である。両地域を通じて，現在まで横穴式石室をもつ前方後円墳は，一基も確認されていない。また，小口積横穴式石室，短小で付随的な羨道部をもつ横穴式石室等の古い様相を示す横穴式石室も確認されていない。

上東平野周辺丘陵で確認されている後半期古墳は，竜の口山山系と操山山塊の古墳で，それぞれを竜の口山古墳群，操山古墳群と呼んでいる。

竜の口山古墳群は，竜の口山頂群集墳，矢津古墳群，四御神古墳群，湯迫古墳群に大別される。現在までに確認されているこれらの古墳は，約55基であるが，過去に破壊消滅したものや未確認地域を入れると実数は70～80基であったと推定される。竜の口山頂群集墳は，小形横穴式石室が近接密集して群集墳を形成するもので，時期はくだるようである。あとの古墳群は，比較的大形の横穴式石室墳，中形横穴式石室墳が尾根，谷頭などに点在的に存在するのであるが，数基が近接して群を形成しているものもある。しかし，群集というほど古墳が集中しているものはない。明確に画しにくいが，大形横穴式石室は，孤立的に存在し，中形，小形横穴式石室墳は，グループをなす傾向にあるようである。この大形横穴式石室の一基，唐人塚古墳が，賞田廃寺の西に小尾根を隔てて築造されている。

唐人塚古墳は，両袖形横穴式石室を内部構造とする円墳であるが，墳丘一帯が畑地として切り開かれているため墳丘規模は判然としない。また，羨道部先端も石材採集のため破損している。石室の現測値⑭は，全長13.6m，玄室長5.30m，同幅2.94m，同高2.27m，羨道長8.30m，同幅1.87m，同高1.38mであるが，羨道先端の破損を計算に入れると，全長は15m以上と推定される。玄室中央に長さ2.21m，幅1.20m，高さ0.40mの凝灰岩製刳抜家形石棺の身が残っている（蓋は江戸時代に消失）。

石室構築は，7世紀前半の畿内巨石墳に見られる石積と同様に，原則的に玄室側壁，奥壁が巨石による二段積であり，羨道側壁も巨石による一段積である。玄室の壁，天井石の一部には面取の加工痕が認められる。この古墳の築造年代は，石室構造，石棺からみて6世紀最終末～7世紀前葉と推定されるが，遺物が全く知られていないので明確な年代は断定できない。

操山山塊で現在までに確認されている後半期古墳は，総数95基（実数百数基？）であり，大半が一般化した横穴式石室で，古式の様相を示すものはない。古墳の分布状況は，大形石室墳が丘陵頂上，尾根頂部に個別的に存し，中形石室墳は丘陵全地形上に個別的に点在するものと，数基がグループをつくっているものとがある。さらに，中形古墳でも少し小さな石室を中心に小形石室墳が10基前後近接集中した小群集墳と，極小石室墳の点在的存在と五つに大別できる。この古墳群では石棺を伴なうものは皆無であり，陶棺を伴なうものも少数しか確認されていない。前半期古墳の対比に於て，古墳の急速な質的縮小と量的増大は著しいもので，前記の前方後円墳の系統的展開で金蔵山古墳以降の展開は全く片鱗さえ見い出すことはできない。

一方，現在西岸のダイミ山山系南側では横穴式石室墳は，全く検出することができない。過去山麓に

2～3基の横穴式石室が存在していたと伝えられているが，絶対的にみてもダイミ山山系南側の横穴式石室墳は，著しく稀少である

西の矢坂山では現在までに約30基（実数2～3割増？）の横穴式石室墳が確認されているが，大形石室墳は皆無である。矢坂山の横穴式石室墳の状況は，竜の口山古墳群，操山古墳群では中形石室墳に比定される石室墳も個別的に数基存在している。しかしあとの大半は，小形横穴式石室墳が数基グループをなすか，シストに近い極小石室が数基から10基前後が集中的に群集しているにすぎない。矢坂山に存在する後半期古墳の大半は，後半期でも後半もしくは末と考えられる。

旭川両岸の後半期古墳の展開状況は，前半期古墳以上に量，質とも絶対的に西岸が著るしく劣り，弥生時代の両者の展開を考えると極めて対照的であり，示唆的である。

2，古代寺院址

上東平野，西岸平野部で確認されている古代寺院址（奈良時代以前）は，賞田廃寺，成光廃寺，幡多廃寺，井寺廃寺，網浜廃寺の五ケ所で，全て上東平野に存在する。西岸平野部では現在まで古代寺院址は，全く確認されていない。旭川以西で古代寺院址が存在するのは笹ケ瀬川以西で，丘陵を隔てた津高盆地南部の荒神廃寺・才の木廃寺と，備中国境の吉備中山北東山麓の神力寺址である。いずれにせよ旭川東岸，西岸の平野部は，古墳以上に古代寺院址の分布が著しく不均等である。

さらに古代に於ける備前国府が上東平野中央西寄に存在し，前記の各時期の遺跡群と合わせて考えると，上東平野は，古墳時代から古代の吉備地方に於ける一大中心地であったと推定される。

成光廃寺

成光廃寺は，賞田廃寺の北東約500ｍの推定国府跡北側自然堤防上に存在し，成光寺の字名が残り，附近から賞田廃寺第Ⅲ様式軒丸瓦と同一様式の軒丸瓦片⑮が出土している。また，飛鳥時代末の杯蓋をはじめとして須恵器，土師器片が多数附近に散布している。しかし，検出瓦片が上記の一片だけであり，確かな遺構も未確認のため，成光廃寺を寺院址と断定しかねるむきもある。

幡多廃寺

幡多廃寺は，賞田廃寺の直南約2kmの所，推定国府跡を挟んで南北対称的位置に存在する。周囲に旭川支流旧河道を残す自然堤防上に，県下最大の花崗岩製塔心礎（国指定史跡）が遺存している。附近の田圃，畦畔から奈良時代後半の軒平瓦片（国分寺期）や，平安時代初期の軒平瓦片が出土している⑯が，現状では心礎以外に明確な遺構は確認できない。

井寺廃寺

井寺廃寺は，賞田廃寺の東方約3kmの山王山と矢津東の山との山間の平地に存在する寺院址で，瓦片を出土するが明確な遺構は現状では確認できない。出土瓦は，賞田廃寺第Ⅳ様式瓦と同一様式の軒丸瓦片や，同Ⅴ様式軒平瓦と同一文様構成を示す忍冬唐草文瓦片⑰，平安時代初期の軒丸瓦片⑱等である。

網浜廃寺

網浜廃寺は，操山山塊の西端の旭川に面した台地に存在する寺院址で，これまで基壇，溝等（宅地崖断面で確認）の遺構と，礎石や多量の瓦片が出土している。出土瓦は，奈良時代末の軒丸瓦から平安時代後期，さらに室町時代の瓦まで及び⑲，この寺院は奈良時代末の創建とされていた。しかし，近年，寺院址で奈良時代前半と考えられる軒丸瓦片が採集され，網浜廃寺の創建は，少なくとも国分寺期以前，奈良時代前半に上ることが確実となった。

以上の上東平野に存在する4例の寺院址はいずれも未調査で，その内容，様相，変遷等の詳細は不明である。しかし，賞田廃寺と同一様式の瓦を出土する寺院は成光廃寺，井寺廃寺の2例が確認され，上東平野の寺院址を検討する場合，賞田廃寺との相関関係は無視できないであろう。

国分寺・国分尼寺

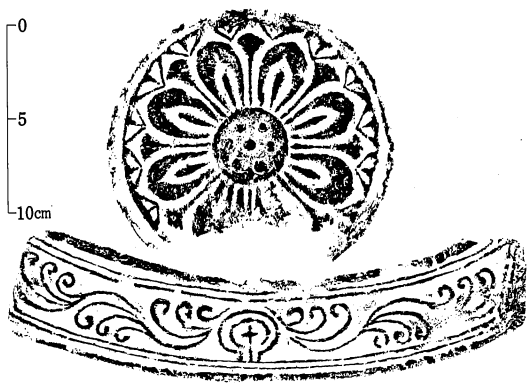
国分寺址，国分尼寺址は，竜の口山山系の東に続く山塊を隔てた，現在の山陽町の盆地西端に，北に国分寺，南に国分尼寺と近接して存在する。この地域は，両宮山古墳（りょうぐうざん）をはじめ，として東高月（たかつき）遺跡群があり，また，すぐ西に古代山陽道高月駅が存在し，重要な遺跡が集中している。現在国分寺址には心礎と称される石と後世の石塔が存在するだけで，礎石等は江戸時代に徹底的に破壊され，遺構らしいものは見あたらない。国分尼寺址は，国分寺程判然としないが，一応仁王堂池附近が寺院址と推定され，附近や池底から国分寺と同一様式の瓦片が出土している。また，池底には礎石が残っていると伝えられている。

いずれにせよ，国分寺，国分尼寺は，遺跡的にも上東平野と対照的な地の山陽町の盆地に建立されている。

3，賞田廃寺

賞田廃寺は，竜の口山南山麓の緩やかな谷に遺存する古代寺院址で，白鳳時代～平安時代の瓦を出土し，遺構の残存状態も良好であり，岡山県下屈指のものとして戦前から注目を浴びていた。賞田廃寺の立地は，東西を低く緩やかな小尾根で区切られた谷の緩斜面上に位置し，現在は西半分が水田，東半分が畑，竹藪等になっている。谷の南は，祇園用水を境に上東平野の水田が広がり，南に500m程離れて備前国府が展開し，特に東部には今も条里制が残っている。

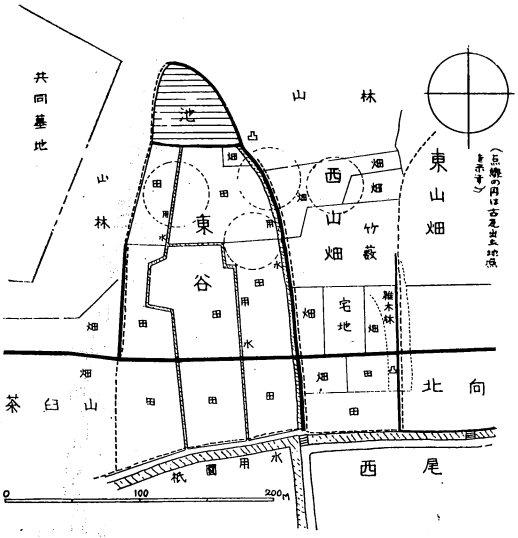
賞田廃寺は，良好な白鳳時代の瓦を出土することで古くから知られ，戦前から研究者，同好者によって瓦蒐集のため小発掘がたびたび実施され，戦前から古瓦研究上に重要な位置を占めていた。戦前の岡山県下の古瓦研究の集成である玉井伊三郎氏編の『吉備古瓦図譜』で賞田廃寺出土瓦も一応集成されている⑳。そして，今日まで，賞田廃寺址，及び出土瓦は，吉備地方の古代寺院研究，古代瓦研究に個別的に資料としてたびたび引用されているが，その集積は，吉備古瓦図譜以外には岡山市史古代



第2図 網之浜廃寺出土瓦

編の賞田廃寺の一節があるだけである。

現在賞田廃寺は，現地踏査により，基壇状地形が3ケ所と，瓦溜的瓦散布地が5ケ所確認され，全域に瓦片，磁器片，須恵，土師器片が散布している。また，石英粗面岩の板石や破片も点存している。現状では礎石は一つも確認されず，土地の人の口伝によると，戦前の用水護岸工事に石材として抜きとったとのことである。先年，この用水護岸改修がおこなわれ，その時に護岸中より礎石が数個現われ，近くの安養寺に安置されたとのことである。現在，安養寺境内に8個，南の高島小学校に1個の賞田廃寺出土と伝えられる礎石がある。



第3図　賞田廃寺跡附近略図（岡山市史古代編による。）

賞田廃寺でこれまでに出土している瓦は，賞田廃寺第Ⅱ様式瓦（丸，平），同第Ⅴ様式瓦（丸，平），同第Ⅶ様式瓦（丸）である。これらから賞田廃寺は，白鳳時代に創建され，その後室町時代初頭まで存続していたと一般的に見られていた。

いずれにせよ，遺物はかなり知られているが，賞田廃寺に関する文献資料は，現在までの所皆無であり，将来の発見もほとんど期待できないであろう。

1962年発行の『岡山市史・古代編』に賞田廃寺跡の一節㉑が設けられ，それまでに判明している事実と寺院址の状態，伝承，遺物等について概略的ではあるがよく総括されている。この内の，賞田廃寺跡附近略図中に古瓦出土地点が示されている。この地点は，現状で確認できる基壇状地形と重なるもので，未発掘地域を考える場合に一指標となり，寺域，伽藍等を考える時には欠くことのできない資料である。

（出宮徳尚）

註①　鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史・古代編』33頁，78頁，岡山市役所，1962年

②　山陽新幹線工事に伴なう事前調査として岡山県教育委員会が，1968年から発掘調査を実施し，縄文時代晩期の土器片を初めとし，弥生時代～平安時代に至る遺構や遺物が多数検出されている。

③　近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻3号，19頁，考古学研究会1966年

④　註②に同じ

⑤　註①第2編古墳時代，165頁

⑥　古墳時代の時期区分は，小林行雄・近藤義郎「古墳の変遷」『世界考古学大系』3，平凡社，1959年による。

⑦ 註⑤ 135頁，及び註⑧

⑧ 小林行雄『古墳時代の研究』，青木書店，1961年

⑨ 註③ 25頁

⑩ 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館，1959年

⑪ 註③

⑫ 水内昌康「岡山市津島都月坂一号墳の発掘」『私たちの考古学』第5巻3号，考古学研究会，1959年

⑬ 註⑤ 162頁

⑭『高島村史』59頁，吉備高島聖蹟顕彰会，1937年

⑮ 巌津政右衛門「第5編奈良時代」『岡山市史・古代編』413頁，岡山市役所，1962年

⑯ 註⑮406頁

⑰ 註⑮431頁

⑱ 玉井伊三郎編『吉備古瓦図譜』12頁，図版第1，吉備考古会図譜刊行所，1941年

⑲ 註⑮ 409頁

⑳ 註⑱6～9頁，図版第1・2

㉑ 註⑮ 400頁

第二章　調　査　経　過

賞田廃寺付近一帯は，寺院址を含めて，地元の人々に分筆所有されており，西側が水田に細分され，東側も畑・果樹畑・竹藪等に細分されていた。昭和43年に西の水田一帯が社員住宅地として，ある会社に買収され，また，東の畑の一部も，宅地として個人に買収された。昭和44年春，社員住宅計画の判明と宅地化実施にともなって，賞田廃寺跡の保存問題が表面化した。このため，県教委，市教委は，地元地権者，宅地買収者，会社の協力を得て，保存対策を講じたが，究極において，遺跡の重要性とその概要を明確にし，国指定史跡として保存するのが最上唯一の施策であることに帰結した。このため，岡山市教育委員会は，地権者，地元の協力のもとに，国，県の補助金と指導，援助を得て，昭和45年5月8日から8月7日まで緊急発掘調査を実施した。発掘調査にさきだち，昭和45年4月地元地権者，県教委，市教委によって事前の協議がなされ，地権者，地元の絶大なる協力のもとに発掘調査が実施される運びとなった。

昭和45年5月6日，岡山市教育委員会主催のもとに，賞田廃寺発掘調査の打合せ会が市庁舎で開かれた。市教育委員会から，現地予備踏査にもとづく発掘調査の方針が出され，遺構の検出と寺域の確認を基本的目的として、発掘調査を実施することが説明された。

発掘調査は，現状で確認できる基壇状地形5か所，瓦集中散布地5か所のうちの主要部と，寺域追求の発掘，および周辺地形測量を行ない，将来の史跡指定と保存に対する，基本的資料を検出し，まとめることとなった。また，調査期日，調査団の編成などの決定をみた。調査期日は，一応昭和45年5月8日から約2か月の予定とした。

賞田廃寺発掘調査団の編成

調査責任者	難　波　輝　夫	（岡山市教育長）
調査顧問	和　島　誠　一	（岡山大学法文学部教授）
	西　原　礼之助	（岡山市文化財専門委員長）
	鎌　木　義　昌	（岡山理科大学教授）
	近　藤　義　郎	（岡山大学法文学部助教授）
調査団長	水　内　昌　康	（岡山市文化財専門委員）
調査委員	巌　津　政右衛門	（岡山市文化財専門委員）
	西　川　　宏	（山陽女子学園教諭）
	間　壁　忠　彦	（倉敷考古館副館長）
	間　壁　葭　子	（倉敷考古館学芸員）

高　橋　　護　（岡山県教育委員会文化財保護主事）
春　成　秀　爾　（岡山大学法文学部助手）

調査担当員　松　本　　猛　（岡山市教育委員会社会教育課長）
植　田　心　壮　（岡市教育委員会社会教育課文化係長）
井　上　甫　之　（岡山市教育委員会社会教育課）
伊　藤　　晃　（岡山県教育委員会文化課）
出　宮　徳　尚　（岡山市教育委員会社会教育課）
近　成　久美子　（　　同　　上　　）
田　淵　妙　子　（庶務担当，　同上　　）

調査にあたり，横山浩一氏（奈良国立文化財研究所平城宮調査部），三輪嘉六（文化庁）の両氏の現地来訪を得，多大の御指導と助力を得た。さらに，平野邦雄（文化庁），工藤圭章（文化庁），田村晃一（文化庁）の諸氏の視察と助言を得た。

調査期間中には岡山大学学生，中村義市，藤田憲司，清水芳裕，岡本俊朗，東　潮，香川大学学生岩本正二の諸氏のご援助を得，また，地元町内会長服部公男氏をはじめとした地元の方々，地権者の方々の献身的なご援助，ご支援をいただきましたことを深く感謝いたします。

遺物整理，報告書作成にあたっては近成久美子さんや，中村義市，岡本俊朗の両君をはじめ，清心女子大学学生蓬郷孝子，井上りえ等の諸君の真しなご助力，ご協力に対し厚くお礼を申します。

1，調査目標

このたびの調査は，賞田廃寺跡を国指定史跡にして保存をはかるために，その必要資料を検出することを大目的としたものである。したがって，発掘調査は，基壇等主要遺構の検出と，築地，周溝による寺域の確認に主点を置いて発掘が進められた。これまで，賞田廃寺は出土瓦により白鳳時代から室町時代の寺院址とされ，遺構も比較的よく保存されていると伝えられていた。そして，備前最古の寺院址として注目を浴びていたが，その内容，様相は全く不明のままであった。賞田廃寺の中心的時期は，律令体制の形成から古代荘園制の展開の時期である。律令体制の確立とその崩壊，荘園制の進展と変動する社会的動向のなかにあって「地方」がいかなる意義をもち，役割を演じたか。また，多くの地方寺院がいかなる歴史的意義をになったのかを「一地方寺院」の遺構，遺物を通して若干なりとも，把握できればと願った。

さらに，賞田廃寺跡は，このたびの調査の成果に基づいて，国指定史跡の文化財専門審議会の答申を得た（昭和45年12月12日）。今後，賞田廃寺は，国指定史跡として保存されることが確実となり，喜ばしい限りである。このたびの調査の成果として明らかになった古代寺院の一部が，単なる賞田廃寺の資料としてだけでなく，今後の寺院址保存対策のための具体的資料として活用されることを切望する。

2，経　過

今回の発掘調査は，予備踏査で確認された５つの基壇状地形のうち，４か所と，東築地，西築地，南築地，南回廊，南西築地角，および近接して宅地工事で発見された窯址の露出部分の発掘を計画した。窯を除き，発掘予定地に磁北に基ずく東西南北を方向基準とするグリッドを設定し，原点を第Ⅰ基壇上に設置した。以下，ＧｒＥ，ＧｒＷ，ＧｒＳ，ＧｒＮは，原点からの方向，東，西，南，北を表わし，数字は距離（単位ｍ）を表わす（GrE 15，GrN 13＝原点から東15m，北13m地点）。各トレンチは原則としてグリットに乗せて設定した。基壇状地形には，一応，第Ⅰ基壇，第Ⅱ基壇，第Ⅲ基壇，第Ⅳ基壇，第Ⅴ基壇の仮称をつけ，Ⅰ～Ⅳまでを発掘することとし，それぞれに原則として東，西，南，北各方向のトレンチを設定することにした。

各基壇トレンチ，および，トレンチは次のとおりである。

1．第Ⅰ基壇

E_1，E_2，E_3，W_1，W_2，N_1，S_1の各トレンチを設定。

2．第Ⅱ基壇

E_1，W_1，E_2，W_2，N_1，S_1の各トレンチ設定

3．第Ⅲ基壇

E_1，W_1，N_1，S_1の各トレンチ設定

4．第Ⅳ基壇

抹消（詳細は後記）

5．ＥⅠトレンチ

東築地線追求トレンチ

6．ＳⅠトレンチ

南回廊追求トレンチ

7．ＳⅡトレンチ

南築地追求（SⅡ-1），南回廊追求（SⅡ-2）トレンチ

8．ＷⅠ，Ⅱトレンチ

西（門）築地追求トレンチ，Ⅰは寺域内，Ⅱは寺域外

9．ＷＮⅠトレンチ

西門北側追求トレンチ

10，SW_1～３トレンチ

築地南西角追求トレンチ

11，窯

発掘経過

昭和45年５月８日

設営および，グリッド原点設定

５月９日

第Ⅰ基壇各トレンチ設定，WⅠトレンチ設定

5月16日

E_1，E_2，E_3，N_1，W_3トレンチにて石英粗面岩製地覆石，延石，東階段を検出，第Ⅰ基壇は，1辺12.30mの正方形壇上積基壇＝塔跡と判明。

5月18日

第Ⅲ基壇に各トレンチ設定。

5月23日

第Ⅲ基壇E_1，W_1トレンチで東側．西側の基壇側面列石と瓦溜，S_1トレンチで玉砂利敷置を検出。

5月26日

第Ⅱ基壇E_1，W_1トレンチ設定，W_1で瓦溜検出。

5月27日

第Ⅲ基壇N_1トレンチで第2層目の瓦溜層検出。基壇北側面確認＝地山削出である。

5月30日

第Ⅲ基壇N_1トレンチで3層目の瓦溜を確認。二度改修されていることが判明。

窯址露出部調査。

第Ⅰ基壇で心礎抜取穴確認，残溜物なし，

6月3日

SⅠトレンチで南回廊南側溝跡，瓦溜検出。第Ⅳ基壇W_1トレンチ設定ー用水荒備用砂置場跡であることが判明。基壇名抹消。

6月6日

WⅠトレンチで西回廊基底部検出。

6月8日

WⅠトレンチで石英粗面岩製壇上積基壇東側階段検出。

第Ⅱ基壇は上部破損が著しいが，一辺8m程の正方形の小基壇であることを確認。

6月12日

WⅠトレンチで壇上積基壇西側検出ーこの基壇を一応西門とする。

（このころから入梅，雨天の日が多くなり作業進行が著しく遅れる．）

6月22日～27日　雨天休業

6月29日

WN_1トレンチ，EⅠトレンチ設定。

7月6日

EⅠトレンチで東築地基底部とその両側の溝を検出。

7月10日

SⅡー1トレンチで南側築地底部，犬走，溝を検出。

7月16日

S·W_1トレンチ設定。

7月20日

SW$_2$トレンチ設定。

SⅡ－2トレンチで南回廊の瓦溜検出。

7月23日

実測開始，測量開始。

7月27日

SW$_3$トレンチから点々と築地瓦出土。

7月29日

SW$_3$トレンチで西側築地基底部と内側溝を検出。

8月1日～

各部写真，実測。

8月2日

WN$_1$トレンチで西門基壇北外側列石を検出。一部埋戻しにはいる。

8月5・6日

埋め戻し。

8月7日

撤収。

ここに，延べ61日におよぶ発掘調査を終了した。

発掘調査の結果，塔，講堂，西門の各基壇，南築地，東築地，小基壇，窯址等の遺構と伽藍が一町四方であることが確認された。以上の遺構配置から，伽藍配置は一応法起寺式と推定されるに至った。一方，遺物は，飛鳥様式から，鎌倉初頭の各種瓦が遺構と関連して出土し，また，奈良三彩，緑釉，舶載磁器，須恵器，土師器，瓦器，釘片等が検出されたが，仏具関係のものは全然検出されなかった。

遺構の残存状態は，礎石等上部のものこそ損失していたが，基壇自体はきわめて良好に遺存し，今後，もし全面発掘調査がなされるならば必ずや寺院全貌が検出されるであろう。

今回の調査は，上記の目的で遺構存在自体の確認であるため，遺構露出状態で発掘を止めているため，各遺構自体の築造方法，技術等については解明できなかった。

調査の結果，第Ⅰ基壇は，奈良時代初めに建立された石英粗面岩製の壇上積基壇の塔基壇と断定され，西門も同時期の壇上積基壇であったことが判明した。壇上積基壇の出土は，地方寺院としては全くまれな出土例であり，西門のそれに至っては，

第4図① 地 元 見 学 会

全国的にもまれなものであろう。同時に，このことは，壇上積基壇が単に中央の模倣的要素だけで造営されたのではなく，賞田廃寺造営に際し，技術的にもさらに社会的意義をも，ある意味で消化していたことを示すものではなかろうか。

第4図② 岡崎市長視察

第Ⅲ基壇は，塔との位置関係から一応講堂に比定しているが，塔以前，白鳳の建立であり，その後，天平，平安と二度の改築がなされ，賞田廃寺の終末まで存在した，まさに中心的存在の建物である。建立時は金堂であったと考えられるが，最終時期の遺構検出で発掘を止めているので，その変遷については，今後の調査，検討をまたなければならない。あるいは，西塔が存在し，第Ⅲ基壇は金堂であり，第Ⅲ基壇の北に講堂基壇が埋もれている可能性もあるが，今回はそこまで追求しえなかった。

出土遺物中，特に注目されるのは，飛鳥様式の丸瓦片3片と奈良三彩である。前者はこれまでまったく知られていなかったもので，備前では唯一の発見例であり，これまでの賞田廃寺の創建時期を再検討させるものである。一方，奈良三彩は，岡山県下三例目①の出土であり，寺院址出土としては最初の出土例である②。このことは，賞田廃寺の意義を考えるうえに重要な資料となるであろう。

いずれにせよ，賞田廃寺は，飛鳥時代末に建立し，奈良時代初頭に伽藍配置も完了し最盛期を迎え，その後，ゆるやかに衰微しながら鎌倉時代前期まで存在していたことが，今回の調査により判明した。しかし，諸般の事情で，金堂，食堂，南大門，中門等の基壇や，西塔存否の追求，さらに，寺域外の雑舎，工房等の追求，遺失遺構の構造的追求までには至らなかった。今回の調査は，あくまで賞田廃寺の一貌を明らかにしえたにすぎず，賞田廃寺の全貌を明らかにするには，今後の調査をまたねばならない。

（水内昌康）

註① 第四章39・48頁参照。

② 岡山市一宮の神力寺跡でも二彩の小塔破片を出土しているが，現在の所，寺院址で明確な三彩出土は賞田廃寺が唯一の出土例であり，他ではまだ発見されていない。

第三章　遺　　構

今回の調査は，第二章で記述しているように，賞田廃寺址の史跡指定の必要資料を検出することにあり，遺構の保存を前提としている。遺構の検出にあたっては，その存在確認を第一として発掘を進めることが基本的方針であった。従って，今回の発掘は，一部のトレンチを除いて各トレンチとも遺構が完全に露出した状態で発掘を止め，一部切断による各遺構自体の構造的様相，技術的内容，時期的変化の状態等の追求は一切実施していない。また，各遺構の推定も，全てトレンチによる検出部分にに基づく復原的推察であり，どの遺構も全面発掘による全面検出はなされていない。

一方，賞田廃寺に関する文献は，一例も発見されていたい。賞田廃寺址の西の山腹に現存する安養寺の寺伝によれば，当寺は賞田廃寺の後身と伝えられ，賞田廃寺の位置から後世に西の尾根に移り，さらに近世になって現位置に移ったと伝えられる。しかし，記述内容自体信じ難い所があり，寺伝そのものの信憑性は稀薄であるが，全体的動向の伝承をあるいは伝えている可能性はあろう。賞田廃寺址のずぐ西の尾根は，堂屋敷の名を残し室町時代初期の瓦を出土する。推定的であるが，賞田廃寺に繋がる中世寺院址が存在している可能性が大きい。

今回の調査の結果，賞田廃寺は，飛鳥時代末に創建され，白鳳時代末若しくは奈良時代初頭に伽藍が完備し，その後，徐々に衰微しながら，鎌倉初頭まで存在していたことが判明した。しかし，今回の発掘調査は，寺域全体から見ればごく一部を明らかにしえたにすぎず，賞田廃寺の全貌の究明は今後の調査を待たねばならない。

一，検出遺構

1，第Ⅰ基壇（塔基壇）（第6～8図，図版第2～6）

第Ⅰ基壇は，石英粗面岩製壇上積基壇＊であり，東階段，正方形プラン，中央部での心礎抜取り跡と確定される攪乱穴の検出から塔基壇と断定される。この基壇に設定したE_1，E_2，E_3，N_1，W_3トレンチで，石英粗面岩製壇上積基壇の基底部が検出されたが，S_1，W_1トレンチでは検出されなかった。このトレンチ断面で抜取り跡が確認されたが，基壇の南，西両側及び東側南端は，すでに破損喪失していることが確認された。

E_1T（Tはトレンチの略，以下同じ）GrE10からこの基壇東斜面にかけておびただしい瓦溜が検出され，その下から石英粗面岩の東側階段及び，それに続く両側の地覆石，延石が検出された。階段は，延石を入れて三段残存し，一段の出が25cm，厚さ10cm（第一段目は12cm）であり，東側地覆石との関係から復原するとあと三段あったと推定される。耳石枘溝と束石枘穴から階段幅は，登葛石外面間が現測値で155cmとなり，若干の弛をみると小尺5尺（151.5cm）であったと推定される。階段の復原から，基壇の高さは（延石上面から葛石上面まで）小尺2尺（60.6cm）であったと考えられる。基壇

賞田廃寺址地形測量図

S＝1/600

伽藍配置図

は一部確認に基ずく復原による

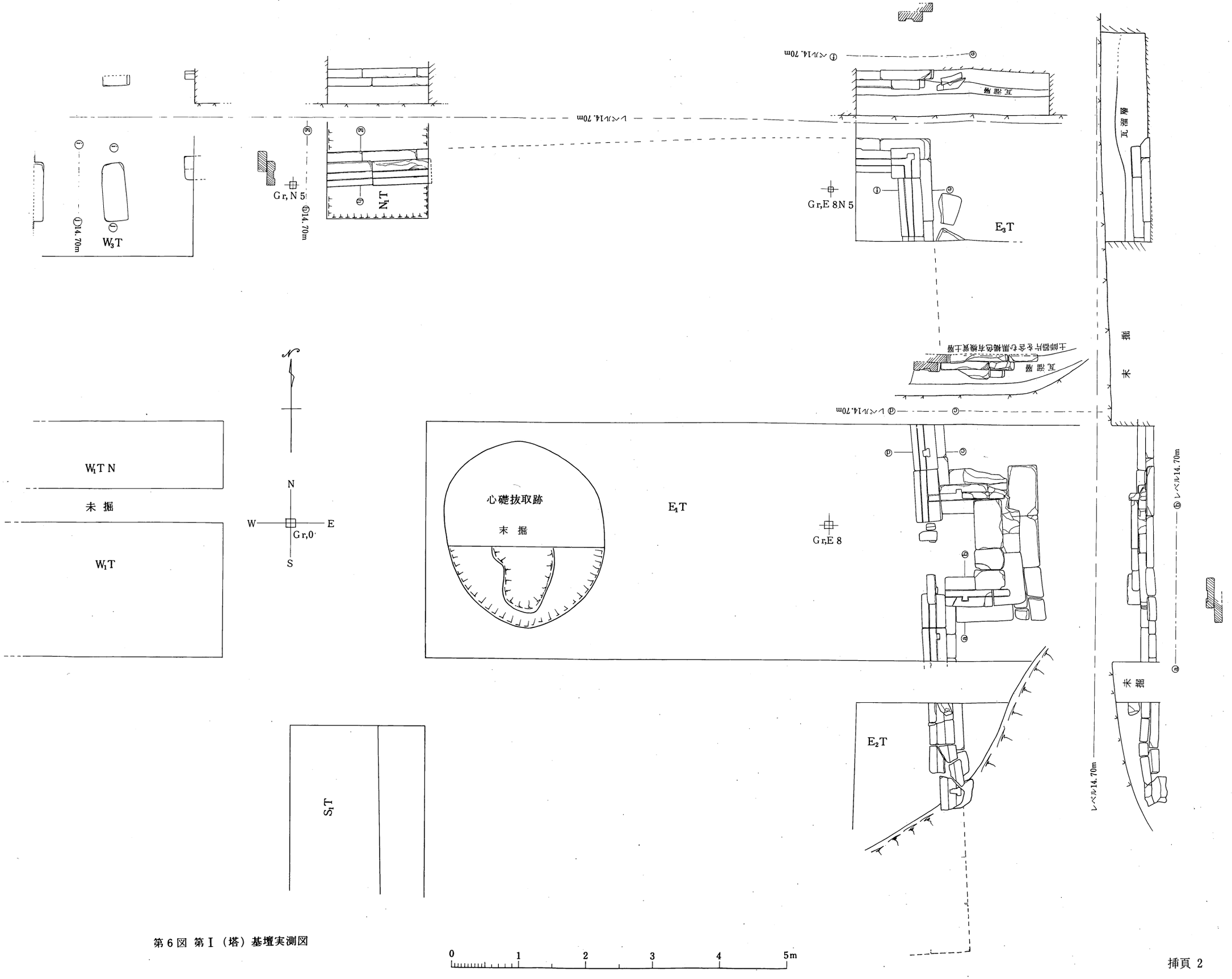
は推定による

中軸線

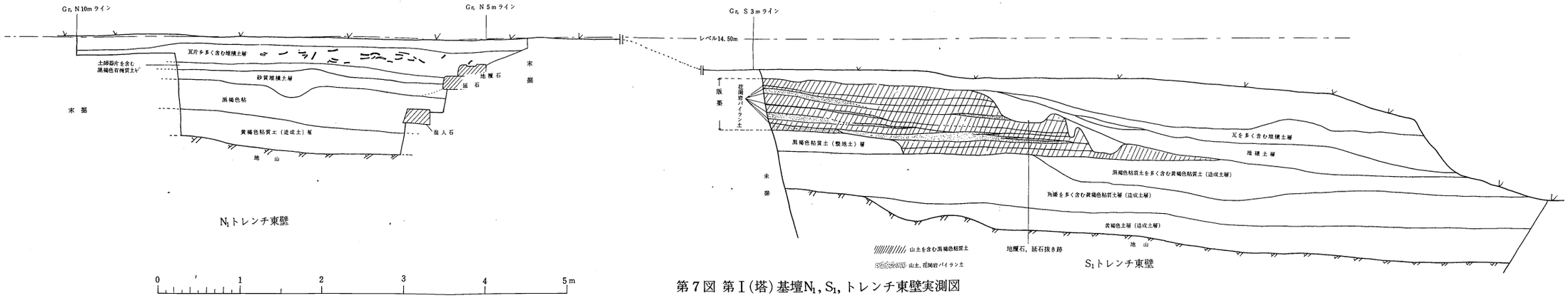
等高線高は標準海抜高である

第5図

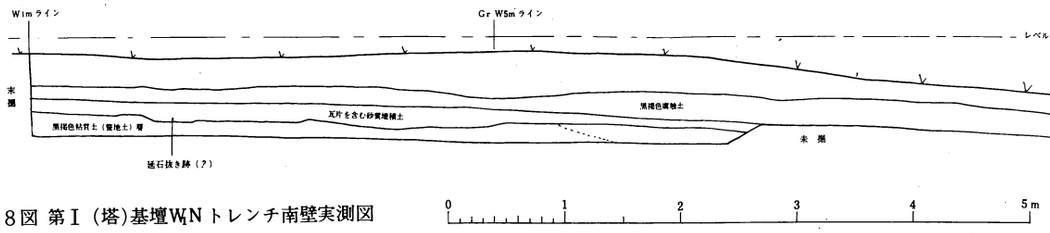
挿頁 1



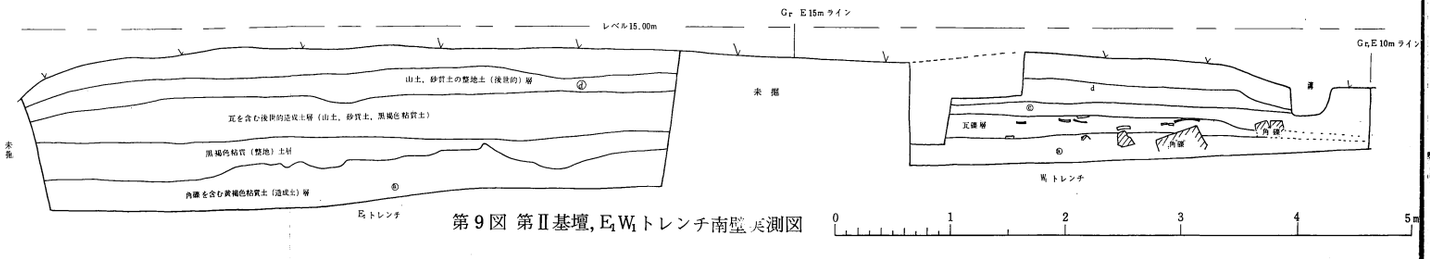
第6図 第Ⅰ（塔）基壇実測図



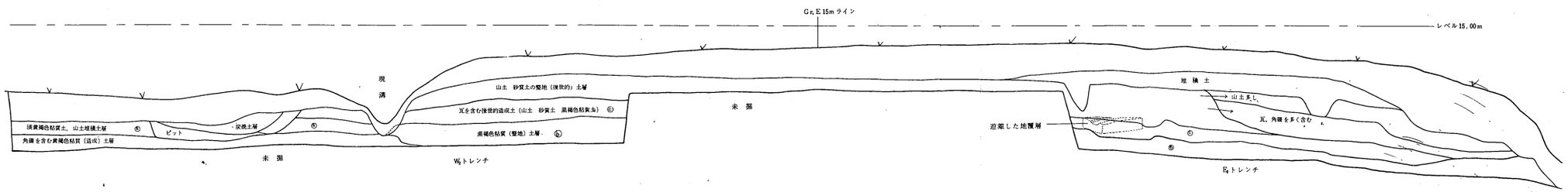
第７図 第Ⅰ(塔)基壇N_1, S_1, トレンチ東壁実測図



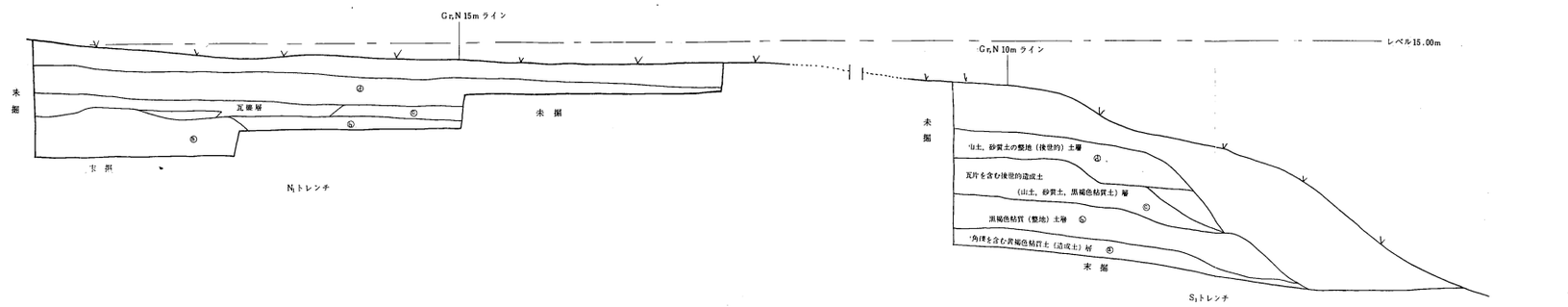
第８図 第Ⅰ(塔)基壇W_1Nトレンチ南壁実測図



第９図 第Ⅱ基壇, E_1W_1トレンチ南壁実測図



第10図 第Ⅱ基壇E_2W_2トレンチ北壁実測図



第11図 第Ⅰ基壇，N_1, S_1トレンチ東壁実測図

規模は，前記の階段の復原から基壇東西中心線が推定でき，この中心線と，E_1Tで検出した東側地覆石の束石枘穴，E_3Tで検出した基壇北東角，及びその束石枘穴から復原できる。これによると，塔基壇は，葛石上面で小尺38尺（11.514m）四方，柱間が両脇小尺7.25尺，中央小尺9尺の三間一戸の建造物であったと推定される。軒出は，柱間からみて小尺9尺程度であったと推定される。ただ，N_1Tではこの柱間にあたる地覆石上に束石枘穴が存在しない。延石外面間は，小尺39.5尺（11.97m・復原現数値11.96m），地覆石外面間は38.5尺（11.66m）であったと考えられる。壇上積基壇の使用石材は石英粗面岩であり，計測できる地覆石の計測値を記すと，長さ77.2cm（小尺2尺5寸5分），幅35.8cm（小尺1尺5寸5分），厚さ13.9cm（小尺4寸6分），枘溝上幅10.5cm，同底幅9.5cm，同深さ1.5cmである。塔基壇として五重塔の存在を考えるには若干小さいようであり，三重塔であった可能性が強い。塔心礎の追求は，E_1Tでおこなったが，基壇中心部に，径約2m・2.3mの楕円形の穴跡が検出され，これを追求した所，心礎は検出しえず，後世の心礎抜取り跡であることが穴跡の断面で確認され，根石すら残存していなかった。

基壇は，現状で地覆石上面のレベルまで耕作土となっているため，基壇の上半部が破損し，礎石，根石，掘り方，さらに嵌石，束石は検出できなかった。また，これらの石材は，破片の一部が遊離状態で検出されたのみで，遊離状態でさえ検出されず，石材採集，耕作でほとんどが抜き取られていた。

基壇外の溝跡は，各トレンチで検出されなかったが，N_1T東断面で南地覆石，延石抜取跡外30cmの所に幅50cm，深さ10cmの溝状遺構が確認された。これは，埋土から一応溝と確認されるが，ただ土地をU字形に掘っただけで小円礫等による埋設などの溝施設は設けられておらず，基壇構築に比べると著るしく劣る。また，N_1T東断面でも北側延石外1.56mの所に幅60cm深さ12cmの浅いU字状の溝状落込みが確認されたが，溝と断定するにはあまりにも拙劣であり，埋土からも明確には溝跡と断定しかねる。

塔基壇の造成は，旧地表を緩るやかな面に整形し，その上に角礫を含ませた粘質性のある山土を厚く盛土して水平な基壇基礎地形（じぎょう）を造成している。この地形の上に黒褐色有機質粘質土層（粘土と灰，炭粒子の混練したもので非常に固く締る）を整地基礎土層的に水平に盛土し，この上に黒褐色有機質粘質土（厚さ10cm前後）と山土，花崗岩バイライン土(厚さ1～2cmと10cm程)による版築で基壇土壇を造成している。この版築造成は，第Ⅲ基壇の様に整然とした互層状の造成でなく，それぞれの土層がブロック的にかなり入り乱れて雑然とした版築である。この版築造成土壇周囲を削って，石英粗面岩製壇上積基壇による基壇化粧が施こされている。

塔基壇の瓦溜の状況は，E_1，E_2，E_3，N_1，W_3Tで累積的推積状態が検出されたが，S_1，W_1Tでは，若干瓦片が検出されただけであり，地覆石，延石の破損と合わせて，西，南は，後世の畑作などでかなり攪乱を受けていることが判明した。

塔基壇にともなう文様瓦は，賞田廃寺第Ⅱ様式から同第Ⅴ様式までの瓦であるが，同第Ⅲ様式のものが圧倒的に多くそれ以外は少数である。この瓦の様式の状態からみて，塔の建立は，賞田廃寺第Ⅲ様式の時期，つまり白鳳時代末か奈良時代の初頭でその後瓦の差しかえなどされながら平安時代前半まで続存したと推定される。出土する瓦の大多数は炎を受けたものであり，塔は火災により焼失したと考えら

れる。

2，第Ⅱ基壇（第9～10図，図版第7・8）

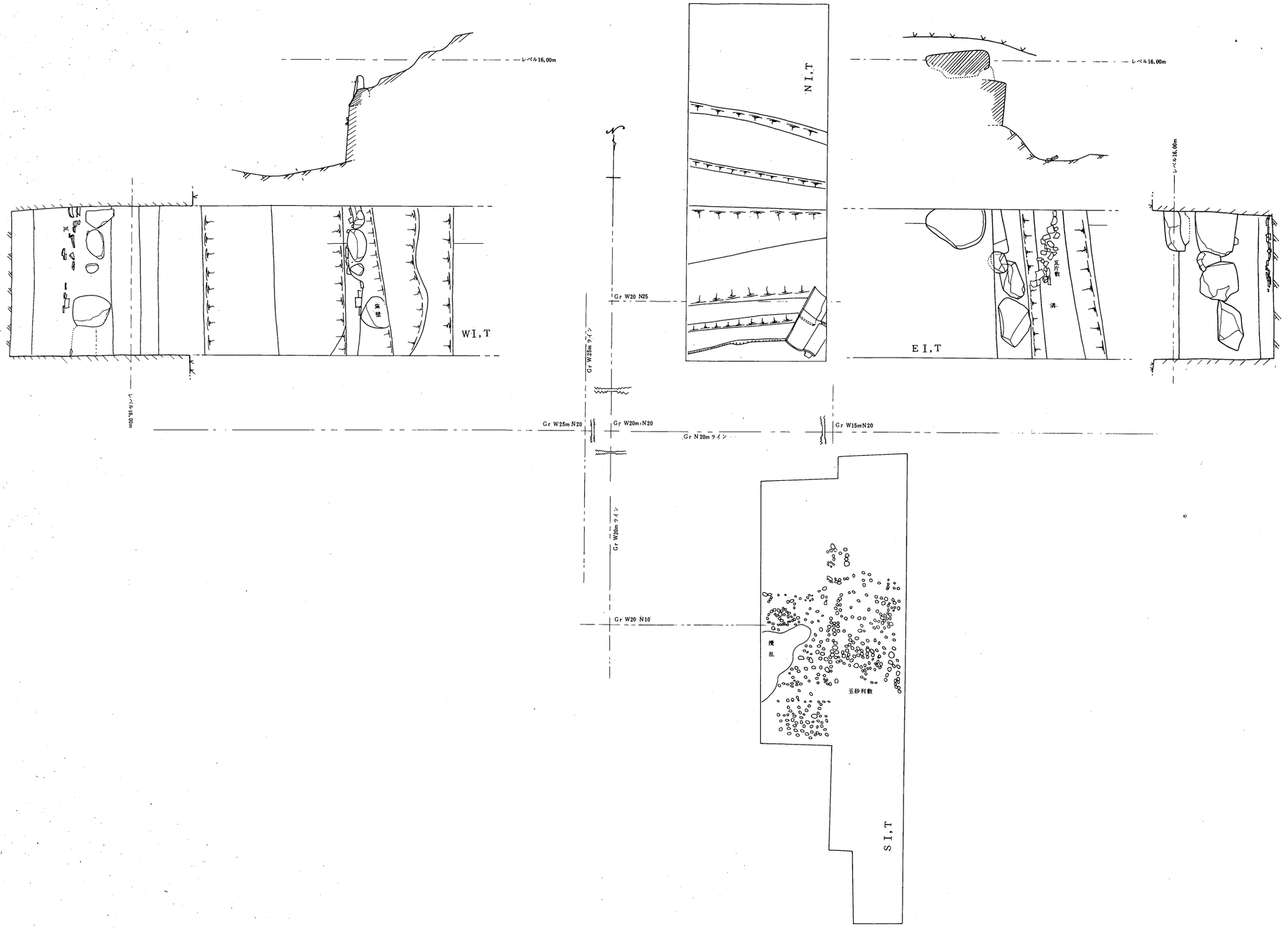
塔基壇北東に近接する基壇であるが，各トレンチで平面的に遺構は，検出されなかった。しかし，W_1Tを除く各トレンチで，塔基壇の下部で検出された黒褐色有機質粘質土整地土層が検出されて，基壇が存在していたと断定され，この整地層は，W_2T GrE 10で下の造成土層を浅く掘り込み，そこから東方へ盛土していることが確認された。またN_1T東断面GrN 17でも同じような掘り込みから黒褐色有機質粘質土層が南へ延びているが，南はGrN 12附近で現地形が崖となっているため，それに切られて不明である。しかし，S_1T東断面GrN 9で，黒褐色有機質粘質土層が，緩やかな肩を持つので上部の基壇南端は，このあたりであった可能性が強い。E_1T，E_2Tでこの土層は東え延びているが，E_1T，E_2TともGrE 20～21で山土と漸層的になり，さらに東はGrE 22～23で谷に切られて不明である。ただ，E_2T北断面のGrE 18附近でこの土層に幅70cm，深さ10cmの浅い溝断面が認められ，これより外の土層上面が乱れていることから上部基壇の東端はGrE 18附近であった可能性がある。以上の断面観察から，一辺8m程のほぼ正方形の小基壇が存在していたと推定されるが，黒褐色有機質粘質土層上面まで後世に削平されたので判然としない。瓦出土状態は，W_1Tで累積的推積状態の瓦溜が検出され，また，E_2Tでは比較的集中推積状態の瓦溜が存在したが，E_1Tでは散在的であり，W_2，S_1Tでは点在的に少なかった。出土した文様瓦は，大多数が賞田廃寺第Ⅲ様式のものであったが，黒褐色有機質粘質土層から飛鳥様式の瓦片が二片出土した。またE_2Tで遊離した状態であるが，前記の黒褐色有機質土層の溝に近接して石英粗面製地覆石一つが検出された。

なお，黒褐色有機質粘土層上には，版築土壇はなく，瓦片を含む山土，粘土，砂混在の造成土があり，後世にこの基壇は黒褐色有機質，粘質土層上面まで削平され，新に地形が造成されたと推定される。

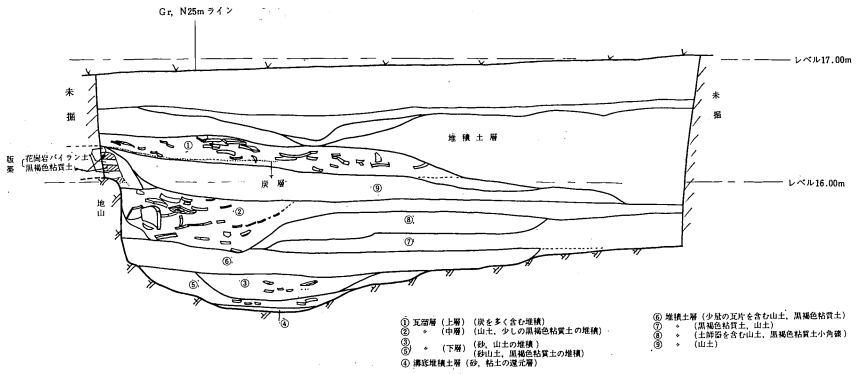
3，第Ⅲ基壇（第12～16図，図版第9～12）

この基壇は，宅地化に判なう進入道施設で，基壇南側面裾が削除され，明瞭な版築が露出し，当初から注目された基壇である。

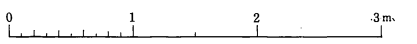
N_1Tで基壇に伴なう瓦溜層が3層存在することが確認され，2度改築がなされていることが判明し，従って，現状で検出される遺構は，3回目の建立にともなうものである。E_1T，W_1Tで自然列石状の基壇化粧遺構が検出された。この遺構は，E_1TではGrW 13.5，GrN 21～22に存在し，比較的大きな自然石側面で面を取った列石で一種の乱石積の基底部であり，一つ上部葛石にあたる石が残存しているが，この石はかっての礎石を裏返して転用したものである。この列石が乗る層位は，E_1T，東断面でかっての基壇の溝が埋没し，その上に造成された整地上層に続くことが判明し，列石外に存在する溝と列石と直接関係がないことが確認された。W_1Tにおける列石も同じ状態で，GrW 28.2，GrN 21～22にあり，東側程大きな石を用いず小型の自然石で面を取っているが，一部は窯壁を代用している。残存している部分は基底部で，肩部は破損している。W_1T南断面検討で列石の乗る層位の状況は，東

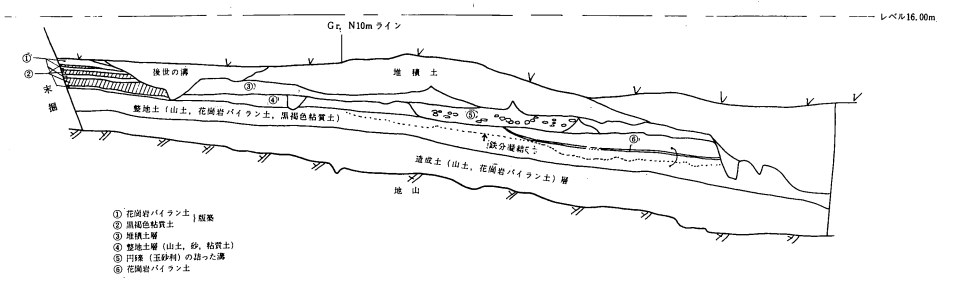


第12図 第Ⅲ基壇（講堂？）トレンチ遺構実測図

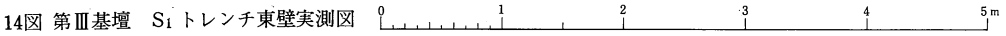


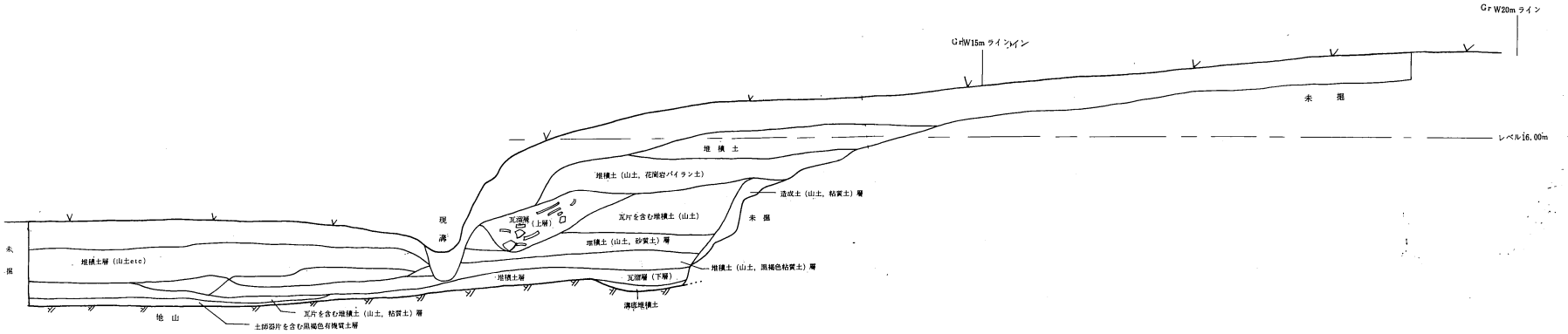
第13図 第Ⅲ基壇 N_1 トレンチ西壁実測図



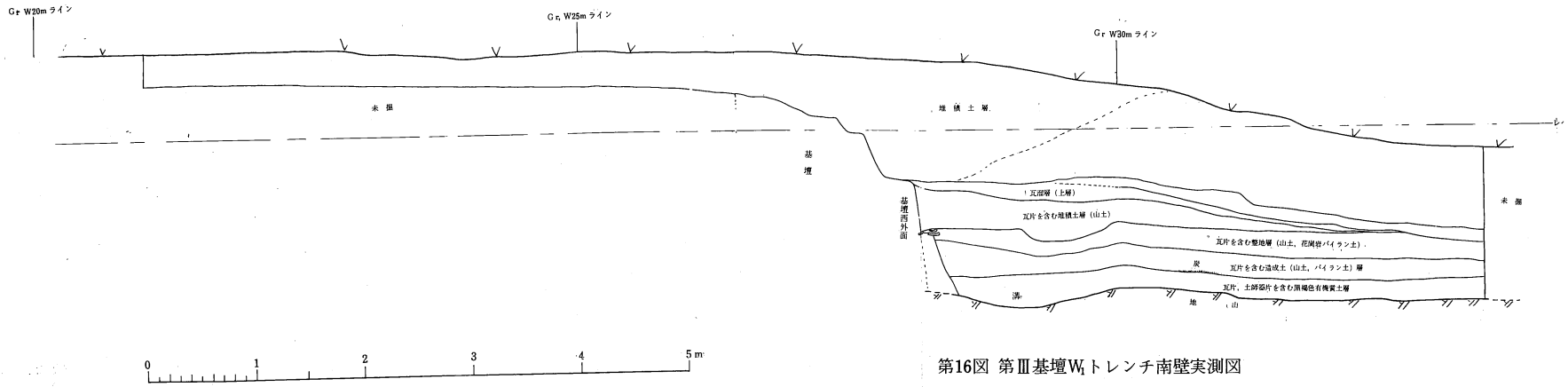


14図 第Ⅲ基壇 S_1 トレンチ東壁実測図





第15図 第Ⅲ基壇 E_1 トレンチ南壁実測図



第16図 第Ⅲ基壇 W_1 トレンチ南壁実測図

側と同じであり，レベルも同一であるが，この列石外1mの所には幅90m，深さ12cm程の溝が存在していたことが判明した。また，それぞれの列石外は，列石が斜面状にある程度埋まった上に瓦溜層が堆積している。

N_1Tでは，上記列石に続く北側列石は検出されなかったが，累積的堆積の瓦溜が現われ，瓦溜の底には，炭化物を伴なって丸瓦と平瓦が組合った状態の堆積が検出され，まさに軒の焼け落ちた状態である。基壇南側は，現状で崖状斜面を形成し，過去にも若干削除されているようで列石等遺構は残存していない。又，基壇上面には礎石等は残つていない。

これら第Ⅲ基壇最終遺構に伴なう瓦片は，賞田廃寺第Ⅱ様式の瓦片を比較的多く含むが，同第Ⅵ様式瓦，第Ⅶ様式瓦を供伴する。瓦からみて第Ⅲ基壇の最終建造物は，前代の使用できる瓦を使用して平安時代前半に建立され，鎌倉時代前半に焼失するまで存続したが，以後は廃絶したと推定される。基壇規模は，東西列石外面間で15.5m（小尺約51.5尺）南北（北端はN_1T断面確認，南端現崖肩）11.5m（小尺約38尺3寸）である。

N_1Tで確認された第2瓦溜層は，GrN25を中心に基壇外に沿う幅1.4m，深さ約30cmの溝に密集的に瓦が埋没した状態であ　この瓦溜層に伴なう遺構はこの溝以外にN_1Tでは検出されず，又，E_1T，W_1T，S_1Tでも検出されていない。ただE_1T，W_1Tでは，上記列石外の3層下に地山を掘った浅い溝（東側・幅80cm深さ10cm，西側，幅180cm深さ20cm）があり，同一様式の瓦片を出土する。しかし，この溝は層位的にみて，最初の時期のものであり，そのまま転用されたと推定される。また，この瓦溜に続く東西両側の瓦溜層は，E_1T，W_1Tで検出されず，最終建築時の基壇外整地で除去されたと考えざるをえない。この瓦溜から出土する瓦は，賞田廃寺第Ⅱ様式瓦片や同第Ⅴ様式瓦片の外に著しく行基葺瓦が多い。いずれにせよ，第2瓦溜層に伴う基壇遺構は，今回最終基壇を掘り下げていないため，全く不明であるが，奈良時代後半に改築が第Ⅲ基壇ではおこなわれていることが判明した。

N_1Tで検出された最下瓦溜層は，地山に掘られた溝中に埋没したものである。この瓦溜層に伴なう溝は，幅2.4m，深さ35cmの地山に掘られた幅広いもので，W_1Tで検出された地山に掘られた幅広い溝や，E_1Tの地山溝に続くものと考えられ，第Ⅲ基壇創建当時のものと考えられる。N_1Tでは，GrN24.4に地山削り出による基壇側面整形が垂直に溝に続き，その上に黒褐色有機質粘質土と山土，花崗岩バイラン土の互層のきっちりした版築が盛土されている。

創建期の基壇化粧が明確に残存している所はどのトレンチにもないが，W_1Tの最終基壇列石下の西側面に平瓦が水平に入っているのが，点々と認められる。この瓦が創建時期の基壇化粧の残存ともみられ，第Ⅲ基壇創建時の基壇化粧は瓦積基壇であった可能性が強い。しかし，基壇化粧は，N_1Tで確認できないし，又E_1Tでは溝内側地山上に最終期の列石が据えてあるので確認できない。

第Ⅲ基壇創建時期の規模は，S_1T東断面で確認される版築や，E_1T，W_1T，N_1Tの溝から推定して東西15.20m（小尺50尺），南北13m（小尺43尺）高さ1.8m（1間）前後であったと推定される。

創建時期は，伴出瓦片が賞田第Ⅱ様式の瓦であるから白鳳時代初期に推定される。N_1Tの地山上溝の埋土の状況をみると，溝に埋土が溜まったので再度溝を改修した形跡が確認され，創建期の建造物はかなり長期にわたって存続したことをうかがわせる。

第Ⅲ基壇建造物は，二度にわたって再建され，基壇部もその都度改修されたことが判明したが，基本的には最初の基壇を踏襲しての改修であり，規模の大きな変化はなかったと推定されるが，最終時期に若干南北が小さくなったようである。

基壇南側は，後世の削除で破損して判然としないが，S_1Tで，GrN11から南に小円礫が散布し，S_1T東断面でGrN8～GrN9.5の幅1.5m，深さ10～15cmで小円礫の詰った溝が確認された。版築や下の造成土層との関係から創建期にともなうものと考えられるが，以後，第Ⅲ基壇上の建造物が喪失するまで続いて利用されたと推定される。

基壇造成は,やや南に急な花崗岩バイラン土の地山斜面をそのまま利用し，北側は地山を削り出し，南側の低い方は山土，花崗岩バイラン土，黒褐色有機質粘質土の混練土を平に盛土して上面が平な斜面の基壇基礎地形(じぎょう)を造成している。その上に黒褐色有機質粘質土と山土，花崗岩バイラン土による版築を造成したものである。従がって，南側は全部版築造成されているが，北側は，大部分が地山削り出しによる側面整形でその上に約45cmの厚さの版築が盛土されているだけである。この基壇の版築造成は，整然としたもので黒褐色有機質粘質土と山土，花崗岩バイラン土の互層がほぼ等間隔で水平に積み固められている。しかし，第Ⅰ基壇にみられた，基壇基礎地形上の整地土層的な黒褐色有機質粘質土の造成は，この基壇では検出されなかった。

いずれにせよ，第Ⅲ基壇は，現状で確認される賞田廃寺の最古の遺構であり，また最後まで存続した遺構である。最初の建立であることや基壇形状から，この基壇上建造物は，創建時には金堂として建立されたと考えられるが，塔，西門との関係から伽藍配置上は，一応講堂に比定される。この矛盾に対し，現状では，伽藍完成時に金堂から講堂に転化されたという苦しい推定をしているが，伽藍配置自体を変えて西塔，または西金堂の存在を想定し，第Ⅲ基壇の北に講堂を想定する考えもできる。

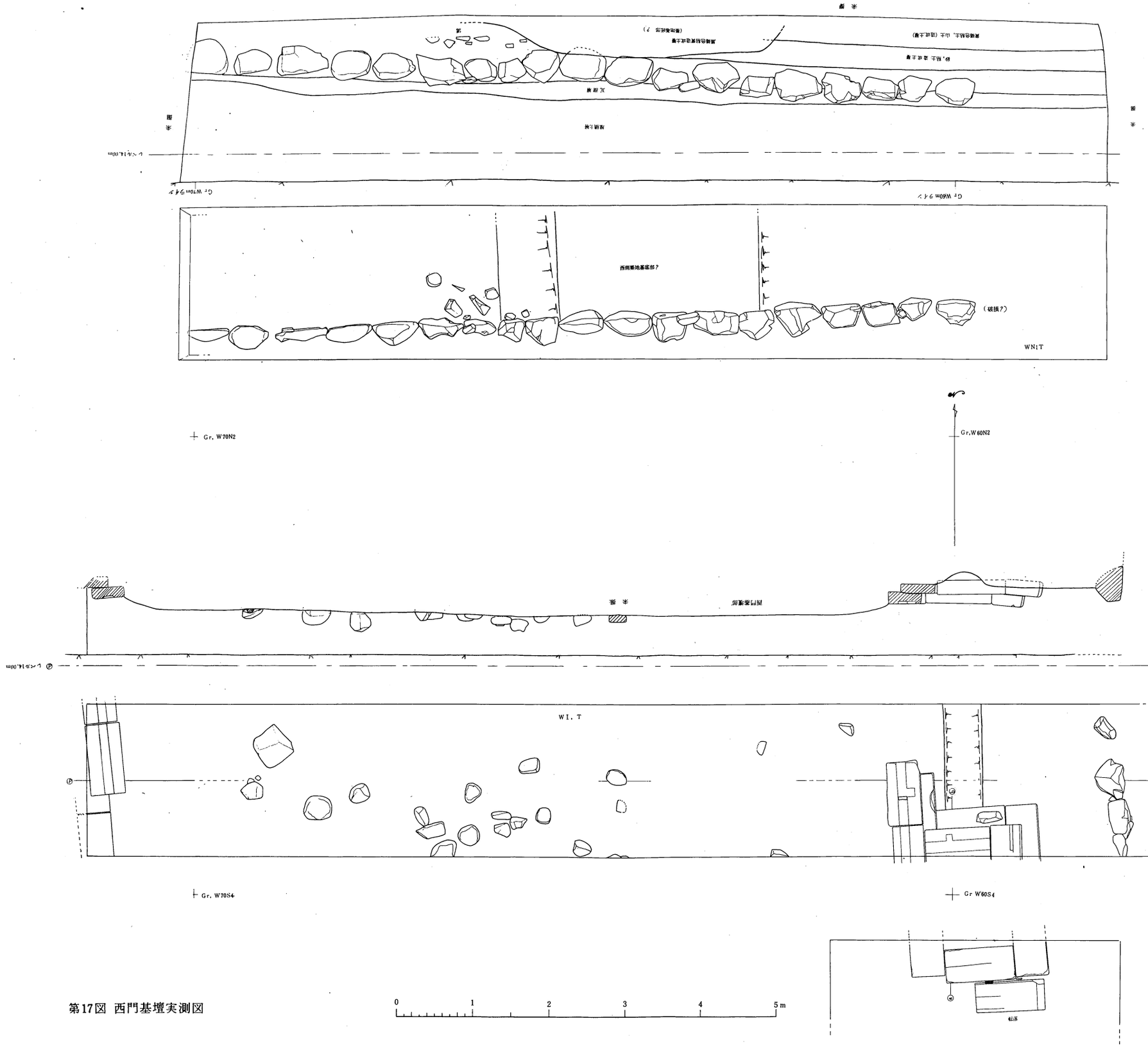
4，第Ⅳ基壇　削除

予備踏査で第Ⅰ基壇の南南東30mの所に一辺約10m，高さ1mの基壇状地形が確認された。発掘の結果，この土壇は，あらいざらざらした砂，山土，花崗岩バイラン土をたんに盛っただけのものであり，地元の人の話では，昔の用水荒備用砂置場であったとのことである。以上から，この基壇状地形は，後世の用水関係のものと判明し，基壇番号を抹消した。

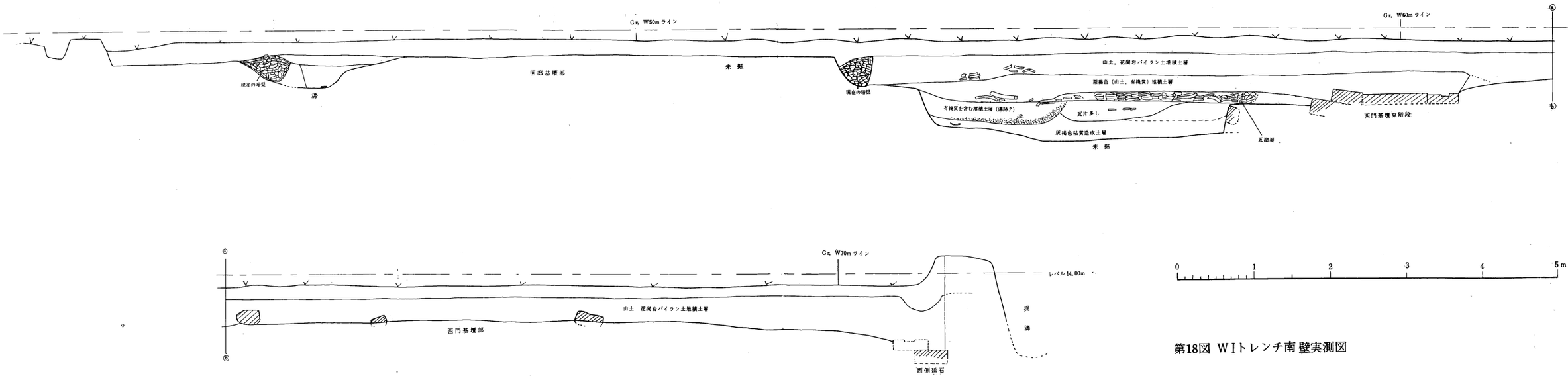
5，西門基壇，西回廊基壇（第17・18図，図版第13～18）

WIT，GrW46.3～53.5地点で溝をもつ造成土壇と，GrW60,GrW70附近で石英粗面岩製壇上積基壇地覆石,延石,階段が検出された。位置からみて，前者は西回廊基壇部，後者は西門基壇と断定された。

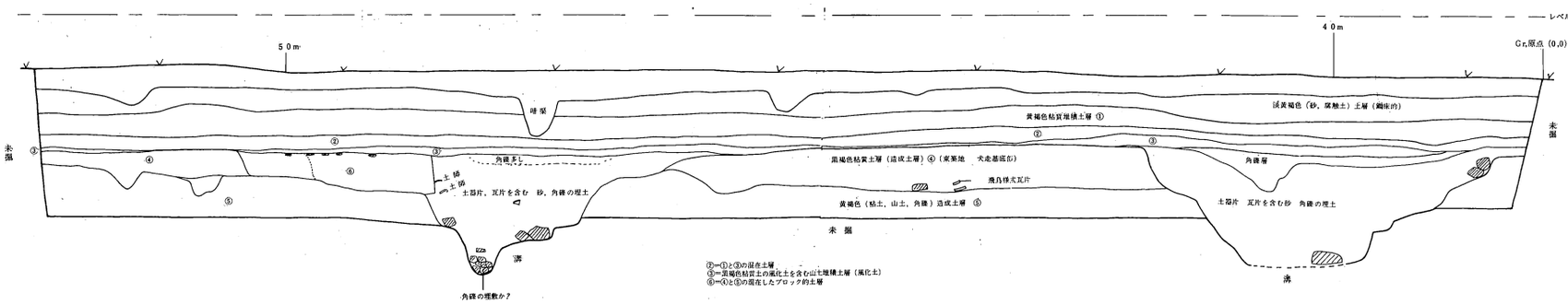
GrW60附近で，壇上積基壇東地覆石，延石とそれに続く東側階段が検出されたが，階段は，延石と地覆石が残存するだけである。階段側方地覆石に刻まれた嵌石枘溝，束石枘穴から復原すると，階段は，登葛石間現測値が165cmとなり，同外面間が小尺5尺5寸（166.6cm）であったと推定される。階段数は，延石と一段目の石の差が25cmであるから，基壇東地覆石と組合せて復原すると延石を入れて



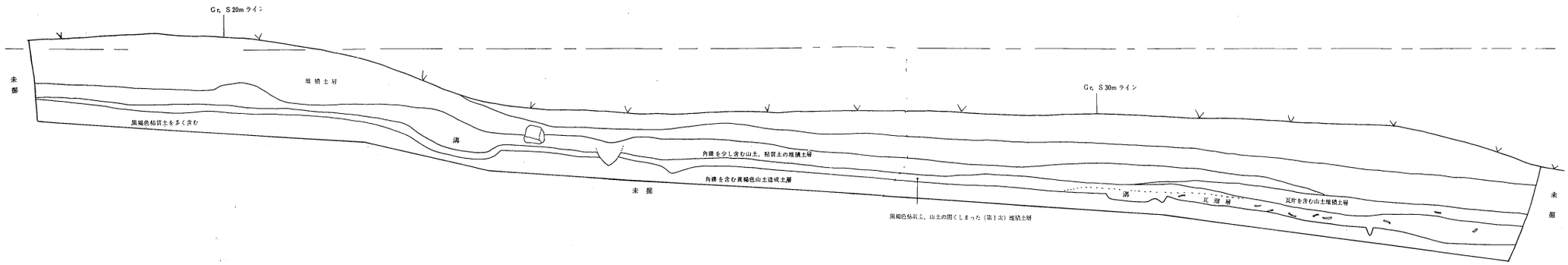
第17図 西門基壇実測図



第18図 WIトレンチ南壁実測図



第19図 ＥＩトレンチ南壁実測図



第20図 ＳＩトレンチ東壁実測図

6段であったと考えられる。　西門東階段では2段目以上踏石が残存せず，その厚さが不明であるが，塔基壇東階段では，地覆石に続く1段目の石厚が12cmであるのに対し，2段目以上の踏石の石厚は10cmと薄くなっている。この関係で西門東階段をみると，地覆石続き1段目の石厚が14.5cmであるから2段目以上の踏石の厚さは，14.5cmより，2cm程薄いと推定され，12cmとした。この階段の復原から基壇の高さ（延石上面から葛石上面まで）は，踏石4段（48cm）＋地覆石（14.5cm）＋葛石（14.5cm）であり，小尺2尺5寸であったと推定される。基壇東西の長さは，地覆外面間現測値が10.95m，束石枘穴間が10.80mであり，葛石側面間では小尺36尺（10.91m）であったと考えられる。

南北の柱間は，東側地覆石の束石枘穴と東階段中心線から中央の柱間は小尺9尺であったことが判明し，塔基壇の柱間からみて両脇が小尺7尺2寸5分か，7尺5寸の可能性が強く，一応両脇小尺7尺5寸に推定しておく。梁行柱間は，南北地覆石の追求まで今回の調査で至らなかったので断定しがたい。しかし，基壇幅36尺を基準にして軒の出9尺とし，東延石外溝中心まで地覆石から1.5尺あるから軒の出の基壇外の出は1.5尺と推定され，梁行間は，10尺5寸の二間であったと推定される。以上から西門基壇の南北幅は，一応小尺40尺であったと推定される。基壇上面は，地覆石のレベルまで鋤床となっているため，礎石やその掘り方は確認できなかった。ただ，このレベルで基壇上に花崗岩礫が点在し，あるいは根石の一部の可能性もあるが，明確にはそうと断定しがたい。階段北側地覆石の測値は，長さ85.8cm，幅不明，厚さ14.5cm，枘溝幅14.5cm，深さ2～2.5cm，束石枘穴7×8cmであり，同延石の長さは90cmである。基壇東側地覆石は，長さ84.4cm，幅44.5cm厚さ13～16cm，枘溝幅12.5cm，深さ3～4cm，束石枘穴9×11cmである。また，基壇西側地覆石は，長さ93.5cm，幅45～46cm，厚さ13.6cm，枘溝幅12cm，深さ2cmである。

東延石外に12cmの幅をおいて幅50cm，深さ15cmの土を掘っただけの併行に沿う溝が検出され，溝は階段の下に通じている。

階段の東側に110cmの間隔をおいて延石上面レベルと同じ上面レベルで地覆石と併列する犬走りの側面状に築かれた自然石一段積列石が検出された。この列石に続く北側部分が，WNⅠTでほぼ全面検出され，これらの列石は，自然石側面で面を取って一段列石を築いたもので，壇上積基壇の乗る基礎地形（じぎょう）外側面を犬走り状に固めている列石である。この列石の北東角を一部破損しているが，全体は，東西約17.5m，南北15.5mであったと推定される。

またWNⅠTで北側列石に接して直交する形で，GrW62.5から同65.3の幅で北に延びる黒褐色有機質粘質土の造成土壇状のものが検出され，その西側は溝状の落ち込みをなしている。この造成土壇は，西築地基礎地形（じぎょう）部と考えられるが，今回の調査ではその上部を検出したにすぎない。

一方，東側列石外には明確な遺構は検出できなかったが，当時の地表は一段下っていたようである。

列石の東に4.3mの間隔をあけて，西回廊基壇下部が位置する。西回廊基壇部は，西肩部が現代の水田暗渠で壊され，東肩部が破損し，さらに上面も削平されているが，両側溝から復原すると上面の幅は6.1mで，小尺20尺であったと推定される。基壇部東側には，幅1m，現深さ40cmの溝（東岸は現代の暗渠で破損し不明）があり，西側にも幅1.8m，深さ15cmの溝状のものがともなうが，後世の攪乱により一部判然としない。この現基壇部上面は水田鋤床として残存しているにすぎず，本来の上面は

すでに削平されていると考えられ，礎石，掘り方，板石は検出できなかった。西門基壇復原上面に近い高さと推定してこの基底部は約1ｍ（小尺3尺5寸）の高さであったと考えられる。

ＷＩＴにおける瓦の出土状況は，西門基壇外地形部の高さで列石と回廊基壇部の間に累積集中的瓦溜が存在しているが，西門基壇上には稀に散布しているにすぎなかった。一方ＷＮＩＴでは列石内側地形上面に厚さ20～30cmの集中的瓦溜層が存在し，同じレベルでＷＮＩＴ全体に散布していたが，北側はやや少ない状態であった。

出土する瓦は，賞田廃寺第Ⅱ様式瓦から同第Ⅶ様式瓦までであるが，圧倒的に多いのは同第Ⅲ様式瓦である。又，賞田廃寺第Ⅶ様式瓦と同時代のものと考えられる鬼瓦片をも出土している。

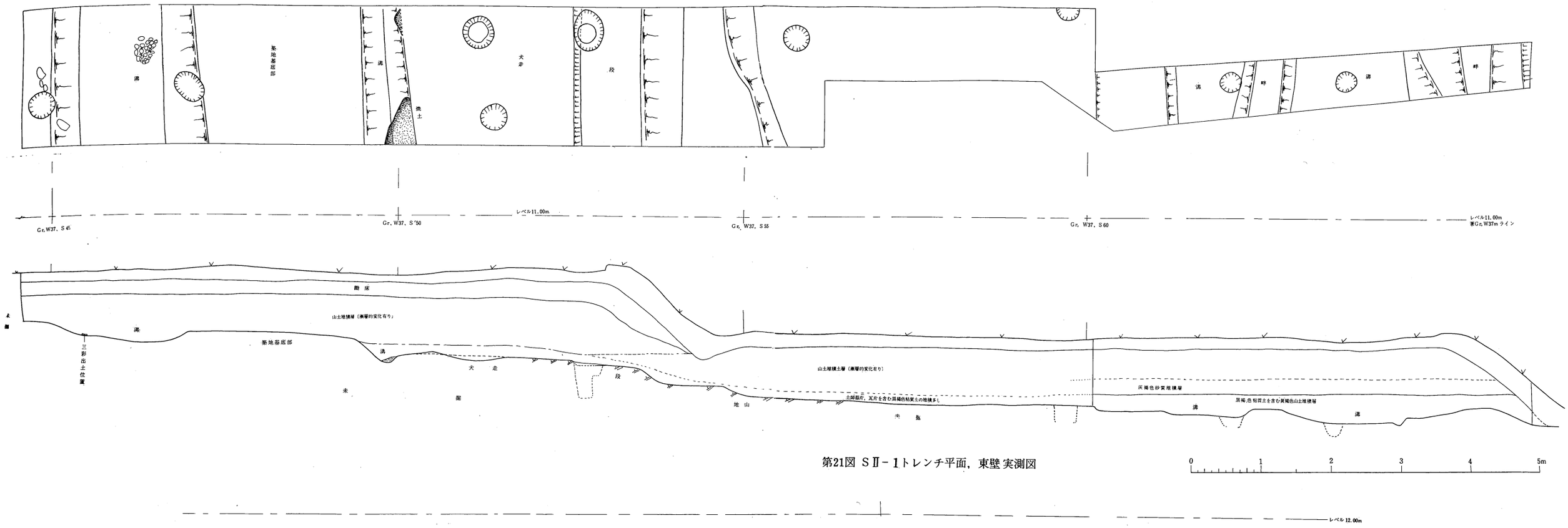
出土する瓦からみて，西門の建立は，塔と同一時期，白鳳時代末から奈良時代初頭と考えられ，その後，第Ⅲ基壇と同様に鎌倉時代初頭まで存続していたと考えられる。

なお，西門基壇西から山裾までのＷⅡＴでは，西門基壇と同一レベルでは，格別の遺構は検出されず，全体の地表下－１～1.5ｍの所では遺構は検出できなかった。又，地表下－1.5ｍ附近から鎌倉時代の備前焼摺鉢片や，中世の土器，瓦片が次々と出土した。

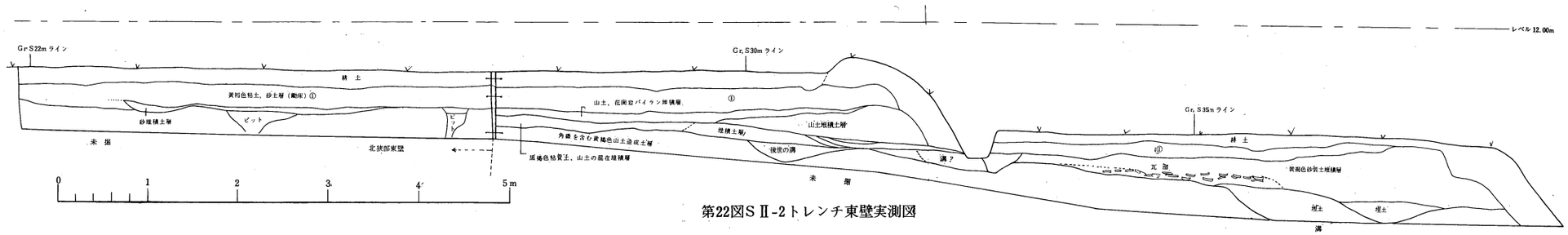
６，東築地基礎地形（第19図，図版第19）

ＥＩＴは，塔基壇東西中線上のＧｒＥ38からＧｒＥ52.4に設定したトレンチであるが，このトレンチでは，基壇遺構が検出されなかったが，東築地基礎地形とその両側の溝が検出された。この基礎地形部は，ＧｒＥ41.8 から46で上部が検出されたもので，地山上（溝底部より推定）に山土，粘土の造成土を60cm程盛土した基礎部の上に，第Ⅰ，第Ⅱ基壇でみられた黒褐色有機質粘質土を整地土層的に厚さ（現状）40cm程盛土したものである。この地形は，上面が後世の耕作で削平され，また両肩部も崩れているが，両溝から肩部幅が約5.2ｍの地形に復原され，位置からみて東築地基礎地形部と断定される。この推定西肩部から2.5ｍ東の地点ＧｒＥ44，ＧｒＮ2.3（ＳⅡ－１Ｔで検出された南築地基礎部上面幅2.4ｍから復原）は，ＷＮＩＴの北列石外黒褐色有機質粘質土による土壇西端（ＧｒＷ65.3，ＧｒＮ3.5）南延長線から109ｍの距離にあり，東西築地基礎外間は丁度１町の間隔である。両側溝も，肩部が崩れていて判然としないが，西（内）側の溝は，上部幅が３ｍある。西溝東側面には段はなく，西側面は二段に掘られ，上側は緩やかであるが二段目はＵ字状の溝をなし底部には角礫の埋設が認められた。東側溝東側面は，肩がはっきりしないが，底部附近に段をもって掘り，西側面も同様に二段に掘れている。底部には，角礫の埋設が認められ，さらに溝下に角礫を埋詰した狭く浅い暗渠状溝が検出された。東側溝の両側面は，上側が急傾斜で底部近くで緩やかになっており，幅は３ｍ前後であったと推定される。この両側溝の外両岸上部にも黒褐色有機質粘質土が，築地基礎地形部と同一レベルで存在し，溝は，築地基礎地形を含めてあたり一帯が造成整地された後に掘削されたと考えられる。

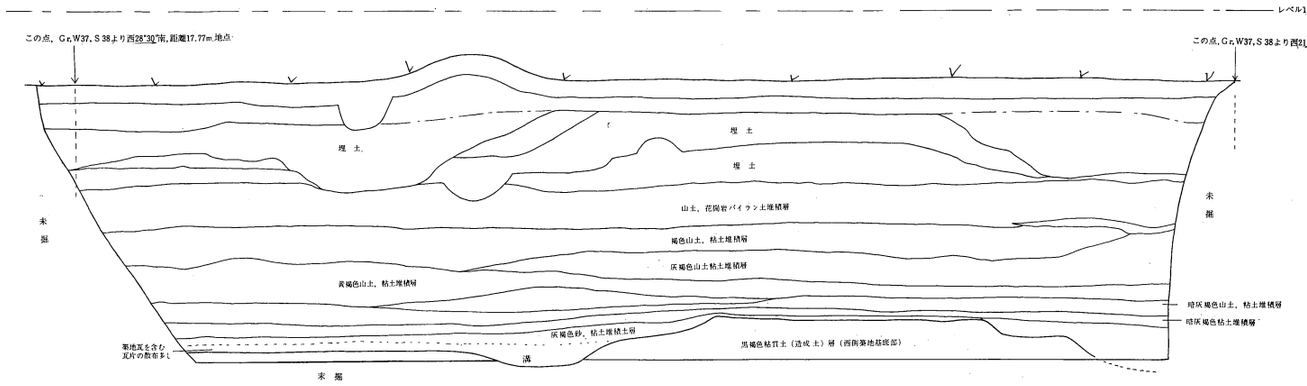
ＥＩＴにおける遺物出土状況は，東西両溝から須恵器，土師器（小皿多し），須恵質状素焼土器，碗，瓦片が多く出土したが，全体としては東側の方に出土が多かった。又，築地基礎地形の黒褐色有機質粘質土層底面から飛鳥様式瓦片を出土した。全体にＥＩＴは上部が削平されていたため，上部構築物の遺構は検出されなかった。



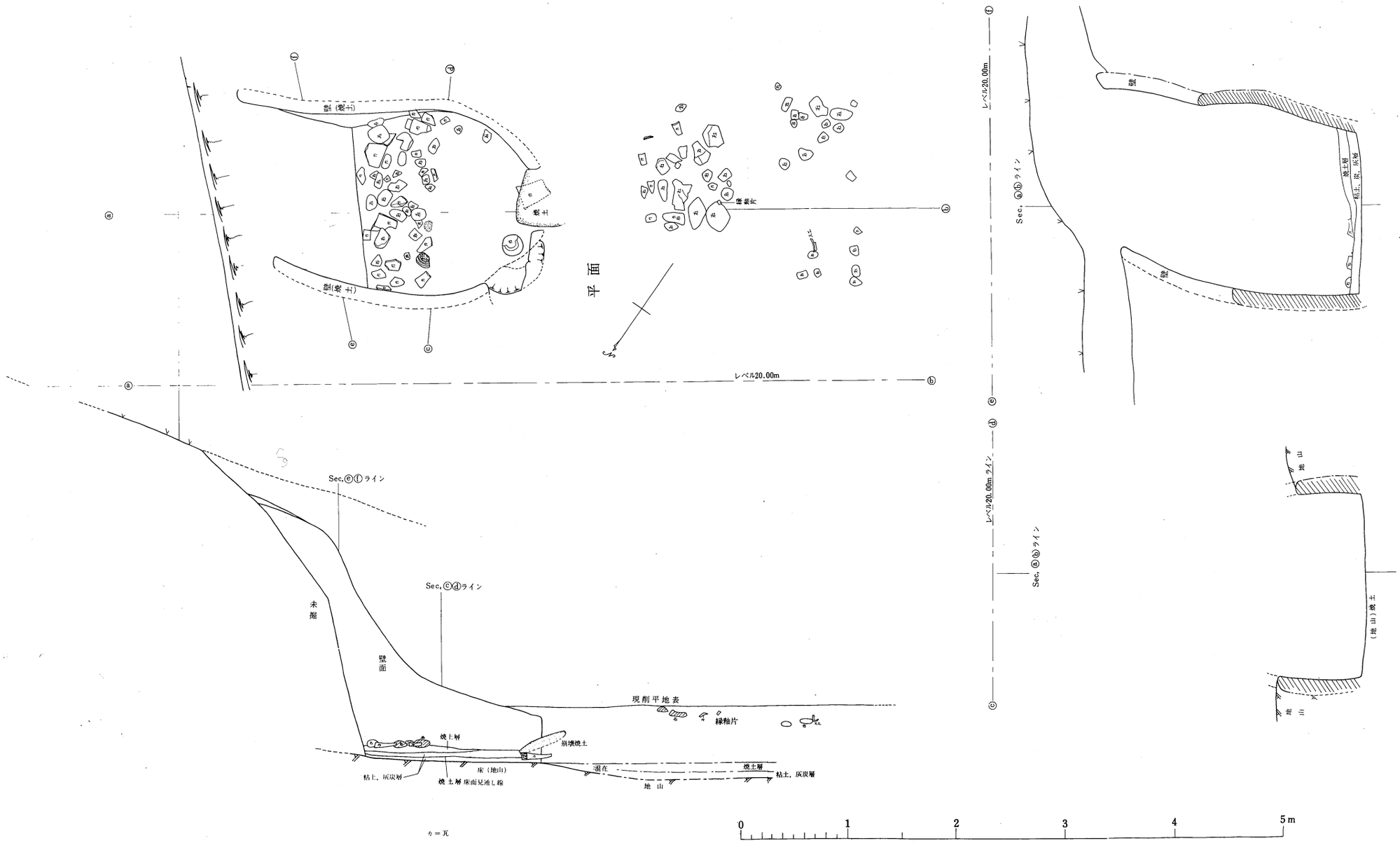
第21図 SⅡ－1トレンチ平面，東壁実測図



第22図SⅡ-2トレンチ東壁実測図



第23図 SW3トレンチ南壁実測図


平面
レベル20.00m
Sec,ⓐⓑライン
Sec,ⓒⓓライン
Sec,ⓔⓕライン
未掘
壁面
現削平地表
緑釉片
焼土層
崩壊焼土
床（地山）
焼土層床面見通し線
粘土、灰炭層
混在
地山
0
1
2
3
4
5m

第24図　瓦窯実測図

7，南回廊遺構（第20図，図版第18）

回廊追求のために入れた、ＳＩＴのＧｒＳ30附近で，幅70cm，深さ10cmの東西に延びる溝底部が検出され，その附近から南にかけて比較的集中して瓦が出土したが，今までのような累積的状態ではなく，二次的な瓦溜である。又，ＧｒＳ23附近で同じく東西に延びる幅約１ｍ，深さ10cmの溝底部が検出された。ＳＩＴ一帯は，過去に著るしく土地の削平がなされており，大半が黄褐色山土小角礫造成土（塔基壇断面でみた最下造成土層）上部まで削られている。このため基壇遺構もほとんど残存せず，僅かに溝底部が残ったにすぎないが，両溝底部から考えて，ＧｒＳ 23.6からＧｒＳ 29.6に基壇上面幅６ｍの南回廊基壇が存在していたと推定される。

一方，ＳⅡ－２Ｔでも南回廊を追求したが，この一帯は，現在段々畑の水田になっており地形変更，攪乱が著るしく溝底部すら検出できなかった。ただ，ＧｒＳ 34附近から南で二次的な瓦溜が検出され，ＧｒＳ33附近より，北に回廊基壇が存在していたと推定される。

8，南築地（第21図，図版第20）

ＳⅡ－１ＴのＧｒＳ 45からＧｒＳ 55にかけて，築地の乗る基壇部分と，それにともなう内溝，外溝，犬走り等の南築地部が検出された。築地基壇部は，上部（土）塀を損失し基底部分だけであるが，上面の幅が2.40mで，その両側に溝が設けられている。この基底部に瓦葺の築地塀が立つことは，ＳＷ３Ｔから築地瓦が出土していることからみても明らかである。内側の溝は，幅２ｍ，深さ16cmの浅いＵ字形のもので，底部には小円礫の敷設が一部残っている。この溝底部上面から奈良三彩破片二個（一固体）が出土した。南側の溝は，幅60cm，深さ10cmの基壇部をＵ字状に掘っただけの溝で，特別の施設は確認されなかった。この溝には，ブロック的に焼土塊が埋没し，塀部分の焼失倒壊したものと推定される。この溝の外側に上面幅250cmの平坦な犬走り状段が続き，その南は一段（10cm）下ってまた幅90cmの小犬走り状平坦部が築かれている。この平坦部の南は，ゆるやかな斜面で，30cm下り，その下に幅55～136cmの不整形な平坦部が続き，また緩やかな斜面を経て20cm下って当時の地表平坦部に至る。築地基壇外には大小合せて三段の犬走り状平坦部が存在し，築地基壇のすぐ外の広い平坦部は通路的な機能をも持っていたものであろう。これらの築地基壇部とそれに伴う段状施設，溝等の築地基壇地形は，全て地山削り出しによるもので，南の平坦部も一応地山を削平して平坦部を形成させている。なお，築地基壇の南，ＧｒＳ 61～62とＧｒ Ｓ 63～65,8で，幅１ｍ，深さ10cm，幅2.6m，深さ20cmの浅いＵ字状の溝が二本検出されたが，何の溝であるのかは断定しがたい。

ＳⅡ－１Ｔでは瓦溜は検出されなかったが，築地基礎地形南の平坦面には，厚さ20cmの土師器，土鍋，須恵器片を多量に含む有機土の堆積が認められた。基壇地形にともなっての遺物出土は，上記三彩出土の他には遊離流入的な瓦や土師器が点々と出土したにすぎなかった。

なおＳⅡ－1Ｔ全体で，基壇地形，南平坦部を通して，径36～50cm程の柱穴痕が，点々とほぼ方位に乗って検出されたが，位置からみて築地基壇地形にともなうものではないと判断されるが，何であるかは判断しがたい。

9，西築地基礎部分（第23図，図版第21）

築地南西角を追求するため想定位置上にＳＷ１，ＳＷ２トレンチを設定したが，両トレンチとも地表下1.5mまで掘り下げたが何も検出されなかった。この位置には現在の水路があり，それからの湧水が著るしく，これ以下の掘り下げは，トレンチ断面の崩壊を来して不可能となり，トレンチを放棄した。

ＳＷ３Ｔで地表下2.20mの所で，ＷＮⅠＴ，ＥⅠＴで検出したと同じ黒褐色有機質粘質土による地形基礎部を検出した。この基礎部分の上部は削平されているが，現状上幅2.5m，高さ15cmの築地基壇部が残り，その内側は，緩るやかな段状をなして幅1.2m，深さ15cm程の地山を掘っただけの浅いＵ字溝に続く。この溝，および，その内側からは点々と瓦が出土し，特に溝東の上には散布的ではあるが瓦溜が認められた。これらの瓦中から三種類（丸１，平２）の築地文様瓦が検出されたが，瓦堆積層の下の層位，遺構状況は湧水，崩壊等のため今回は確認できなかった。築地基礎地形の西側は15cm下って幅56cm程の犬走り状の平らな段があり，その外は緩やかに下り溝状になっていることまでは確認できたが，溝底部や西岸，さらに外の犬走り通路については，湧水，壁面崩壊の恐れや現水路下のため明らかにはしえなかった。

築地基壇の上部では遺構状のものは検出されず，黒褐色有機質粘質土上面の上には水平自然堆積層が堆積し，その上では後世の溝と畔状の土層が認められた。

ＳＷ３Ｔでは結局築地基礎地形が検出され，この地形（じぎょう）は，ＷＮⅠ北列外の西築地基礎地形の南延長線上にほぼ乗り，位置や方向から，西築地南端近くと断定されたが，南西角の検出までには至らなかった。

10，窯　　址　（第24図，図版第22）

〈窯の位置〉

賞田廃寺の存する緩斜面に，北から南に現水路が走り，その南西に向いた斜面中程に花崗岩の風化した地山を切り抜いて寺域の北東角と思われる所からおよそ南東40m，築地の最も近いところから東におよそ20mの場所に築かれた登り窯である。賞田廃寺域から出土している文様瓦と同一のものを焼成しており，明らかに，賞田廃寺の為の瓦，須恵器を焼成した窯址である。

焚口燃焼部付近灰層の一部の調査しか行なえなかったので全容は明らかでないが，焚口をほぼ南西方向に向けている。焚口床面の標高は19mで付近一帯は松，雑木などが混生している。祇園用水付近の水田面との比高は９m前後である。

〈窯の構造〉

焚口幅約1.1mで 燃焼部最大幅1.65mあり，焚口から２m程までほぼ水平に近く，焚口から1.5m奥へ行った所で幅1.5mあり，焚口でしぼっている。

焚口左右両側壁とも焼成温度が弱かったためか赤色に酸化している。燃焼室入口付近は少なくとも二度以上のこわれと思うものが認められ，入口左方に一部凹地があり，灰，炭が積もっていた。又，

燃焼部左右両側壁は約1.2m程立ちあがり，1.5m以上のドーム（アーチ）状に天井が築かれていたと思われる。幅15cm前後赤色に酸化して余り焼きしまっていないし，スサを入れたり粘土のはりつけなどは行なっていない。

又，燃焼室床面灰層上部に，瓦，須恵器片と共に10～30cm前後の角礫が数多く散在していた。これは焚口を閉じるために用いたのかしれない。

燃焼室は，調査を行っていないので不明であるが，左右両壁の立ちあがりからみると，燃焼室から30度前後の傾斜を持った構造のものであろう。

灰原の広がりはつかめないが，試掘した場所において焼土，灰，炭，粘土等が混った層は15cm前後ある。築かれて後，余り長期間使用されていない。

〈出土遺物〉

出土遺物は遺物の項で詳述するが，文様瓦は賞田廃寺第Ⅴ様式瓦にあたるもので賞田廃寺で用いられたものであることは明らかである。軒丸瓦は平城宮址出土の6225型式と同タイプので，軒平瓦は，6663型式と同タイプで6225型式に伴なうものである①。他に平瓦，丸瓦を主として，須恵器を焼成している。器種としては，中型甕，薬壺，そして角礫 上部より，緑彩片が出土しているが，この窯址で焼成されているのかどうかは疑わしい。

（第10項，伊藤 晃）

二，伽藍について

以上の今回の調査で検出した遺構は，寺院址全体からみれば，一部分であり，中門，南大門，講堂（？），食堂，僧房，さらには雑舎等の検出には全然至っていない。しかし，上記の検出した各遺構を通して賞田廃寺の概様についてみていきたい。

第Ⅰ基壇は，柱間，中央小尺9尺，両脇小尺7尺2寸5分の方三間の塔であったことが判明した。基壇規模は.葛石上面で方38尺と推定したが,地覆石外面間は38.5尺に復原され，飛鳥寺の39.5尺，法隆寺の41.1尺②のよりやや小さく，塔婆自体は，三重塔であった可能性もある。軒の出は，第Ⅰ基壇ＳＴ東断面の溝，西門東延石外の溝等から基壇外に1.5尺出ていたと推定されるから9尺と考えられ，初層軒一辺が41.5尺であったと推定される。心礎は，その抜取り跡からみて，基壇底部近くに据えられていたことが判明した。塔自体は，基壇規模が前記寺院のものより劣るが，川原寺の39尺③，四天王寺の38尺④に近いもので安芸国分寺の36尺⑤より勝り，これらからみると五重塔であった可能性が強い。

第Ⅱ基壇は，基壇基礎地形の黒褐色有機質粘質土の施設からみて何らかの小基壇が存在していたと推定されるが，遺構的には明確に検出しえない状態であったので，何であるかは判断しがたい。

第Ⅲ基壇は，現存する塔基壇に先だち，白鳳時代初めに建立された建造物の基壇で，現存する寺院

遺構では最初のものである。推定基壇規模，東西小尺50尺，南北43尺からみて，軒出９尺（基壇外の出1.5尺）として堂の規模は，桁行35尺×梁行28尺で，桁行５間，梁行４間であったと推定される。第Ⅲ基壇は，この桁行，梁行の比，規模の対比⑥や古代寺院の各建築物建立順序⑦からも建立時には金堂として創建されたと断定される。この金堂の基壇規模は，他の地方寺院址金堂⑧と対比すると小さい部類に入る。

西門基壇は，変形重成基壇ともみることができ，壇上積基壇の石材も（西門地覆石＝長84.4cm，幅44.5cm，厚さ13～16cm，枘溝幅12.5cm，束石枘穴９×11cm，塔地覆石＝長77.2cm，幅35.8cm，厚さ13.9cm，枘溝幅10.5cm，束石枘穴７×13cm）塔基壇より一周り大きもので基壇構築が賞田廃寺内の基壇で最も入念に強固に築造されている。推定西門規模，桁行小尺24尺（中央間小尺９尺），梁行小尺21尺は，門としては必ずしも大きなものではないが本格的な西門の存在や，壇上積基壇であることは地方寺院としても特異なものであろう。

回廊は，上面幅が20尺と推定したが，その基壇構築や上部建築物がどのようなものであったかは今回の調査では明確にすることができなかった。両側の溝や，上面幅からみて複廊の存在も十分に考えられる。

築地基礎地形が，ほぼ完全な形で検出されたのは南築地だけであるが，その構築は，上部の瓦葺築地塀と合せて考えると地方寺院では稀に見る端整かつ重厚な造りであったと推定され，地方寺院としての賞田廃寺にしては，まさに特異なものであろう。ＥＩＴ，ＷＩＴ，ＳＷ３Ｔでの築地基礎や，その地形（じぎょう）部の検出から，賞田廃寺は東西築地基礎外面間が丁度１町の寺域を設定していた寺院であることが判明しさ。しかし，南北については，北側は，特に山を取り入れてのものであり，必ずしも方１町の寺域であったとする必要はなく，むしろ築地等の周囲的な区画施設が存在せず，寺域が山へ凹字形に延びていた可能性が強いが，その確認まで今回は至らなかった。

雑舎、工房等の存在も，窯址の例をまつまでもなく当然考えられ，窯の位置や，ＥＩＴからの日用雑器的土器片の多量出土からみて，築地東側の平地部分にこれらが存在していた可能性が強く，寺地域は，寺域周囲に拡大するであろう。

塔，西門，第Ⅲ基壇の位置からみて，さらに塔東西中心線と，西門東西中心線は一致し，西回廊との間隔からみて，その線上に一つ基壇が存在することが十二分に考えられる。伽藍配置は塔とこの推定基壇，第Ⅲ基壇の位置関係から推定基壇を金堂とし，完備のために第Ⅲ基壇が講堂に転用されたと考えて一応法起寺式伽藍配置が想定される。従がって推定基壇規模は，塔，西門基壇両側間中心に中心を持っ第Ⅲ基壇と同規模の基壇が存在したと推定し，この推定基壇東側面と塔基壇西側面間との中心線を一応この伽藍配置の中軸線とし推定した。

しかし，上記のように塔と西門中心線上に一つの基壇が存在することは，他の基壇配置からみてもまず確実であるが，この推定基壇を金堂とし，第Ⅲ基壇を講堂に比定してしまう必要はない。第Ⅲ基壇は，規模やその後の存続状態からみて金堂のままであり，推定基壇を西金堂，或は，西塔に比定する方がより妥当性が強い。従って極めて推定的ではあるが，賞田廃寺の伽藍様式が，川原寺式伽藍様式，或は薬師寺式伽藍様式であった可能性が前記の伽藍推定よりも強く，この場合，中軸線は，第Ⅲ

基壇東西中央線上に一致すると考えられる。

いずれにせよ，塔，第Ⅲ基壇，西回廊基底部地形の配置からみて，賞国廃寺の伽藍主要部が中軸線で左右対称的に存在せず，かなりずれていたことは事実であろう。

なお，寺院址全体の方向であるが，塔基壇，西門基壇で測った所，現磁北に対し前者では約3度10分西に振り，後者では，約3度50分西に振っており，全体的に3度30分前後西に振っている。岡山地方の磁北は，真北に対し6度27分西に振っているから，賞国廃寺址全体の方向は，真北に対して約9度西に振っていることになる。

三，時　代

賞国廃寺出土でこれまで知られていた瓦は，賞国廃寺第Ⅱ様式以降のものであり，賞国廃寺の創建は，白鳳時代でも古い時期と一般的にきれていた。しかし，今回の調査により遺構共伴瓦ではなかったが，三片の飛鳥様式（賞国廃寺第Ⅰ様式）瓦を出土し，賞国廃寺の創建時代が，今までよりも古くなる可能性が強くなった。遺構に共伴する瓦は，賞国廃寺第Ⅱ様式瓦からで，第Ⅲ基壇創建に伴なうことが判明した。賞国廃寺第Ⅰ様式瓦片の出土状況は，全て賞国廃寺第Ⅲ様式瓦の時期の基礎地形下の造成整地土層中に混入した状態である。伽藍整備時期に混入する状態，つまりその時期に建物が取り壊きれて整備きれなおきれたと考えられ，従って遺構も造成土を全面発掘でもしないかぎり判明しがたいと思われる。しかし，賞国廃寺第Ⅰ様式瓦で葺かれた建造物は，第Ⅲ基壇以降に見られるような本格的な寺院建築物ではなく，お堂的な小規模の建造物であったと推定きれる。

ともかくにも，賞国廃寺の創建は，飛鳥時代後葉であったと考えられるが，寺院としての本格的意図で造営きれだすのは白鳳時代初期の金堂造営からであったと考えられる。そして，一応堂塔が建ち並び，伽藍が完備するのは，賞国廃寺第Ⅲ様式瓦の時期，白鳳時代末から奈良時代初頭であり，その後奈良時代後半，国分寺造営の時期にある程度の改築がきれて平安時代に至る。金堂は，その後平安時代にも再度改築を施こきれ，鎌倉時代初頭まで至って焼失し，この地での寺院としての終末を迎える。一方他の建造物も，その中心時代は奈良時代であり，平安時代にどのように存在していたかは不明であるが，平安時代の瓦の出土は少なく，修築きれた形跡はない。また，築地瓦の文様に，賞国廃寺第Ⅱ様式のものがあり，築地の設定は，金堂とほぼ同時期であったことが判明した。

いずれにせよ，本格的寺院として最初に金堂が造営きれたのが白鳳時代初頭であり，遺存する塔，西門，回廊等が造営きれたのは白鳳時代末か奈良時代初頭である。金堂造営と塔婆造営の間には，少なくとも50年近い時間的差が存在し，いかに地方寺院だとはいえ寺院造営に対する間延びが著るしい。古代寺院造営順序は最初に金堂を造営し，次に塔を造営していることからみて⑨，この間に他の未確認の建造物・食堂・中門・南大門・僧坊等を塔に先だって金堂に継続して造営していたことは考えがたい。そして，賞国廃寺第Ⅲ様式瓦の時期になって，一気に塔・西門・回廊など（中門・南大門・食堂等も同時の可能性が強い）寺院にとって主要な堂塔，ならびに伽藍配置を完成きすという，極めて

不自然な状況を呈する。この賞田廃寺の寺院造営の有り方は，いかに地方寺院とはいえ，他の古代寺院造営の有り方に比べて著るしく特異な状態にある。賞田廃寺は，金堂造営から塔婆造営に至るまでには，一世代25年として少なくとも２世代の交代がなされるまで寺院造営が，全くの沙汰止みであったわけで，その後に至って一挙完成という異常的な寺院造営形態を示している。

この異常な賞田廃寺造営のあり方に対して，今回の調査は，その問題点を提起したにすぎず，その解決までには至っていない。この解決方法として，瓦編年の再検討と，編年は一応確実なものとして寺院造営は，白鳳時代初期以降連綿として継続され，塔婆も引続いて建立されていたのが，何らかの理由によって白鳳時代末から奈良時代初頭に到って一挙に伽藍配置を改造して整える必要が生じて再度塔を建立し，西門，回廊等を急拠造営し直したと考える仮定的解釈とが考えられるが，いずれとしても判然としない。しかし，瓦編年の再検討は，他寺院址出土の瓦による瓦編年との関係からまず不可能である。

ただ，築地瓦に賞田廃寺第Ⅱ様式瓦があることからみて当初から寺域が設定され，以後も寺院建立は継続されていたと考えられる。又，今回の調査でも白鳳時代後半の瓦（様式外）が一片ではあるが出土しており，さらに白鳳時代後期の瓦もこれまでに出土しているとのこと⑩であるから，寺院建築建立にあたって中断があったとは考えられない。あるいは，白鳳時代後期の未確認遺構が賞田廃寺第Ⅲ様式瓦の時期の造成土層下に眠っているのかもしれない。上記の仮定的解釈は，それを全く否定してしまうには，その前提として寺院建立の断続を考えなくてはならず，断絶が一応出土瓦から否定的であるので，その可能性が強い。

この現象の解決は，今回の調査では判然としえなかったが，むしろ地方寺院としての賞田廃寺のもつ特異的要素として今後検討を加えなければならない問題であろう。同時に賞田廃寺の歴史的評価を検討する上に重要な要素として考えるべきものであろう。

賞田廃寺の終末の時期は，第Ⅲ基壇出土瓦，遺物からみて，鎌倉時代前期に推定されるが，塔基壇，第Ⅱ基壇，ＳＩＴ，ＳⅡ－ＩＴ，西門，西回廊の瓦溜の瓦も大半が二次的炎を受けた状態を示し，特にそれは軒平瓦，軒丸瓦に著るしい。賞田廃寺第Ⅴ様式瓦以降のある時期に，まさに一山鳥有に帰す大火炎を受けたようで，（西門を除く？）以後は，金堂だけが再建されて存続していたと推定される。

これまで一般的にいわれて来た終末時期の室町時代の瓦は，今回の発掘ではＷＩＴ西門西側（現水路）付近を中心として点々と軒丸，軒平瓦が出土した。しかし，これらはいずれも層位的には堆積土層中からの出土で，直接西門基壇や，その上部の瓦溜層に伴なうものではなかった。前記の様に，賞田廃寺の西の小尾根上には，現在も堂屋敷の名を残し室町時代の瓦をこれまでに出土している。又，ＷⅡＴでもこの尾根東裾平坦部付近からは点々と鎌倉時代中頃から室町時代にかけての遺物を出土する。これらからみて，この室町時代初期の瓦片は，遺構の中心を西尾根上に置く中世寺院の遺物流入と考えられ，直接賞田廃寺と結び付くものではないことが判明した。

今回の調査結果により，賞田廃寺は，初源が飛鳥時代末に始まり，白鳳時代初期から寺院として本格的に造営され，奈良時代初頭に伽藍も完備し，奈良時代前半にその最盛を示し，以後，平安時代には衰退しながらも鎌倉時代前期まで存在していた寺院址であることが判明した。

（出宮徳尚）

＊全体註

壇上積基壇の石材の石英粗面岩は，一般的にいわれている凝灰岩の範疇に入るものである。

註①，「遺物」『平城宮発掘調査報告Ⅱ』59～61頁，奈良国立文化財研究所　1962年

②，浅野清「第６章，遺跡に対する建築考察」『飛鳥寺発掘調査報告』42頁，奈良国立文化財研究所，1958年

③，浅野清「埋れた寺院」『世界考古学大系』33頁，平凡社　1961年

④，斉藤忠，藤島亥治郎，沢村仁「総括」『四天王寺』232頁　文化財保護委員会，1967年

⑤，石田茂作「国分寺跡の発掘と研究」『新版考古学講座６』76頁第１表，雄山閣，1970年

⑥，浅野清「先進地域における寺院の成立と展開」『日本の考古学』Ⅶ，294頁　河出書房，1967年，及び註⑧311頁

⑦，日本書紀，崇峻天皇元年の条，同３年の条，同５年の条，推古天皇元年，４年の条の法興寺造営の記載等文献史料による。

⑧，鈴木嘉吉「地方寺院の成立と展開」『日本の考古学』Ⅶ，310頁，河出書房　1967年

⑨，註⑦による

⑩，間壁葭子，「官寺と私寺」『古代の日本』４，369頁　角川書店，1970年

第四章　遺　物

今回の発掘調査で多量の瓦，土器類等が各トレンチで検出されたが，仏具関係のものは全く検出されなかった。これら遺物の内で主要なものを記すと次のとおりであった。

一，瓦

瓦片の出土状況は，築地追求トレンチ以外の各トレンチで瓦溜が，1次的堆積，2次的堆積状態で出土し，一部の築地追求トレンチでも瓦溜的集中散布が認められるものもあった。全体での出土瓦は，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦がほとんどでリンゴ木箱約100箱であったが，その内文様瓦は同6箱であった。出土瓦は，全体的に二次的炎を受けたものが大半であった。出土文様瓦は，室町時代初期のものを含めると8種類の軒平，軒丸瓦の組合せに分類され，それぞれを一応，賞国廃寺第Ⅰ様式～同第Ⅷ様式に仮称した。なお，この他に築地瓦，鬼瓦片，鴟尾片，きらに塼片等も検出されている。

1，賞田廃寺第Ⅰ様式瓦（第25図，図版第23）

飛鳥様式瓦と断定される軒丸瓦片2種3片が出土した。その一型は，径17.6cm，外縁厚1.9cm，弁最厚1.7cm の，素弁8葉の花文であるが，中房部分が破損して不明である。花弁はやや肉厚で細長く，先端が尖りやや反転しており，界弁は花弁よりもり上り，鋭利な楔形を呈し中房へ接続する。中房径は花弁長から2cm弱であったと推定される。外区は素縁で内側が花弁尖端を頂点とした八角形を呈す。焼成は，非常に良好で須恵質状に堅緻なものである。胎土は若干砂を含むが緻密な選土である。他の一型は，周縁を破損し，径が測定できないが，最厚2.2cm花弁部厚1.8cmの，素弁8葉の尖頭型花文である。花弁は中央に凹線が通り二分されているが，反転は認められない。界弁は花弁より盛り上りT字状楔形を呈し中房へ向い，中房近くへ至るが，中房へは繋がらない。中房径は破損し不明であるが2cm弱程度であったと推定される。焼成は二次的炎を受け焼が戻っているが，前者同様であったことがうかがえ，又，胎土も同様である。

2，賞田廃寺第Ⅱ様式瓦（第25図，図版第24）

これまで賞国廃寺出土自鳳時代初期の瓦として広く知られていた素弁8葉の軒丸瓦と，これと組合う素文突帯段顎の軒平瓦である。軒丸瓦は，径18.3cm，厚き1.5～3.0cmで，素弁8葉で中房が拡大した蓮華文である。花弁はやや幅広短形で先端が尖って反転する。界弁は花弁上半部間に鋭利な楔形を呈し，その先端は花弁中央あたりで消失するが，それぞれの上末端が接続して圏をなす。この外に一重の圏線がめぐり，その外は緩く外反して末端に至る。中房は突起状で径4.8cmに拡大し中心蓮子を8個の蓮子が囲む。全体的に彫は浅い。焼成は，須恵質的に堅緻であるが，胎土に，砂，小礫粒子の混入が目立ち選土は若干落ちている。

軒丸平は，前面厚が17～26mmの無文で両端が若干厚くなり，裏面の前面内側1.5～1.8cmの所に巾2

cm，高さ1.2～1.5mの突帯が段顎状に付く。全長44.2cm，全幅34.8cmである。焼成，胎土とも軒丸瓦とほぼ同様である。

賞田廃寺第Ⅲ様式瓦（第26図，図版第25）

この瓦もこれまで多く出土しており，広く知られている単弁８葉裏弁８葉の軒丸瓦と，左右均整の忍冬唐草文様の剳顎軒平瓦の組合せである，軒丸瓦は，径17cm，厚さ2.3cm，縮少化した単弁８葉と弁間に同様な単弁を裏弁として配した，変形単弁16葉の蓮華文である。花弁は，小さく短かく先端が尖ってゆるく反転し中央に稜をもつ。界弁は全くなく，その代りに，両側の重なった同様の花弁がある。この外に，両側を細い突線で囲まれた珠文帯の内縁と，やや高い素文帯の周縁が続く。中房は突起状で大きさが，第Ⅱ様式のものと全く同一の径4.8cmで，蓮子もほぼ同様である。全体的に中房以外の内区，内縁の文様の彫りが浅く突線も細く繊細になっている。焼成は，良好に焼き締っているが須恵質より少し劣り，胎土に砂，山土，小礫粒子の混入が目立ち選土は劣る。

軒平瓦は，全長37cm，前面全幅29.2cm，同厚6.2cm，内区が左右均整の優美な忍冬唐草文で中心装飾は左右の唐草を結縛している。外区は内区を細突線が囲み，その外を素文の幅狭い外縁が囲む。大半は唐草文両端が下向であるが上向のものも若干ある。焼成，胎土とも，軒丸瓦と同様である。

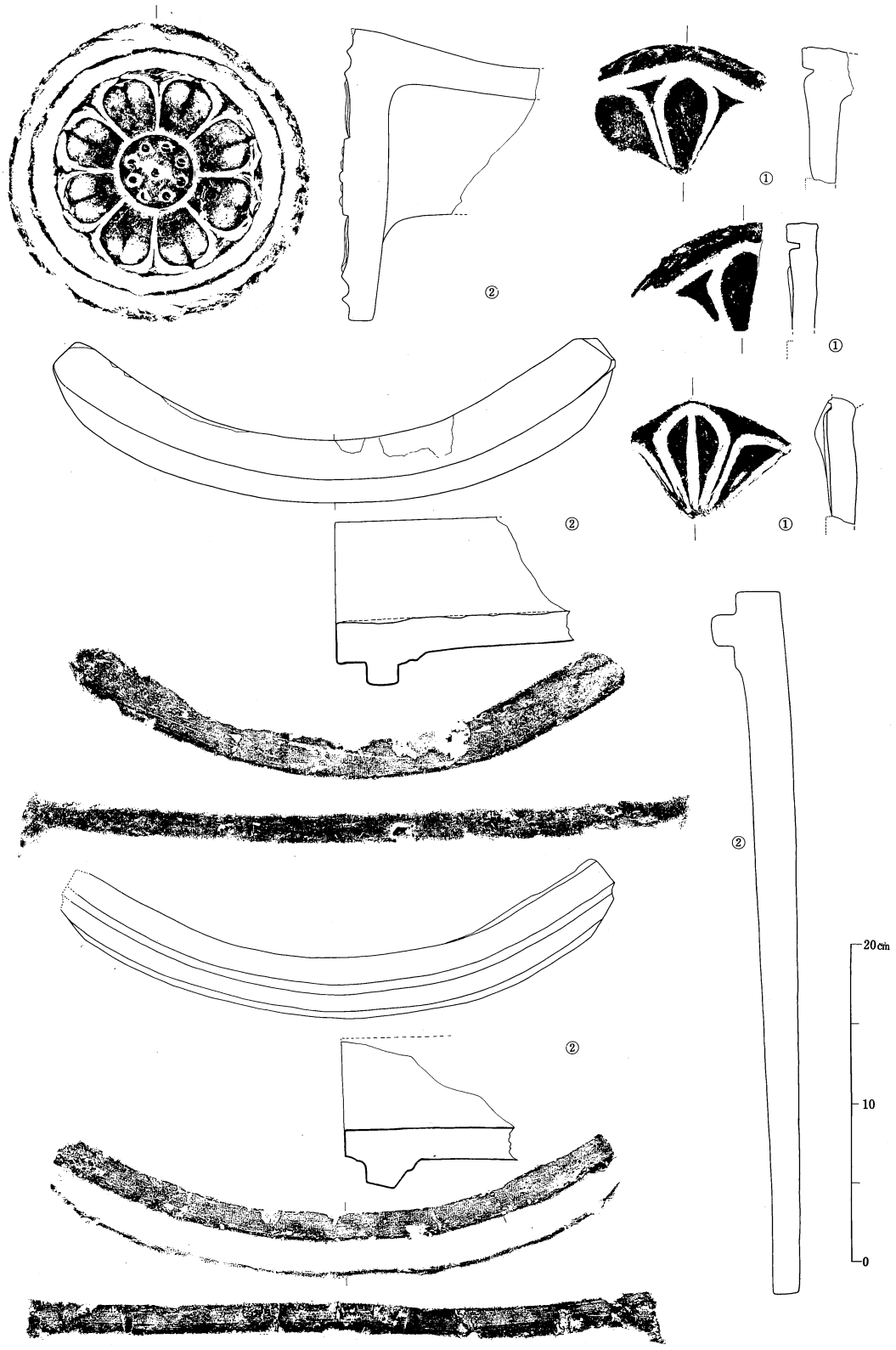
これらの瓦は，中房に第Ⅱ様式の面影を残すが，軒丸，軒平瓦とも繊細優美で，全体的に文様，造り，他寺址出土瓦との対比から白鳳時代末から奈良時代初頭の時期と断定される。

4，賞田廃寺第Ⅳ様式瓦（第26図，図版第23）

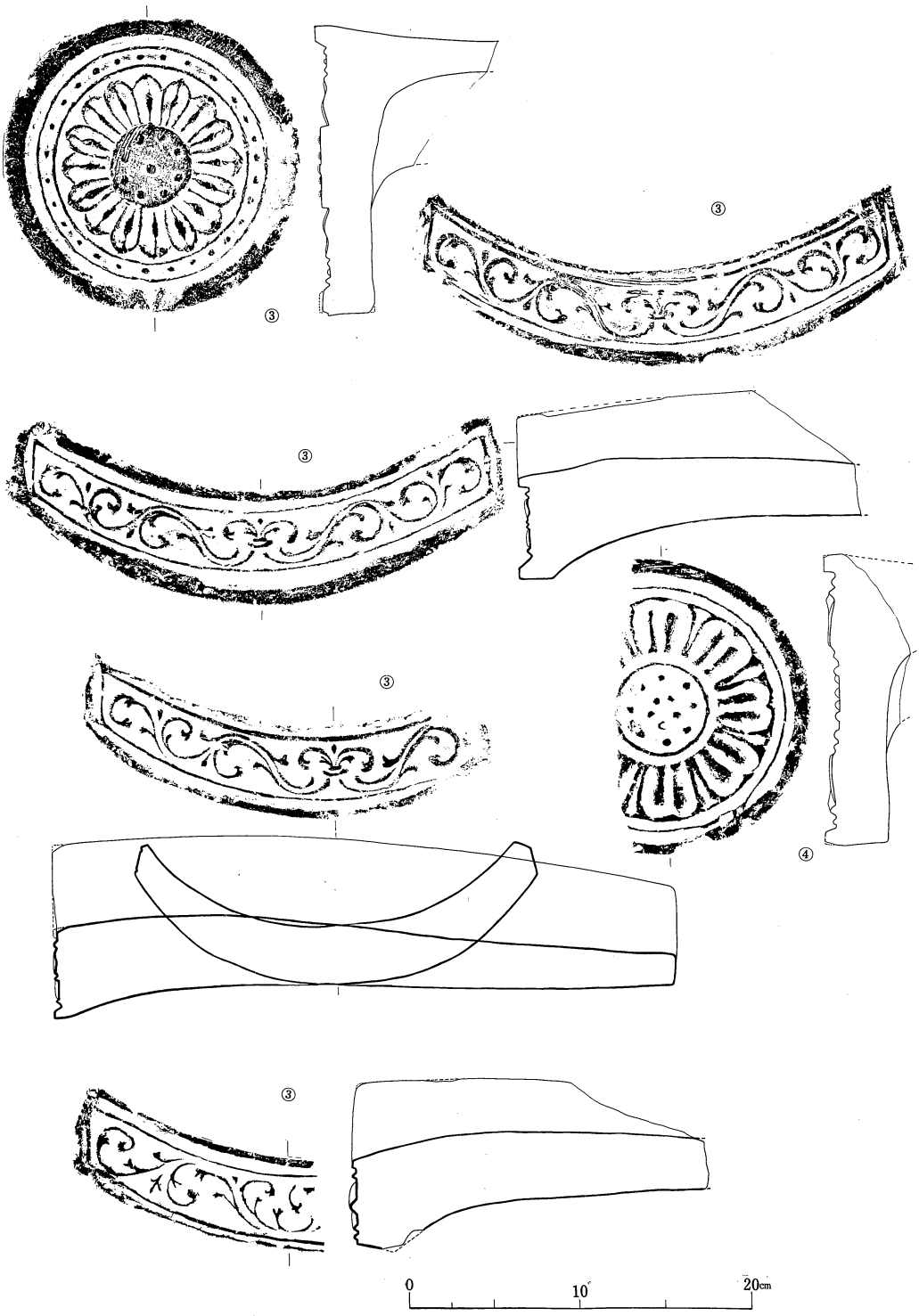
複弁８葉の軒丸瓦で今回の調査では一片しか出土しなかったが，これまでに幾つかの同一瓦が知られている。この軒丸瓦と組合う軒平瓦の様式は目下不明であり，多分に差し替え瓦的であった可能性が強い。この瓦は，径17.1cm，厚さ3.5cm，複葉８弁の蓮華文で，花弁は陰刻的で幅広くハート形に花弁端が切れ込み，花弁両外輪郭線が緩やかに反転するが，花弁を二分する中央縦線が消失している。界弁は全く消失している。花弁の外を，細い突線が圏み，やや高縁の狭い素文外縁が続く。中房は大きく，花弁面より一段凹み，中心蓮子はないが，中央を５つの蓮子が囲み，さらに外を８つの蓮子が囲む。文様全体は，陰刻的である。焼成は，二次的炎を受けているため判然としないが，あまり良くなく，胎土には砂，山土小礫粒子がかなり含まれる。文様型式からみて一応奈良時代前半の瓦に比定されるが，奈良時代末期に比定する考え①もある。

5，賞田廃寺第Ⅴ様式瓦（第27図，図版第26）

平城宮址出土瓦6225号と同一型式の軒丸瓦と，同6663号と同一型式の軒平瓦②の組合せである。軒丸瓦は，径16.2cm，厚さ2.5cm，複葉８弁で，花弁は花弁輪郭，芯が突線レリーフ状で花弁端はＹ字形に大きく切れ込んでいる。界弁も突線レリーフ状でＹ字形を呈し，中房へ続く。花弁の外には，重圏がめぐり，やや高く狭い外縁が続く。外縁内面には，鋸歯文が浮き彫にされている。中房は大きく，



第25図　賞田廃寺第Ⅰ様式，第Ⅱ様式瓦実測図（①第Ⅰ様式，②第Ⅱ様式）



第26図　賞田廃寺第Ⅲ様式，第Ⅳ様式瓦実測図（③第Ⅲ様式，④第Ⅳ様式）

花弁，重圏の文様谷底部と同じ面で中心蓮子を８蓮子が囲む。文様は全体的に突線レリーフ状である。焼成は，須恵質状であるが第Ⅱ様式より大分劣っている。胎土には，砂，山土バイラン土小礫粒子が多く含まれ，選土が著るしく低下している。軒平瓦は，復原幅30cm，厚さ６cmで，左右均整の忍冬唐草文であるが，その茎，葉が断続的で第Ⅲ様式のような流麗さがない。外区内線には珠文帯がなく，二重突線で内区を囲み，幅狭い素文外縁が囲む。焼成，胎土は，軒丸瓦と同様である。時期は，平城宮，各国分寺からの出土瓦からみて奈良時代後半に断定される。

６，賞田廃寺第Ⅵ様式瓦（第27図，図版第26）

軒丸瓦は，径16cm，厚さ1.6cmで単弁12葉の花弁が輪郭，芯とも細い突線で表現されており，界弁がない。花弁の外には一重の突線がめぐり，狭い外縁が続く。中房も突線による表現で蓮子がなく文様状のものであるが，破片のため文様は不明である。いま一つ，破片のため径は不明であるが，厚さ1.3cmで８葉の大きな木葉文とその間にも同じ木葉文を細隆起線で表現した軒丸瓦が出土している。いずれも厚さが薄く，焼成，胎土とも瓦質的なものである。これらと直接共伴関係は確認されなかったが，同時期と考えられる軒平瓦は，前面厚5.7cmの浅顎形で中心装飾，茎，葉のかなり退化した唐草文様である。焼成，胎土とも瓦質的である。これらの瓦は，平安時代前半から中頃のものと推定されるが，出土例は極めて少量であった。

７，賞田廃寺第Ⅶ様式瓦（第27図，図版第27）

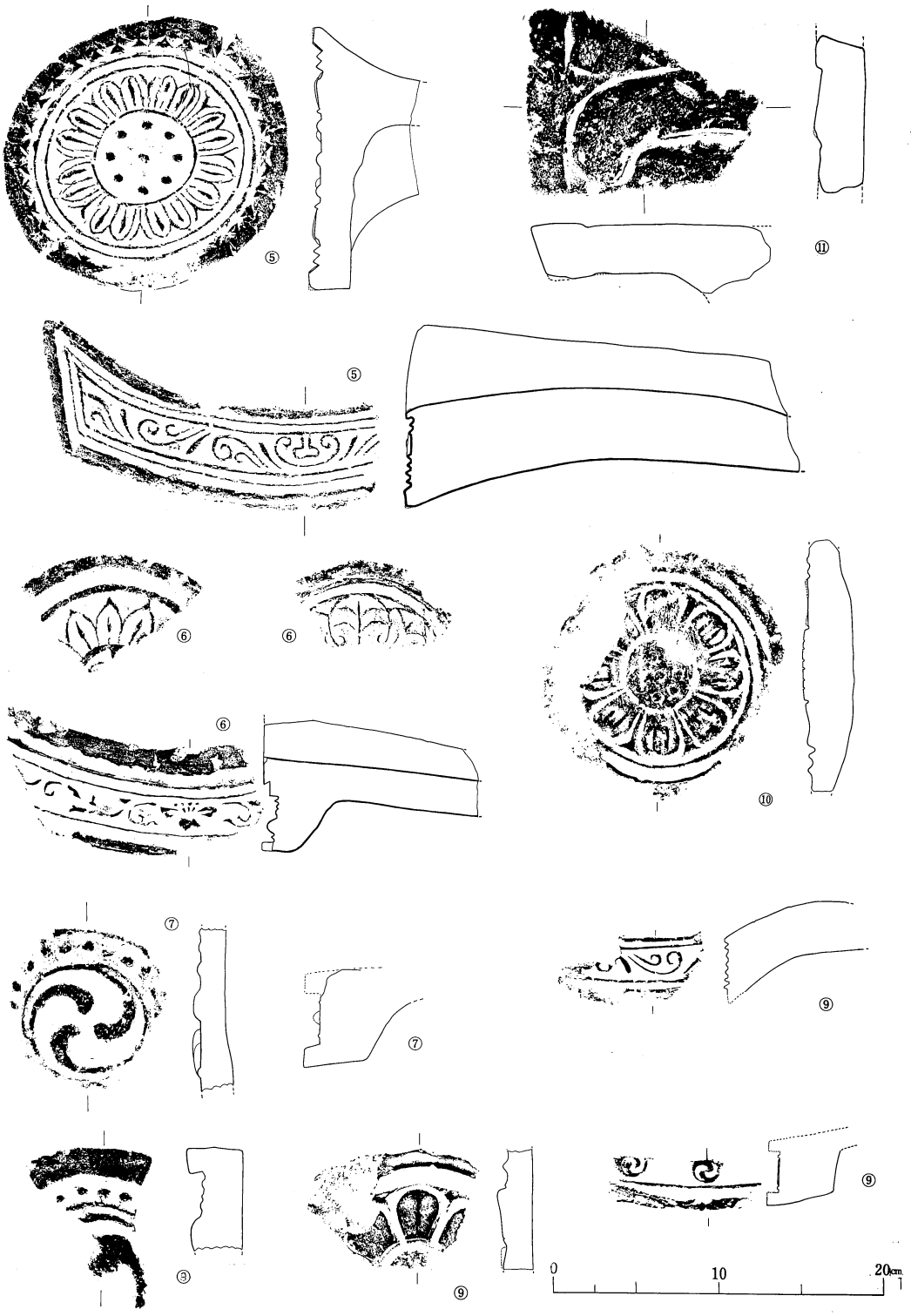
軒丸瓦は，巴文の頭部(中心部)が肥大していない三巴文様瓦で巴文の外に珠文がめぐる。破片のため径は不明，厚さ1.5cm。この軒丸瓦に共伴する平瓦は，中顎で珠文文様であるが，破片のため測値不明。これらの瓦は，第Ⅲ基壇最上瓦溜層から出土し，鎌倉時代前半の時期に推定されるが，出土量が極めて少量である。

８，賞田廃寺第Ⅷ様式瓦（第27図，図版第27）

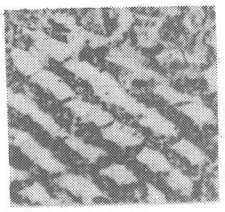
軒丸瓦は，巴文頭部の肥大した三つ巴文様瓦である。軒平瓦は，細突線による退化した波状唐草文様である。これらの瓦は，西門附近の埋土層や畔に存在し，多分に西の堂屋敷からの流入と考えられ，室町時代前半から中葉のものと推定される。

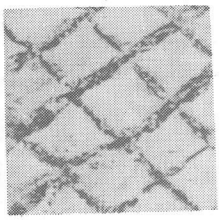
９，築　地　瓦（第27図，図版第28）

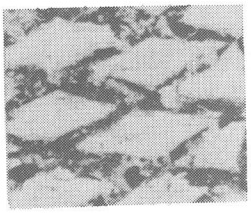
SW３トレンチの築地基礎地形附近から出土した瓦のなかから軒丸瓦１，軒平瓦２の文様瓦が検出された。軒丸瓦は，文様構成が賞田廃寺第Ⅱ様式軒丸瓦と，同一のもので，その縮小化した状態のものである。径は16cm前後と推定され，厚さ2 cmで，焼成，胎土とも第Ⅱ様式の瓦に若干劣るがそれに近いものである。軒平瓦の一つは，第Ⅴ様式平瓦の文様構成を縮小化したもので，焼成，胎土はそれより若干良好である。他の一つは，小二つ巴文様を点々と配す軒平瓦で，同様な文構成の軒平瓦が浄土寺から出土しており③鎌倉時代初期に比定され，賞田廃寺第Ⅷ様式瓦に併行すると考えられる。焼成，

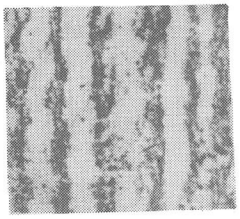


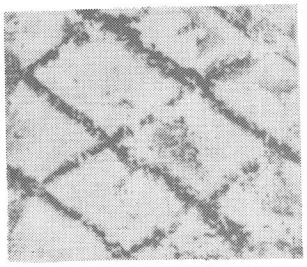
第27図 賞田廃寺第Ⅴ～Ⅷ様式瓦，築地瓦等実測図（⑤第Ⅴ様式瓦，⑥第Ⅵ様式瓦，⑦第Ⅶ様式瓦
⑧第Ⅷ様式瓦，⑨築地瓦，⑩白鳳（末）瓦，⑪鴟尾）

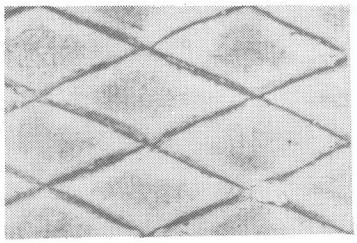

①


②


③


④


⑤


⑥

出土地点＼様式	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
Ⅰ基壇 丸		5	24	1	6			
平		3	28		11			
Ⅱ基壇 丸	2		9		3			
平			4		5			
Ⅲ基壇 丸		7	1				3	
平		12	2		2	1	1	
西門基壇 丸		1	1					7
平			7					5
SIT 丸			5					
平								
SⅡ SW_3 T 丸		1						
平					3		1	
EIT	1							
窯					2			
					2			

表１，文様瓦出土状況

出土地点＼叩文様	無文	① 小格子	② 格子	③ 菱形	④ 縄目	乱縄目	⑤ 大格子	⑥ 大菱形	丸瓦 玉縁	丸瓦 行基
Ⅰ基壇	1.7	1.1	3.5	1.1	53.3	1.2			188	5
Ⅱ基壇			0.3	0.1	1.8				2	
Ⅲ基壇	5.5	2.7	47.5	6.4	9.0	0.2	3.3	6.8	53	5
西門基壇	1.1		1.4	0.2	5.2	0.3		1.7	3	
SIT	0.1		0.6		1.6	1.9			5	
SⅡ SW_3 T					1.1				1	
EIT					0.7					
窯						0.3			3	

表２，平瓦，丸瓦出土状況

胎土は瓦質そのものである。

10，そ の 他（第25図，図版第27・28）

複弁軒丸瓦・径15.6cm，厚さ３～２cmの複弁８葉のもので，花弁は全体的にレリーフ状で先端が外反し，芯，複弁中心線が花弁中心にかたよった形を呈す。界弁は楔形で中房に続く。花弁の外に重圏があぐり，その外は狭い周縁である。中房は突起し，蓮子が竹管刺突文で表わされている。焼成は二次災を受けているため不明であるが胎土は第Ⅲ様式に近い。この瓦は，これまで知られていないもので，今回の調査で１例だけ出土したものである。差し替え瓦と考えられるが，時期は白鳳時代末期～奈良時代初めのものと推定される。

鴟尾片・鰭の破片で第Ⅲ基壇から出土し，焼成は須恵質的であるが劣る。

鬼瓦片・西門基壇直上瓦溜層から鬼瓦の右耳部が出土した。焼成は瓦質そのもので，時期はかなり下るであろう。

11，文様瓦出土状況（表１）

各発掘区からの軒丸，軒平瓦の出土状況は，表１のとおりである。この表に示す単位は，破片，完形品をとわず文様のある瓦片を全て１個体分として集積したものである。その表からも，第Ⅲ基壇を除いて寺院の主要堂塔建設が第Ⅲ様式の時期にあり，同時に最盛期であったことが窺がわれる。

12，平瓦，丸瓦出土状況（表２）

各発掘区から出土した平瓦の叩き目文様による分類は，表２のとおりである。この表に示す平瓦の単位は，縦40cm，横30cmの大きさを一個体の標準とし，その1/10以上の大きさのものをそれぞれ累積換算（$\frac{1}{10}+\frac{1}{5}+\frac{1}{3}+\frac{1}{9}+\frac{1}{2}=\frac{112}{90}\fallingdotseq 1.2$）したものである。叩き目のうち無文は，第Ⅱ様式から第Ⅵ様式まで存在する。小格子は，焼成，胎土がほとんど須恵器に近く第Ⅱ様式より優れた瓦のもので，第Ⅱ様式に伴なうものと推定されるが，それより古い可能性もある。格子，菱形叩文様は第Ⅱ様式，縄目は第Ⅲ様式瓦に，乱れ縄目は第Ⅴ様式瓦に，大菱形は第Ⅵか第Ⅶ様式瓦に伴なうものである。大格子は，文様瓦には認められず，どれに伴うのかはっきりしないが，出土状況，叩き目から第Ⅱ様式に近いもので，その差し替的なものであろうか。丸瓦は，尻部の判明するものを玉縁と行基に分け，その破片数を集計したものである。

いずれにせよ，瓦の出土状況からみて，賞田廃寺が寺院として本格的に造営されだしたのは第Ⅱ様式の時期からで，さらに堂塔が建ち並び伽藍が完備するのは第Ⅲ様式になってからであることが判明した。

（出宮徳尚）

二，土器類

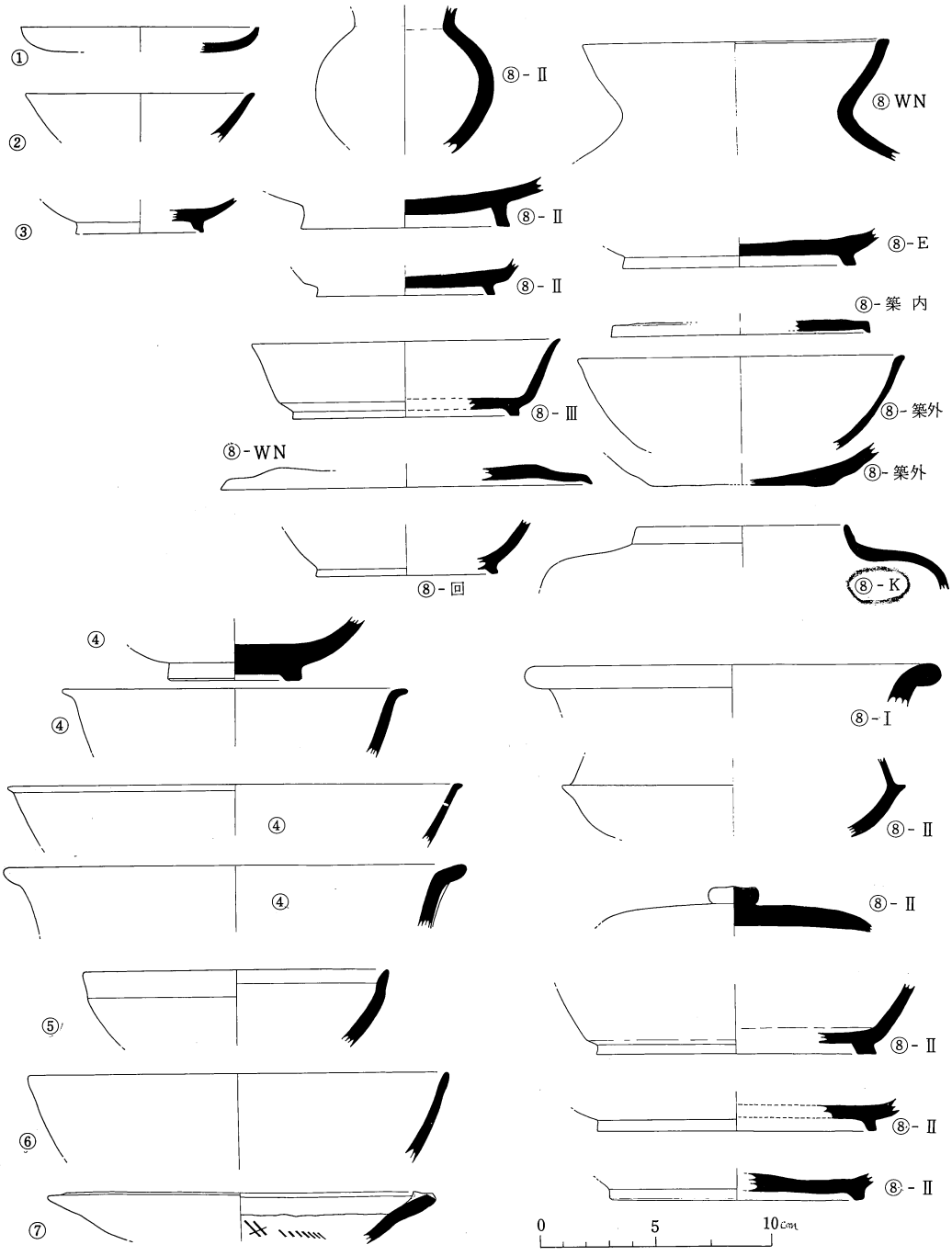
出土遺物は窯址と表面採集とを除いてすべてトレンチ内の遺物で，各建築物に伴う土器類もすべて遺構確認トレンチ内出土である。２～３点の完形品を除きすべて破片で，細片をも含め200片程ある。

各トレンチに於いて，賞田廃寺建立以前と思われる須恵器片をはじめ④，奈良時代，平安時代を中心として，三彩，緑釉陶を含め，須恵器，須恵質土器，土師器，平安・鎌倉時代に含まれると思われる備前焼，中国輸入磁器類，および少数ではあるが瀬戸もの等の日本製磁器類等も出土している。

出土量としては，時期は別にして，ＳⅡ—1Ｔ築地外側溝，Ｗ-Ⅰ-Ｔ西門以西のトレンチ，及びＥ-Ⅰ-Ｔ外側溝からが最も多い。そして，各基壇および瓦溜等からは散在的に出土している。

１，三　彩（第28図　図版第29）

ＳⅡ—$_1$Ｔ築地内側溝から二片出土しているが，同一個体である。口縁直径10.4cm前後の皿状になり，ゆるく外にひらく。口縁端部は2.5mm程で，釉で少し丸くふくらんでいるが，ほぼ水平に調整している。厚さは底部中央近くで５mmで一番厚く，口縁部下で4mm程になっている。表面は透明光沢になっている。胎土は白色を呈し，非常にきめのこまかい土である。内外面ともに，白，緑，褐色を基



第28図 須恵器, 磁器実測図

①三彩, ②緑釉(窯), ③緑釉(SⅡ-1T), ④中国輸入磁器, ⑤日本製天目(WN$_1$T, ⑥灰釉(WN$_1$T), ⑦古瀬戸おろし台(SⅡ-2T), ⑧須恵器, (出土地点記号Ⅰ＝第Ⅰ基壇, Ⅱ＝第Ⅱ基壇, Ⅲ＝第Ⅲ基壇, WN＝WN$_1$T, 築内(外)＝SⅡ-1T, 築地内(外)溝, E＝EⅠT, K＝窯)

調とし，釉は，薄く全体にまんべんなく施釉してる奈良三彩である。

保存状態はきわめてよく，破片断面部を除いてほとんど釉の剝離も認められない⑤。

岡山県下に於ける三彩の出土地は別表に示すとおりであるが，熊山山頂特殊石積遺跡から小壺の奈良三彩が⑥，又，笠岡市大飛島祭祀遺跡から小壺と小蓋の奈良三彩が十数点出土している⑦他は例をみない。又，寺院址出土例としては，岡山市山神（旧一宮町）神力寺址から二彩（黄白色，緑色）塔片が出土しているが⑧奈良三彩の出土は最初であり，この寺院址の性格を考える上で欠かすことのできぬ重要な要素の一つであろう。

2，緑　　釉　（第28図，図版第29）

緑釉片は二点出土している。窯址出土の緑釉は口縁部小破片で，口縁部直径は不明であるが，10cm前後の杯あるいは埦形になるものであろう。灰色の須恵質の胎土に淡緑色に非常にうすくかかっている。部分的に釉が剝離している所もある。この緑釉は礫層上部からの出土であり，この窯址で焼成されているかどうかは疑わしい。

もう一点は，ＳⅡ－$_1$Ｔ築地外側溝内から，杯身底部破片で高台を有しているものが出土している。灰色～淡灰褐色の須恵質の胎土に薄く施彩し，濁緑色を呈している。

3，須　恵　器（第28・29図，図版第30・31）

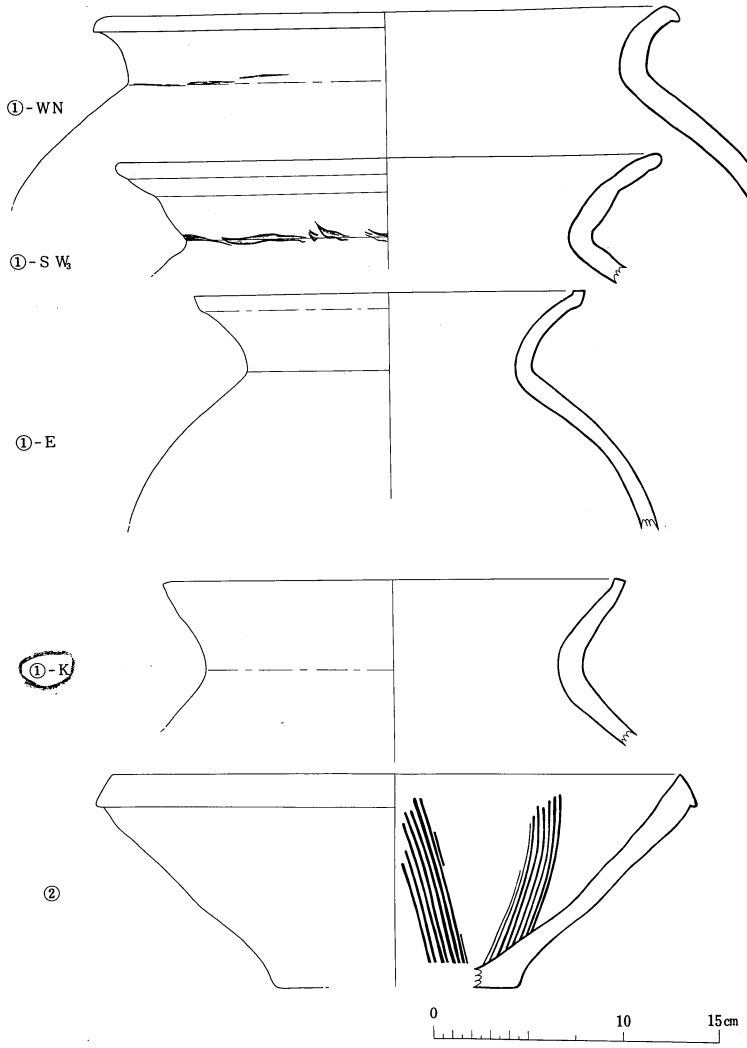
表面採集，トレンチ調査に於て出土した須恵器は，50数点である。第Ⅱ基壇トレンチ，西門周辺で各10数点出土しており，あとは第Ⅰ基壇，東トレンチ築地周辺，西トレンチ内（瓦溜り，及び西門以西を含む）南トレンチ築地周辺から数点ずつ出土しているが，第Ⅲ基壇トレンチからの出土はない。

器形としては，杯蓋（偏平宝珠つまみ）杯身（口縁部立ちあがりの認められるもの～高台を有するもの，糸切り底を有するもの）高杯，瑞，短頸壺，甕，（大型甕，中型甕，直口甕），小瓶片等々であるが，杯蓋，杯身，高杯，瑞等の破片は，賞田廃寺建立以前と思われる器形も含まれている⑨。

〈杯蓋〉　三点出土しているのみで完形品はない。偏平な宝珠つまみを持つもの（第Ⅱ基壇，第28図⑧－Ⅱ，図版第30）は，淡灰色を呈し，焼成堅緻な土器で，ヘラケズリは認められない。中心部で0.9cmの厚さがあり，内面はハケ調整を施し，ていねいに仕上げている。天井部と口縁部の間は，ふくらみを持ちながらなだらかにさがり，0.5cmの厚さになっている。口縁部は不明である。口縁部が明らかなものは，わずか口縁端部が垂直に0.4cm程折り返し，断面はわずかに逆三角形を呈している。天井部は，ほぼ平らに近く青灰色を呈し，内面はなで調整を行っている。口縁端部に重ね焼きのあとが見られる。（ＳⅡ－Ｔ築地内側溝第28図⑧-築地内，図版第31）。他の一点は，わずかに端部を外側に張り出しぎみに折り返しているもので（西門基壇直上）灰色の細砂を含む胎土でよく焼成されている。天井部は，口縁部から2.5cmの所までヘラケズリを施し，その部分からなだらかに口縁部にむかって下っている。内面はなで調整を行っている。表面に重ね焼きのあとが認められる。

〈杯身〉

明らかに古墳時代（６世紀代）のものは別にして杯身は10数点出土している。口縁部たちあがり，



第29図 須恵器備前焼実測図
①須恵器（WN＝WNT, E=EIT, K＝窯,②備前焼）

ほぼ垂直に0.6㎝程あがり受部がわずかに残っているものが一点（表面採集）ある他は高台を有するものと，糸切り底のものである。高台を有するもので口縁部の復原出来るものは一点のみで他は，底部小破片である。高台およびたちあがり部分からみても，口縁部直径は復原推定14cm前後のものと思われ，高さは3.3㎝である。高台部分は，0.5～0.8㎝で，逆台形でふんばりのしっかりしたものと，細手で安定の悪いものがある。

〈甕〉

甕は大型甕，中型甕，直口甕の三種類十数点が出土している。

《大甕》大甕は口縁部直径の計れるものはないが，大きく外側に立ちあがり，体部外面にコウシ状たたき紋を施し，内面は青海波状たたきを施している。胎土は灰青色を呈している（WIT，第28図，，図版第31）。やゝ外むきに立ちあがる口縁部のものは，表面上部に斜めにヘラ状工具で二段に分け，あや杉状に沈線を施しているもの（E－IT 築地内，第28図，図版第31）がある。

《中甕》，　EIT築地内から出土のものは，口縁部復原直径21cm“く”の字状に4㎝立ち上がる口縁部をもち，口縁部は水平に切って いる。たちあがり内側は，なで調整を行っている。体部外面は，平行にたたき文を,内面は青海波文を部分的になでを施すことによって消されている。

WNIT出土のものは口縁部復原直径30.5cm口縁部立ちあがりは，3.5cm程,外向きにたちあがり，上部で外に押さえているので端部は丸く，下向きに突出している。（第28図）内外面ともたたき目はなく，口縁部内面は横方向に体外部面は横から斜め方向に荒くヘラケズリを行っている。体部内面はナ

デ調整を行っている。

ＳＷ３Ｔ瓦溜外から出土のものは、口縁部復原直径28.5cm、口縁部たちあがりは、“く”の字状にはげしく粘土ひも巻きあげの凹凸を残しながらひきあげている。端部は、上に丸くおさめられている。

窯址からは３ケ体分出土している。口縁部直径の復原のできるものは、24.4cmを計り、表面は青灰色によく焼成されている。口縁部は“く”の字状に凹凸をもってたちあがり、口縁端部はやや外側に下りぎみである。体部にコウシ状にたたき目文を施し、その上をヘラ状工具でひっかいた様を呈している。体部内面は青海波状たたき文を施し、たちあがり部分は横なで調整を行っている。

（第28図　図版第31）窯地から出土のもう一点は口縁部たちあがり部分の破片であるが、たちあがり部分に二段、二つの浅い凹凸で分けその上段、下段ともに、櫛状工具（２～４）本で縦方向に、ていねいに上下とも端部をそろえて、沈線を施し、模様としている。内面は、横方向になで調整を行っている。あと一片は頸部のみの小破片で、体部内面に青海破文を施している。

〈直口甕〉　　ＷＮＩＴから一点出土している。

口縁部復原直径13.4cm、灰色の焼成堅緻で良好な土器片である。3.6 cm前後のやや外傾する口縁を持ち、口縁端部は水平に近い。体部は全容をみることはできないが、体部の肩の張り出しは余りない。口縁部内面及び端部体部表面に縁の自然釉がかかつている。（第29図，図版第31）

〈短頸壺〉

短頸壺は、第Ⅱ基壇から小破片が一点と窯址から一点出土している。

第Ⅱ基壇出土のものは、体部から口縁部への小破片であるが、灰色を呈している。窯址から出土のものは、口縁部直径推定９cm程で口縁部立ちあがりは、やや内傾して0．８cmの短い口縁である。体部は外側に張りを持っている。体部に蓋をかぶせて焼成した痕跡がみられる。底部は不明である。灰青色を呈し、胎土内に石英小細砂粒が多く含まれている。

〈小瓶〉

口縁部小破片がＷＩＴ回廊溝内から出土している。口縁部直径およそ３cmで端部は外側に折りまげて、水平に近いものである。

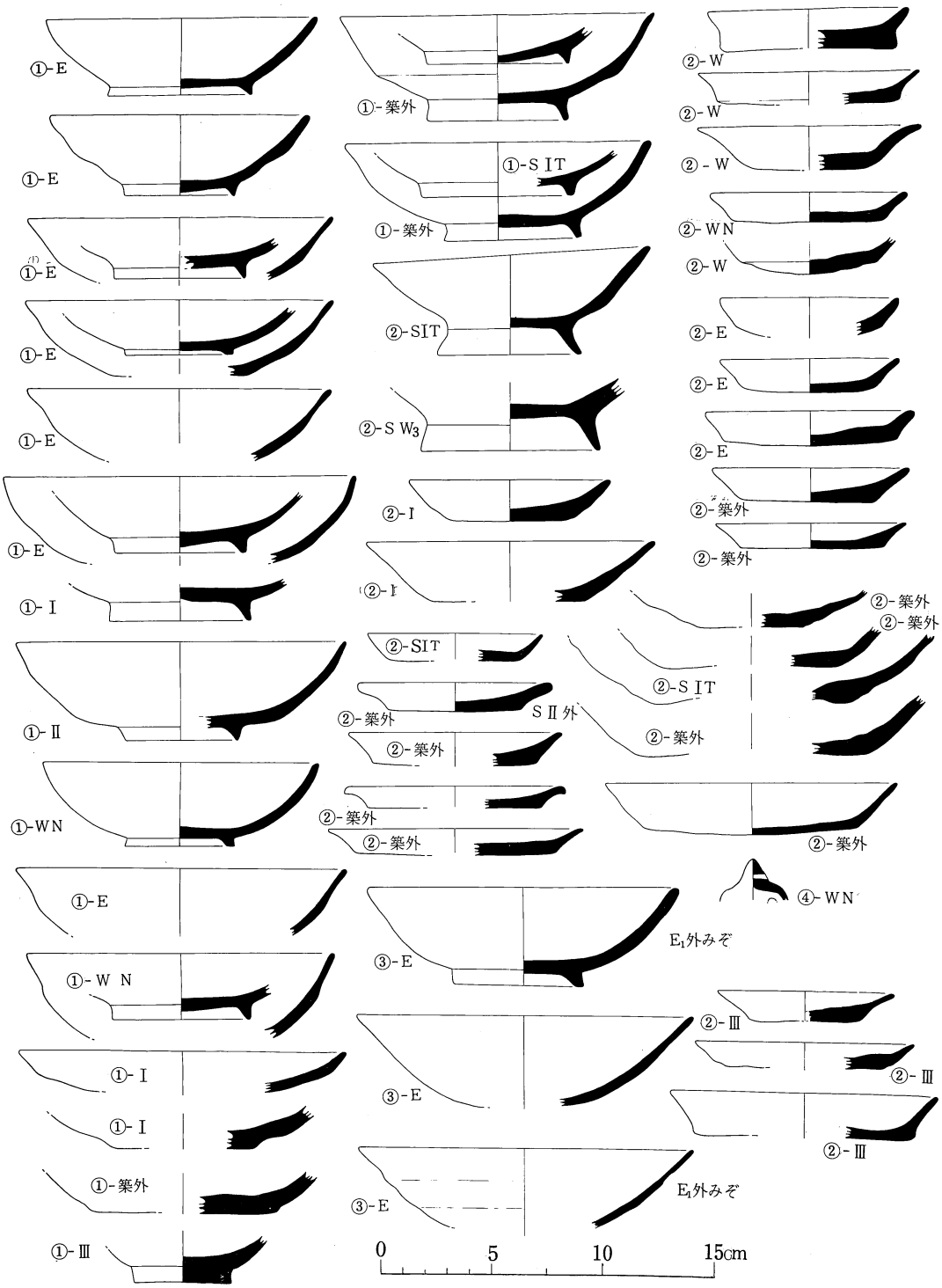
〈獣足〉

２２×２４cm角、高さ３cmの硯か盤の脚部と思われる須恵器の獣足が一点（西門ＮＷＮＩ）出土している。

４、須恵質土器（第30図、図版第32、33）

こゝで取り扱う須恵質土器とは、いわゆる須恵器のように焼成賢緻でなく、非常に焼きが甘く、須恵器の生焼け、あるいは土師器の焼けしまったような感が強く、灰白色～白灰色を呈している。須恵質というよりはむしろ土師質といった方が適当なものも含まれているが、こゝでは一括して須恵質土器として扱った。

器形は埦類がほとんどであり、東海地方等において、山茶埦と呼ばれているものとほとんど同じような形態をしている。高台を有するものと糸切り底の二種がある。出土地点もＷＩＴ西門以西、ＥＩＴ



第30図 須恵質土器，土師器，瓦器実測図
①須恵質土器，（出土地点記号は第28図に同じ），②土師器（前同），③瓦器（前同），④土鈴（前同）

築地外溝、ＳⅡ－Ｔ築地外溝から20点近く出土している。

高台を有するものの口縁直径は、ほとんど14cm前後で、高さは４～５cmあり、焼成は甘く、小石細砂を含んでいるものが多く、重ね焼きを行っているものもある。高台はすべて貼り付け高台で0.7～1cmの高さを持ち逆三角形～逆台形をしている。

糸切り底のものも（ＥＩＴ築地外溝他）、高台を有するものと同じように、灰白色～白灰色を呈し、口縁直径は14cm前後で、高さは４cmあり凹凸を持って引きあげられている。

５、土師器（第30図　図版第33、34）

土師器は細片も含めると一番多く出土している。ＥＩＴ、ＷＩＴ、ＳＩＴ　、からが最も多く出土しているが、各基壇トレンチ内からも少量ずつ出土しているが器形等を知りえるものは少量である。

器形は、小皿、皿、埦、甕、甑（こしき）、がほとんどである。

〈小皿〉

口縁部直径８～12cm，高さ1～1.5cm前後で赤褐色から橙色のものがほとんどである。口縁部は底部から申しわけ程度に引きあげているもの，凹凸を特って長く引きあげているもの等々がある。底部はほとんどヘラ切りを行い，底部の厚さが１cm近くあるものもある。

〈皿〉

口縁部直径16cm，高さ1.5～２cmで，黄色～橙色を呈している。粘土ひも巻きあげ痕が認められ，口縁部も凹凸がある。内面はなで調整を行っている。底部はヘラで切り離している。

〈埦〉

口縁部直径14～15cm，高さ４cm前後で，高台を有するものと，ヘラ切り底のものがある。高台を有するものの中には1.5cm近くの高い高台を付けているものもある。黄白色を呈し，体部は非常に凹凸がはげしく，口縁部もひずんでいるものが多い。

〈甕〉

ＥＩＴ築地外溝から多量に出土している。基本的には他地点の出土のものと変りはないが，細部で少し異っている。口縁部直径はほとんど32～35cm前後である。

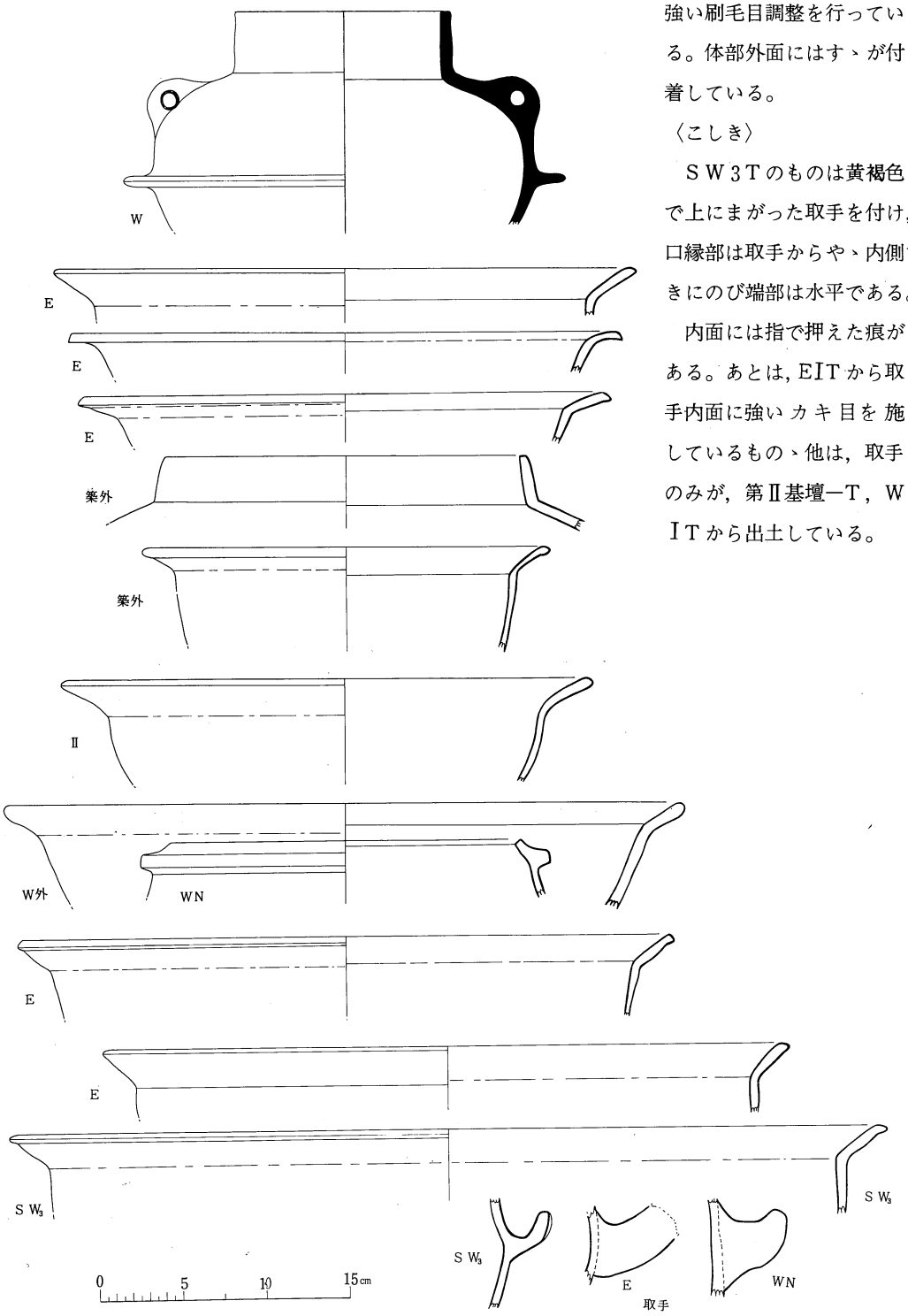
ＥＩＴ出土のものは，口縁部が外上方にひらき，端部がほぼ水平になるものと，少し下方にさがりぎみのものがある，口縁部および体部内外面全面に強いカキ目で内面は横へ斜めに，外面はたて方向に調整を行っている。すべて体部外面にすゝが付着している。

ＳＷ３Ｔからも数点出土している。口縁部が“く”の字状に体部から厚く引きあげ，端部を上に細くしているものは，口縁部内面および体部外面に８本前後のするどい櫛状工具で強くカキ目を施し調整している。

口縁部が凹凸を持って外上方にひらくものは，内面のみ横方向に，長さ３cm，幅１cm前後のカキ目を施し，体部上端に指で押えたような痕を残している。

第Ⅱ基壇－Ｔから出土しているものは，体部内面のみ強いカキ目を施している。

西門以西－Ｔから出土のものは，口縁部はゆるく外上方にひらき，端部は丸くおさめ，内外面とも



強い刷毛目調整を行っている。体部外面にはすゝが付着している。

〈こしき〉

ＳＷ３Ｔのものは黄褐色で上にまがった取手を付け，口縁部は取手からやゝ内側むきにのび端部は水平である。

内面には指で押えた痕がある。あとは，ＥＩＴから取手内面に強いカキ目を施しているものゝ他は，取手のみが，第Ⅱ基壇―Ｔ，ＷＩＴから出土している。

第31図 土鍋等実測図（記号は出土地点（第28図に同じ）を示す

6，瓦　器　（第30図，図版第37）

ＷＩＴからと，ＥＩＴ築地外溝内から三点出土している。杯～椀形になる瓦器で，灰黒色を呈し，内面は，0.4～0.8cmの教条の暗文が見られる。口縁部直径15cmあり，外面は口縁端部から1～2cmより上は，すんなりと引きあげられているが，それより下は指で押さえて調整している。底部は不明であるが，高台を有するものと思われる。

7，土　鍋　（第31図，図版第35）

ＷＩＴから二点出土している。器形を知り得るほゞ一ケ体分が，西門直上から出土している。口縁部は体部から4cm直立している。厚さは0.6cmある。体部は少しふくらみを持って底部にむかっている。底部は丸底である。体部の上の方に取手を二ケつけ，中程より下にはがま（なべぶち）をつけ，はがまより下は全面にすゝが付着している。瓦質のもので内外面共黒灰色を呈している。口縁部.体部面と体部外面の一部に櫛状工具で，横方向にかき目を残している。

8，備前焼　（第29図，図版第27）

備前焼の出土状況は，ＷⅡＴの出土がほとんどで，他の地点からはＥＩＴ築地外側溝から二点のみ出土している。ＷⅡＴのも西門以西の谷部分からの出土がほとんど全てである。これは，賞田廃寺址消滅の時期と思われるⅦ期の三つ巴文軒先瓦（軒丸，軒平を含め）とも多分に関係あるものも存在するであろうけれども，賞田廃寺に伴うものよりむしろ賞田廃寺の西方に南に伸びる小尾根上に堂屋敷跡と呼称されている室町時代の寺院址あるいは，西北方一帯に分布する中世墓地群との関連遺物ではなかろうか。

器形としては，すり鉢，甕，壺，片口，鉢等である。

ＥＩＴ築地外側溝からのものは，片口片と鉢体部片のみであるが，両方共灰色によく焼成されており，須恵器に近い様相を呈している。

ＷＩＴ,ＷＮＩＴからは，すり鉢二点と壺底部等が出土している。すり鉢は口径口縁部直径30cmを計り，高さは11.5cmある。口縁端部は斜めに直線的に下って下部に少しのふくらみをもっている。外側は，灰青色で須恵器の様な肌をしている。内面は灰紫色で，横なで調整後，８本の櫛状工具で沈線を施している。もう一点は，底部の破片であるが，外側は班灰色を呈し，内面は灰褐色ぎみである。沈線は10本である。

壺は，底部を残す破片で，内面は粘土ひも巻き上げと思われる凹凸を残している。内面は青灰色，外側は赤褐色を呈している。胎土は全体的に細砂を含み，灰色から褐色である。あとは，壺，甕等の体部破片が出土している。

9，日本製磁器類　（第28図，図版第27）

非常に少数ではあるが，古瀬戸物，天目等々が出土している。瀬戸物は，ＳⅡ－２Ｔから片口のついたおろし台と思われるものが出土し，口縁部直径推定17cm前後で，口縁部に返りを持っている。

胎土は,白黄色で外面は透淡白色を呈し，内面は櫛状工具で強くきざみ目を施している。

天目は口縁部小破片であるが，口縁直径13cm前後の茶垸になるものであろう。（WNIT）内外面共，茶褐色～班暗褐色で，いわゆるアメ色になっている。

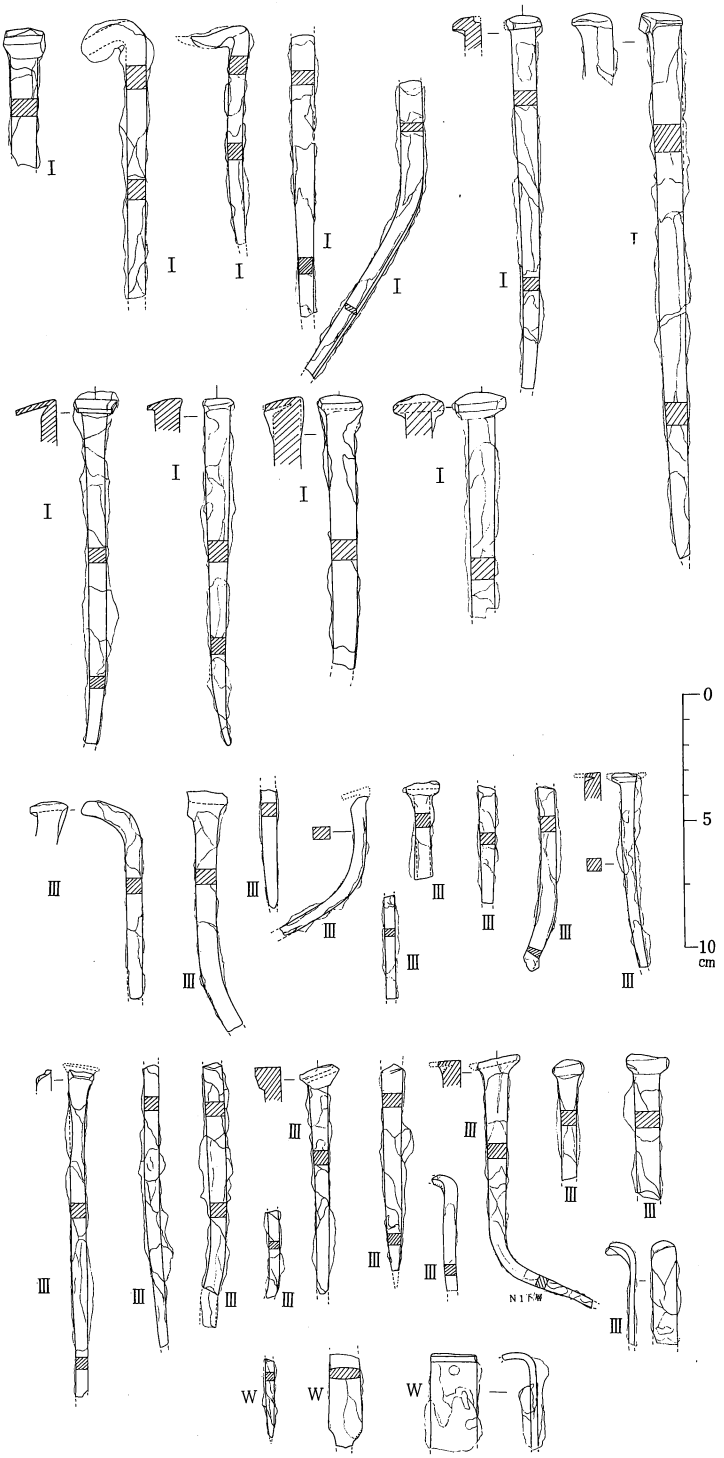
胎土は微細砂粒を含む白灰色である。

他に,WNITから内外面とも淡黄緑色の釉を施している杯が，垸形になると思われるものがある。

10，中国輸入陶磁器類（第28図，図版第38）

青磁，白磁片等が認められるが，これらの焼物も備前焼と同じ様にそのほとんどが，WIT，WNIT,EITからの出土である。青磁と思われるもの二点，白磁と思われるもの二点が出土している。

青磁の一点は，口縁部推定20cm前後で，ほぼ垂直に立つ体部から外にひらく口縁部が張り出している鉢状の器形になると思われるもので，白灰色の胎土に2～3cmの厚さで青白色の薬がけを行っている外面の体部上の方に指でおさえた様なあとがめぐっている。もう一点は，　底部破片で高



第32図 鉄器実測図（記号は出土地点を示す）

台を有している胎土は，白色～白灰色を呈し，内外面とも淡緑色の釉が高台外側部までかけてある。

白磁と思われる二点をも口縁部推定15～20cm前後で，鉢状の器形であろう。口縁部はやや外側に折りまげている。胎土は，白色～白灰色で，厚さは二点とも4mm程で非常に薄い。

11，そ の 他

〈土鈴〉一釣手と銅部上面のみ残存している。焼きは，土師質に近く黄白色を呈している。

〈土錘〉S Ⅱ−1T 南築地外側溝内から幅1.2cm，長さ3.35cmのものが一点出土している。

三，そ の 他 （鉄器） （第32図，図版第39）

1， 釘

出土した鉄器は，約50片で大部分が釘であり，第Ⅰ基壇，第Ⅲ基壇，西門基壇から少量出土したが，ほとんどが破片で，その上錆びぶくれが著るしく原形の判明するものは皆無である。これらの釘は，全長23cm，11mm角，全長17cm，9 ×6mm角，全長13.8cm・8mm角，長不明10×8mm角，同7×6mm角，同6mm角，同5mm角，同3mm角に分類されるが，計測できるものは稀かである。全体的な出土状況は，少量で上記以外では検出されなかった。

2，そ の 他

全て破片であるため原形を推定することは，極めて難解である。なかには，棒状蝶番状の曲り方を示すものが2例，ノミ状のものが1例，さらに先端の曲った鉄帯状のものなどがあるが判然とはしない。

鉄器でも仏具関係と思われるものは皆無である。また，検出された遺物のうちには上記の瓦，土器類，鉄器以外のものはなく，特に青銅製のものや，塑像物状の焼成物も検出されなかった。

（伊 藤 晃）

註①，巌津政右衛門「第5編奈良時代」『岡山市史・古代編』405頁，岡山市役所，1962年

②，『平城宮発掘調査報告Ⅱ』「遺物」59～61頁，奈良国立文化財研究所1962年

③，玉井伊三郎編『吉備古瓦図譜』図版第二，吉備考古会図譜刊行所1941年

④，杯身は口縁部が約1.5cmたちあがり，やゝ内側にかたむき，底部中程までヘラケズリが施されているものが第Ⅱ基壇整地層トレンチで，杯蓋は，小破片であるが，天井部中程までヘラケズリが施されているものが西トレンチから，又，高杯は，脚部片であるが長脚二段になるものを表面採集している。蹟は肩部から胴部の小破片が西門基壇面上面から出土している。

⑤，楢崎彰一『彩釉陶器製作技法の伝播』名古屋大学文学部研究論集XLIV（史学）1967年

小山富士夫　『正倉陛三彩』世界陶磁器全集２，奈良，平安，鎌倉，室町篇，1957年

⑥，間壁忠彦・間壁葭子　『岡山の遺跡めぐり』日本文数出版　1970年

鎌木義昌・間壁忠彦　『大飛島遺跡ー古代の祭祀』倉敷考古館　1964年

⑦，註ー⑥に同じ

⑧，黒住秀雄氏の採集資料で他に縁釉片等が多数採集されている。

⑨，註ー④参照

岡山県内出土三彩地名表

地　　名	遺　　構	出　土　物
赤磐郡熊山町熊山	山頂特殊(石積)遺跡	奈良三彩小壺（身）
笠岡市大飛島	祭祀遺跡	奈良三彩小壺（蓋，身）
岡山市山神（旧一宮町）	神力寺址	二彩小塔片

49.
1976.3月

第五章　結　　語

賞田廃寺附近一帯は，人為の手が比較的加わらず自然景観を残す地域であるが，岡山市街地の近郊にあるため早晩宅地化等の波が及ぶことは必至である。事実，一部はすでに宅地予定地として売買されており，今後も増大することは火を見るより明らかである。このため賞田廃寺の保存問題が表面化し，第二章に記されている調査目標のもとに発掘調査が実施された。

今回の発掘調査は，寺院址各部の発掘をとうして遺構の残存状態と寺域を把握するとともに賞田廃寺の内容，性格，様相を明らかにして賞田廃寺を国指定史跡にし，保存を計るための資料を得ると同時に，古代地方寺院のもつ歴史的意義の解明に資することを主としたものである。今回の調査方法は，トレンチ方式であり，かつまた予算の都合等により一部の基壇，築地，回廊の基本的構造や形態については明らかにしえたが，それらの全体の規模，食堂，中門，南大門等の主要堂舎の伽藍配置，さらに雑舎，工房等の寺地については未調査のままである。これらの検討については，今後の寺域全面発掘と調査地域の拡大をまたねばならない。

いずれにせよ，今回の発掘調査結果が，賞田廃寺の資料としてだけでなく，古代地方寺院址の研究，さらには岡山地方の古代史研究に若干なりとも資するところがあれば幸である。

1，賞田廃寺の歴史的意義

賞田廃寺の歴史的意義を考える場合には，今回の発掘調査で，不充分ながらも明らかになった幾つかの事実と，第一章で概略的に触れた賞田廃寺をも含めた古墳時代から奈良時代の遺跡の状況＝地域的要素とがある。

賞田廃寺の歴史的意義を考える場合の一つの要因は，その歴史的変遷である。創建は，出土瓦から飛鳥時代後葉と考えられるが，創建時期の遺物＝瓦は全て奈良時代以降の造成層に埋没し，遺構も埋没しているであろう。しかし，創建時期の建物は，小規模なものであったと考えられる。この寺院が，本格的寺院として建立されるのは，白鳳時代初期の金堂造営からであるが，遺存する他の主要堂塔，回廊など大部分の主要部が白鳳時代末乃至奈良時代初頭に至って一気に造営され，伽藍が一挙に完備した状況を示す。その後奈良時代後半に至ってこの寺院の文様瓦がいわゆる「平城宮式」のものとなるが，この現象は広く吉備地方の古代寺院に見られる共通的なものである。平安時代には衰退したとはいえ，一応寺院として鎌倉時代まで存続するが，その廃絶は，上東平野に存続していた備前国府の衰退，消滅（移転）の動向に多分に関係があるであろう。以上の時間的変遷の特徴は，賞田廃寺の側面を示すものである。

賞田廃寺の建築構造の特異性は，石英粗面岩製壇上積基壇による構築である。古代地方寺院におけるその使用例としては，吉備地方では唯一のもの（他の古代寺院の発掘調査が稀少であるということもあるが）であり，全国的にみても私寺ということを加味すれば極めて稀なものである。しかも，壇上積基壇の使用が塔のみならず西門にも使用されていることからみて，第Ⅲ様式瓦の伴なう主要建築

物は，壇上積基壇である可能性が大きく，西門のそれから南大門，中門が壇上積基壇である可能性も極めて強い。さらにこのことは，壇上積基壇の構築が，中央寺院，宮殿の単なる模倣的要因や偶然性によるものでなく，律令体制下における壇上積基壇のもつ政治的，構造的要因，意義を消化し踏まえたうえでの使用を示すものである。当然，それ自体の技術的要因，労働組織的要素，体制をもこの「地方」なりに，ある意味で社会的に消化していたことを示すものである。壇上積基壇の使用は，他の地方寺院に対する政治的，社会的隔絶性を示すものである。さらに時間的変遷との噛み合せを考えれば，一地方私寺に壇上積基壇を普遍的なものとして使用することを可能にした歴史的必然性，構造的要因は，賞田廃寺のもつ意義を決定する重要な要素である。

また今回の調査では，伽藍配置を的確に検出しえていないが，検出遺構から，賞田廃寺の伽藍配置は，法起寺式伽藍配置と，川原寺式或は薬師寺式伽藍配置が想定される。前者は，金堂が講堂に転用されたというあまり類例のない仮説に立たねばならず，未調査地区の多い現状では後者の方がより妥当性がある。今回の調査結果では，賞田廃寺の伽藍配置を川原寺式或は薬師寺式伽藍配置と想定しておく。また寺院の造営は，築地瓦に賞田廃寺第Ⅱ様式瓦が存在することからみて金堂造営時期から寺院造営の設計がなされており，白鳳末期の瓦の断片的出土からみても工事が継続的になされていたと考えられる。しかし，第三章で詳述した金堂造営から伽藍完備に至る不自然で特異な状況は，壇上積基壇の使用と相まって，一気に伽藍を整える必要が生じ，主要堂塔が単期間に一挙に造営されたと考えられる。むしろ，この特異な様相を呈すに至った歴史的背景，原因，その必然性自体が注目される。

一方，出土遺物で特に注目されるのは，奈良三彩，須恵質土器，賞田廃寺第Ⅴ様式瓦＝平城宮式瓦である。奈良三彩は，小皿状の破片であるが非常に良好なものである。三彩の出土は，岡山県下3例目であるが，地方寺院址としては唯一のものであり，地方私寺としては全国的にみても稀なものである。奈良三彩は，特定のことにのぞんで一時的に小規模な官営工房において官工人によって製作されたもので，供給先も限定される①ものであり，特に地方にあっては非常に貴重なものであろう。この三彩が賞田廃寺に存在していたことは，律令政府を通しての入手であり，賜与されたものであろう。このことは，中央政府と賞田廃寺の造営者であるこの地域の族長との政治関係，律令体制における階層的高位性を示すものであろう。

また，須恵質土器は，平安時代後期以降の日用雑器と考えられ，ＥＩトレンチを中心に多くの出土をみた。この土器および第Ⅵ～第Ⅶ様式瓦の出土は，賞田廃寺が衰退したとはいえ依然として古代寺院としての社会的機能を存続していたことを示すと同時にその生産体制のあり方を示すものである。この土器は，胎土，造形，焼成からみて須恵器の退化的系統に乗るもので，まさに律令体制の須恵器生産からの構造的変質を示すものである。この土器は，まさにこの時期の生産体制において個別経営の自立を指向する内でその先進的な体質改善をなしえた経営体に転化しえず，旧体制からの未脱皮のままに相対的後退をきたし，その系統的退化の自滅的な没落の道を進む旧態的生産性を示すものであろう。このことは，まさに歴史的動向における後退性であり，賞田廃寺との相関関係から，賞田廃寺の終末への動向を示すものではなかろうか。

平城宮式瓦は，前記のように奈良時代後半に至って吉備地方の各寺院址でも斉一的に見られる現象

で，国分寺，国分尼寺の造営と相俟ってこの時期における地方寺院と中央政府との関係，動向を示すもので，国家仏教に対する地方私寺の相対的従属化を意味するものではなかろうか。

賞田廃寺をとりまく遺跡の状況は，第一章で触れたとおりであるが，賞田廃寺に先行し，その基底を形成した古墳時代，特に後半期古墳の展開は，前半期古墳にまして旭川両岸平野部の著るしい不均衡を物語り，上東平野の族長，古代家族と西岸平野部のそれらとの格差が決定的であったことを考えさせる。上東平野の族長層，有力古代家族によって構築されたと考えられるこの平野周辺丘陵の横穴式石室墳の展開様相は，竜の口山山頂群集墳，湯迫古墳群，四御神古墳群，矢津古墳群，操山古墳群に大別され，古墳自体もその存在状況から孤立的な大形石室墳から，中形石室墳の地域的点存をなすもの，やや小さな中形石室墳の数基がグループ化をなすもの，小形石室墳の群集化，極小石室墳の点在的なものとに大別すると５つに類型化される。さらにその分布状態から，矢津，四御神古墳群にみられる小地区的在地性にもとづくものと，操山古墳群，竜の口山山頂群集墳のような汎地域（上東平野）を示すものとに分けられる。このような上東平野における後半期古墳の多様性と地域性は，その族長層，及び家父長制的世帯共同体の構造的多様性を考えさすものである。一方，西岸平野部の後半期古墳の展開は，西の矢坂山に汎地域的に少数の中形，小形石室墳が集中して造営されており，上東平野の中形石室墳以下の縮小的類型化を示すが，その劣弱さは否定しがたいものである。この状態は，地域的に上東平野の族長層に対する従属性を物語るものと考えられる。このことは，６世紀後半の旭川両岸平野部において，各集団内部の階層分化が巨大族長を頂点とする階級構成のなかで進み，有力古代家族と劣弱家族との分化が地域的に進み，族長層及び有力古代家族への後者の身分的隷属化をみちびいたと考えられ②，家父長制的世帯共同体の旧体制からの相対的自立性と構造関係の地域的状況を表わすものであろう。

一方，奈良時代の岡山平野（狭義）における寺院の展開も，上記の動向のさらに発展的状況を呈し，上東平野には賞田廃寺をはじめとして５寺院が造営されているのに対し，西岸平野部では皆無である。寺院造営に際し，その膨大な労働力と資材の集積に上東平野だけで賄ない切るものではなく，西岸平野のその集積の上にたたなくては不可能である。このことは，岡山平野における家父長制的世帯共同体の相対的自立とそれにともなう熾烈な階級関係の進展を表わすもので，備前国府が上東平野に設置されたことも決して無関係ではないであろう。また，上東平野の古代寺院は，出土瓦からその創建が奈良時代前半であり，賞田廃寺の後塵を拝すものである。その内２例は，賞田廃寺と同一文様の瓦をもつもので賞田廃寺との相関関係のもとに造営されたものと考えられる。賞田廃寺は，上東平野の寺院の先導的で中核的存在であり，岡山平野の白鳳時代から奈良時代の地域的構造の頂点に象徴的に立つものと考えられる。そして，賞田廃寺は，古代的体制に基づいて存続し，古代的構造の解体と中世的再編成に際し，それに転化しえず消滅したのではなかろうか。

賞田廃寺の歴史的意義

以上の要因，特徴から賞田廃寺は，本質的に白鳳時代以前（第Ⅰ期）と，伽藍配置の完備した奈良時代以降（第Ⅱ期）に分けて考えるべきである。

創建から白鳳時代の第Ⅰ期の賞田廃寺を考える場合，時間的にも空間的にも近接する唐人塚古墳が，それに先行するものとして考えられる。唐人塚古墳は，上東平野，西岸平野部を通して石室規模が第1位で，かつまた家形石棺をもつ唯一の巨石墳で，上東平野に形成された後半期古墳系列の構造的頂点に位置するものである。前記の後半期古墳の状況と相俟って唐人塚古墳の被葬者（家族）は，家父長制的世帯共同体の前半期古墳時代的支配体制からの相対的自立を通して構造的再編成に基づく階級の地域的頂点に立つ族長と考えられる。一方，唐人塚古墳の石室構造にみられる畿内中央指向性は，相対的自立に基づく構造的再編成の過程における葛藤を通じて畿内中央政権の地方への直接的介入とその結果としての地域族長の畿内中央政権への相対的従属性を示すものではなかろうか。飛躍的にみれば，地或的ヒエラルヒーの頂点としての地域族長の畿内中央政権の官司体制への組み込まれではなかろうか。

賞田廃寺は，時期，立地からみても唐人塚古墳被葬者の直接的系列の後世代による創建と考えられる。賞田廃寺の出現は，上記の唐人塚古墳に示された構造的，政治的動向のより発展形態に基づいて出現したと考えられる。かっての吉備政権の一角を担った岡山平野（狭義）の地域集団における家父長制的世帯共同体の相対的自立は，古代家族を中核とした構造的再編成による地域的ヒエラルヒーを形成さし，前支配構造の概念的象徴である古墳造営からの脱却を指向するものであろう。さらに地域的ヒエラルヒーにおける支配階級としての中央政権への絶対的依存は，とりもなおさず構造的にも，現象的にも中央への指向性を示すと考えられる。以上の要因とこの地域の構造的進展とが相俟って賞田廃寺が創建されるのではなかろうか。したがって賞田廃寺は，地域的ヒエラルヒーの頂点に立つ古代家族の私的要因を多分にもつが，この地域における民衆の歴史的メモリアムでもある。一方，以上のことは，賞田廃寺が家父長制的世帯共同体の自立と，中央政権＝律令体制による地方画一的直接支配という相反する要因を内包するもので，この矛盾関係が，古代を通じて賞田廃寺の方向性，性格を根本的に規定するものと考えられる。

賞田廃寺の第Ⅱ期は，奈良時代の最盛期とその後退的な平安時代，さらに末期的な鎌倉時代前半と一連の動向の時期である。奈良時代初期における中央寺院に準えた壇上積基壇の構築と，伽藍配置の一気な造成，さらに三彩の保持は，著るしい中央指向性と第Ⅰ期からの飛躍的展開を物語るもので，これらの社会的，政治的要因を踏まえ，かつまた中央律令政府による裏打ちが当然考えられる。賞田廃寺の地方私寺としての隔絶性と中央的様相は，備前国府が賞田廃寺のすぐ南にこの前後の時期から造営されたことと相俟って，賞田廃寺造営主体者が地域的ヒエラルヒーの頂点的存在としてだけでなく，まさに律令体制への階級支配者としての絶対的依存性と，中央政府のこの造営主体者に対する地域直接支配の依存性を示し，律令体制における地方族長としては特異な高位置にあったことを考えさせるものである。さらにそれは，国家宗教としての仏教をも通しての中央律令体制の地方直接支配のより強固な進展に際し，地方豪族が，律令体制への階級的依存と，これまでの自己の地域における権力の保持という矛盾関係の克服を物語るものではなかろうか。また，上東平野の寺院がつぎからつぎに建立されるのがこの奈良時代前半であり，その要因として古代地方寺院のもつ在地の合法的な私有の特権としての反律令的機能の進展③と相俟って，賞田廃寺の隔絶性，中央指向性は，この地域豪族

としての構造的な自己矛盾の現象的象徴ではなかろうか。したがって，賞田廃寺は，律令体制を通して常に一側面として律令体制への指向性をもつもので，平城宮式瓦の導入も律令国家の国分寺，国分尼寺造営という施策に対する敏感な反応と形骸的従属性によるものではなかろうか。

家父長的個別経営に基づく豪族経営④の進展，自立化は，相対的には律令体制の後退であり，上記の矛盾関係の変化である。このことは，賞田廃寺の中央政府への指向的側面の後退であり，賞田廃寺の存在意義の低下と衰退を招くものである。

さらに荘園制の展開による在地領主経営の進展は，実質的には律令体制の崩壊であり⑤，上記の矛盾関係は，実質において解体し，形骸としてのみ存続し，賞田廃寺の形骸的存続を来たす。そして，在地領主経営の絶対的自立に基づく鎌倉幕府の展開は，この矛盾関係の消滅を意味するもので，ここに賞田廃寺は消滅する。

いずれにせよ，以上の考察は，極めて限られた範囲の調査結果に基づくもので，古代寺院に対する基本的認識の誤まりや，事実認識，評価の誤謬も多々あると思われるが，賞田廃寺の正確な再構成は今後の精密な調査と検討，考察を期したい。

2，保存に際し，

賞田廃寺は，今回の発掘調査の結果，地方寺院としては稀にみる重要な内容をもった寺院址であることが判明し，その重要性により国指定史跡として保存が講じられることとなった。同時に，塔，金堂，西門基壇が一部破損しているとはいえ良好に遺存していることが判明し，他の主要基壇も良好に遺存していると推定されるに至った。賞田廃寺の意義は，純然と寺院史の面からだけ見ても，古代寺院の実態を明らかにするもので学術的にも極めて価値の高いものである。さらにその内容は，空白に近い岡山地方の古代史を再構成する多数の重要な要素を総括的に秘めたもので，もし，賞田廃寺の全面発掘がなされるなら，岡山地方の古代史の解明のみならず，古代の日本史の問題点を幾つか解明することのできる歴史的価値の極めて高い資料を提示することができるであろう。

この意味においても賞田廃寺の保存は，今回判明した寺域に限らず寺院を中心に形成された雑舎，工房等の民衆の生産の場をも含む一大寺地の保存と，それを取り囲む環境保全が強く望まれる。さらに保存整備に際し，地域住民をはじめとして市民全体に深く根を下ろした我々の祖先の文化遺産としての心の拠り所になることを願って止まない。

終りにあたって，報告書作成に際し調査顧問，調査委員の諸先生方から多大のご教示とご助言を，さらに暖かい励ましを賜わったことを記し，あわせて感謝の意を表したい。

（水内昌康，伊藤　晃，出宮徳尚）

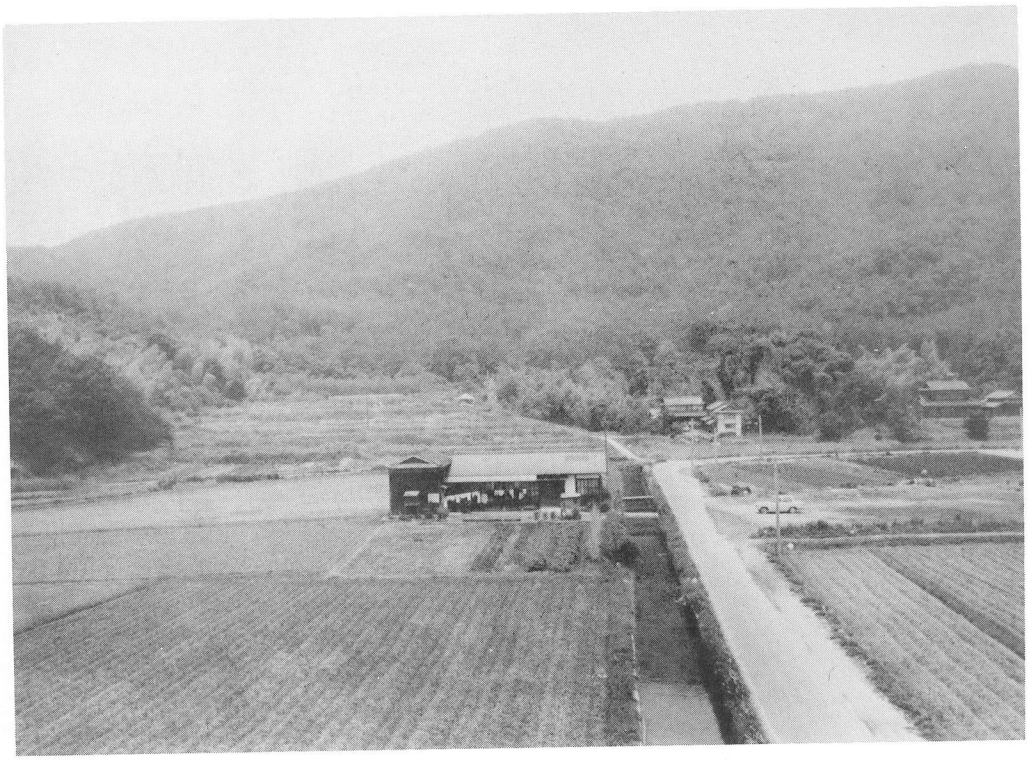
註①，田中琢　「窯業・畿内」『日本の考古学』Ⅵ，207頁，河出書房，1967年

②，今井堯・近藤義郎　「群集墳の盛行」『古代の日本』4，204頁，角川書店，1970年

③，間壁葭子，「官寺と私寺」『古代の日本』４，285頁，角川書店，1970年
④，吉田　晶　「古代社会の構造」『日本歴史』４，280頁，岩波書店，1962年
⑤，註④，286頁

参考資料，『岡山市史古代編』岡山市役所，1962年
『古代吉備の造形』倉敷考古館，1968年

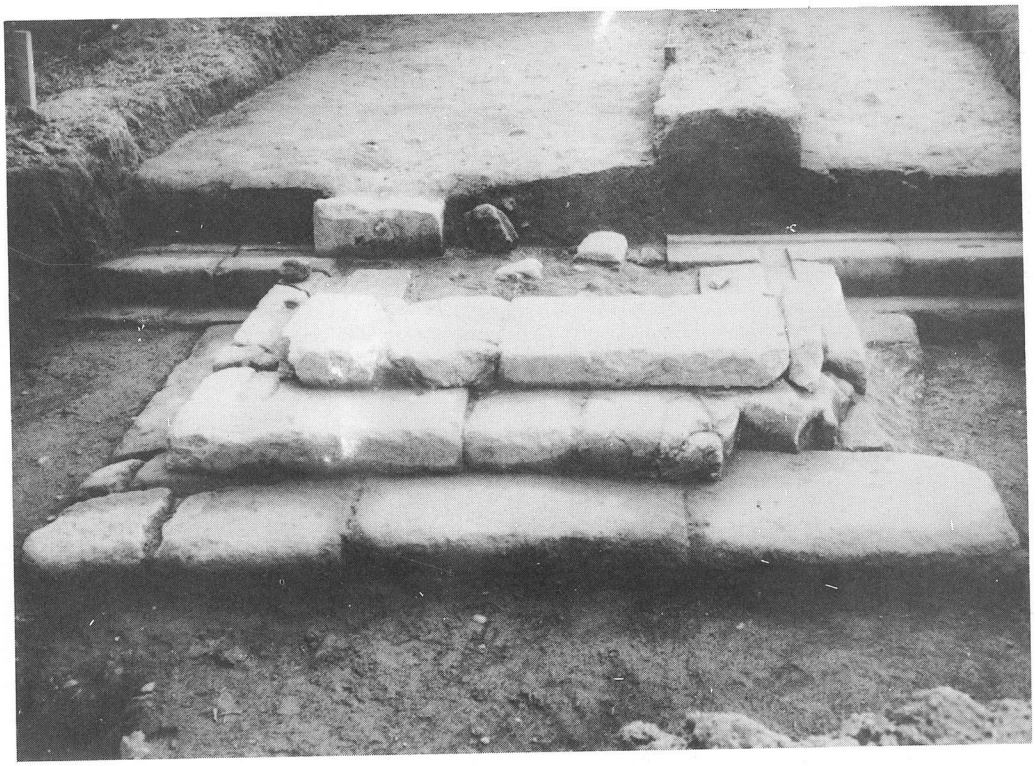
図版第 1，全　景



図版第 2，第Ⅰ基壇

東階段付近瓦出土状況

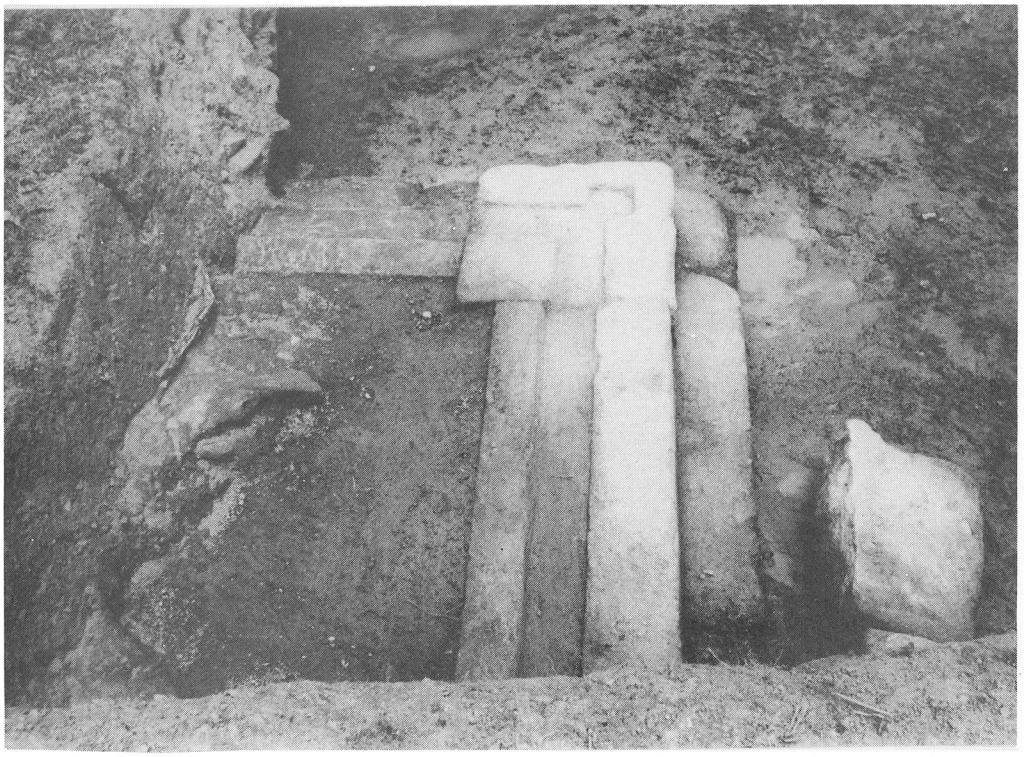
東　階　段



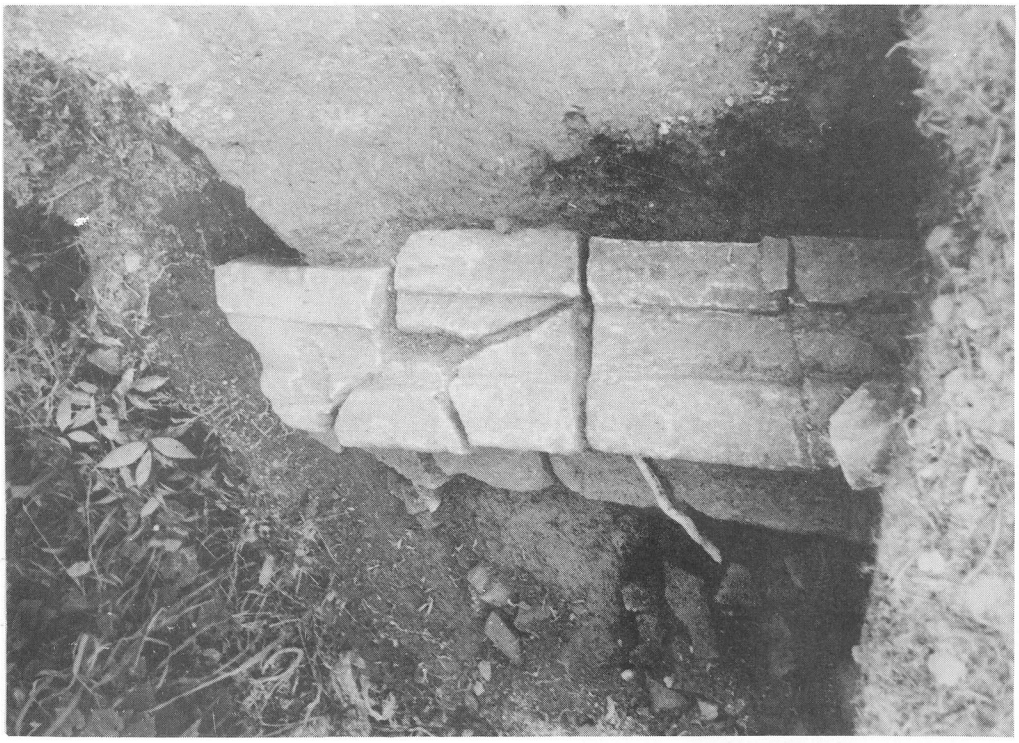
東階段

北東角（壇上積）延石，地覆石

図版第 4，第Ⅰ基壇



北東角（前同）

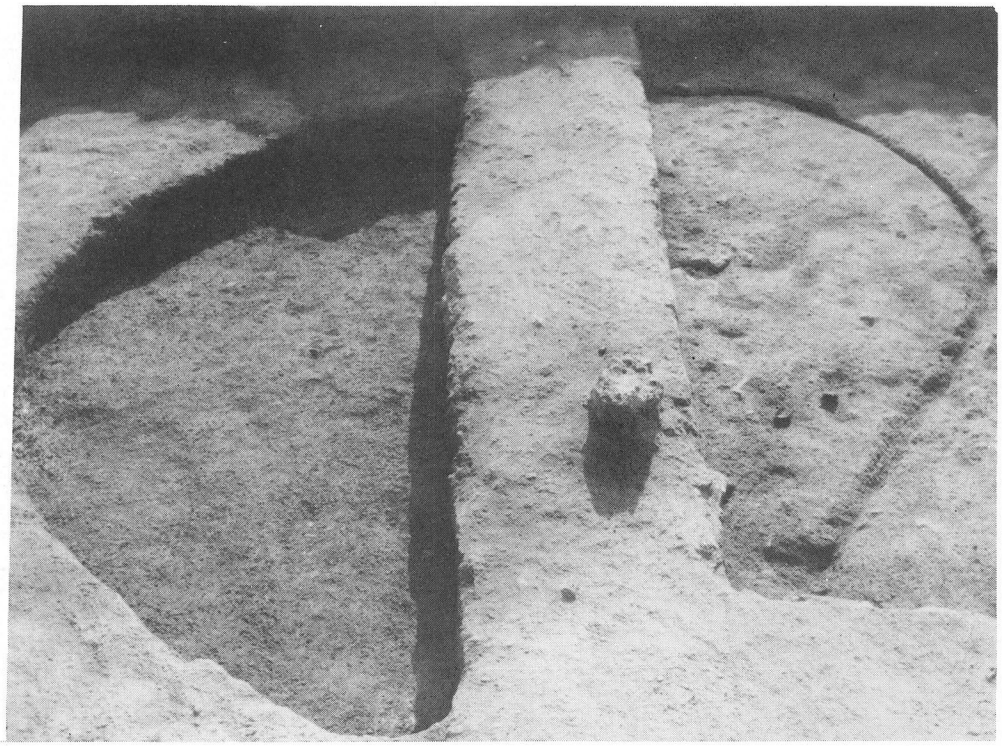


東階段南，東側地覆石

北側地覆石、延石

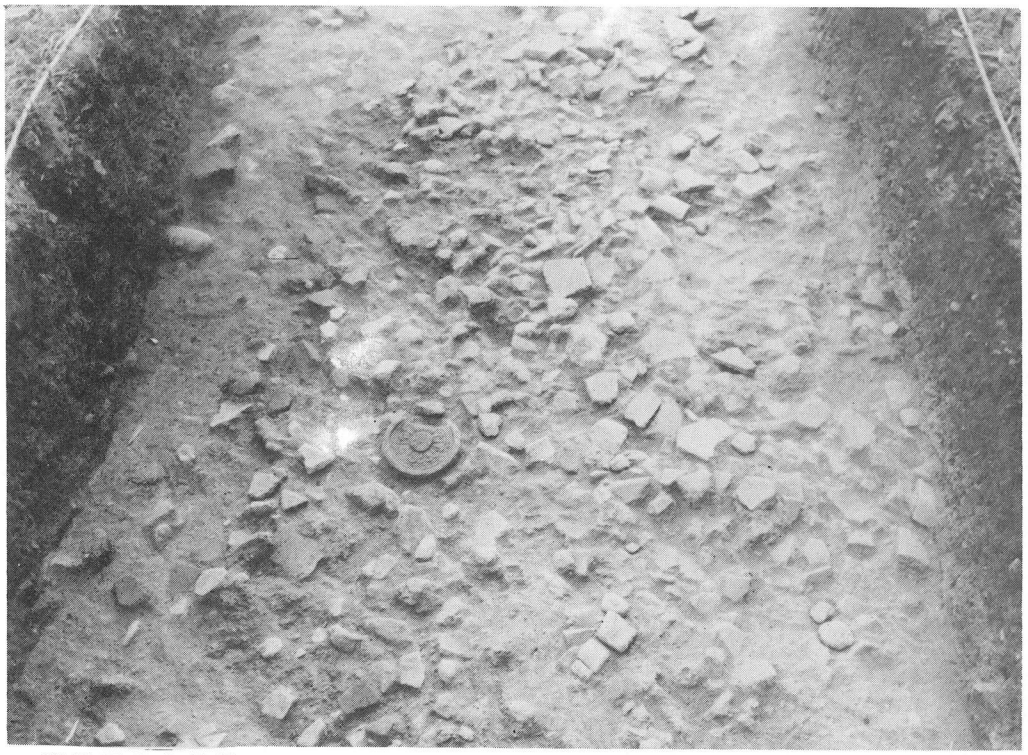
北地覆石及び北西角延石

図版第 6，第Ⅰ基壇

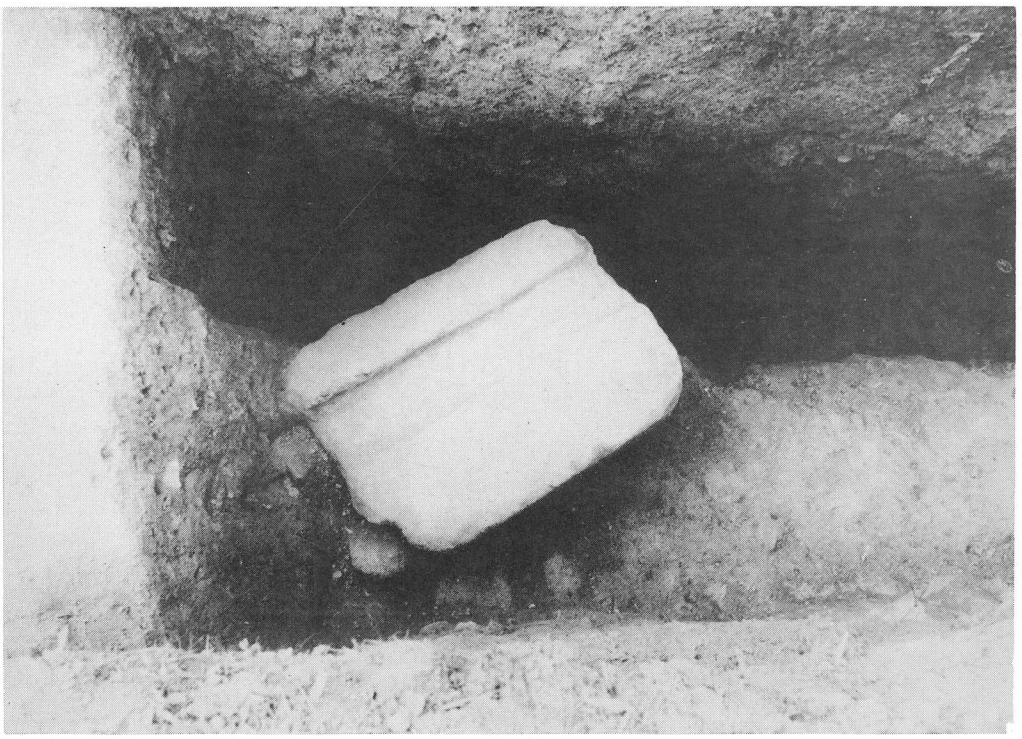


心礎抜取り跡

同上断面

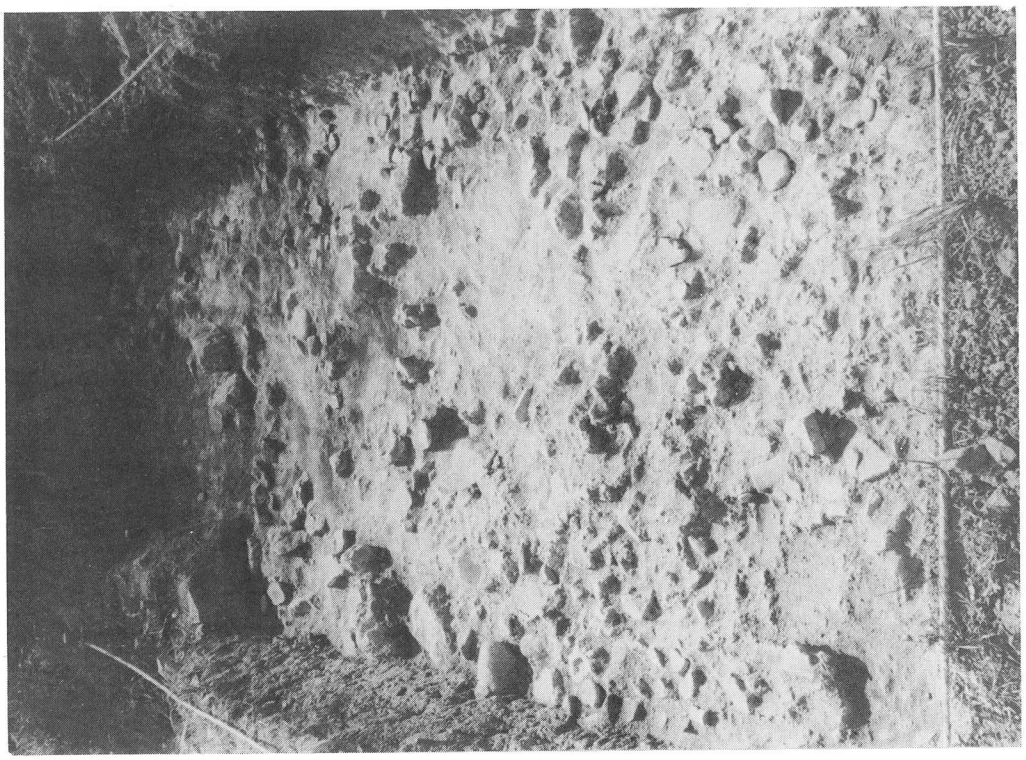


W_1T 瓦出土状況

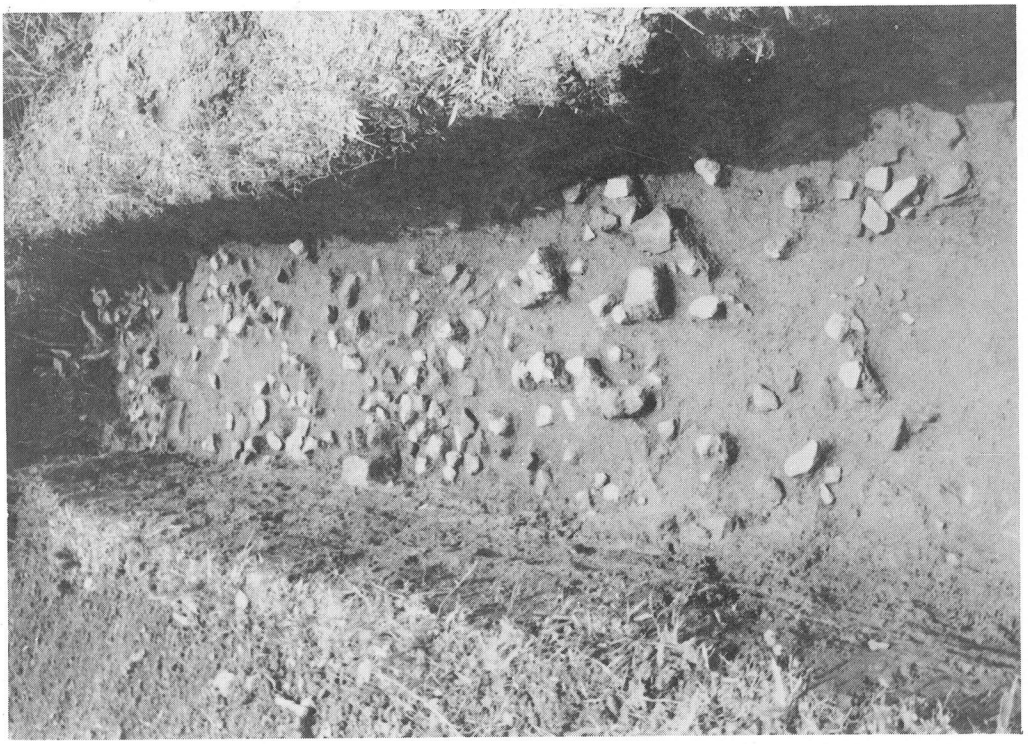


E_2T，地覆石（遊離）

図版第 8，第Ⅱ基壇

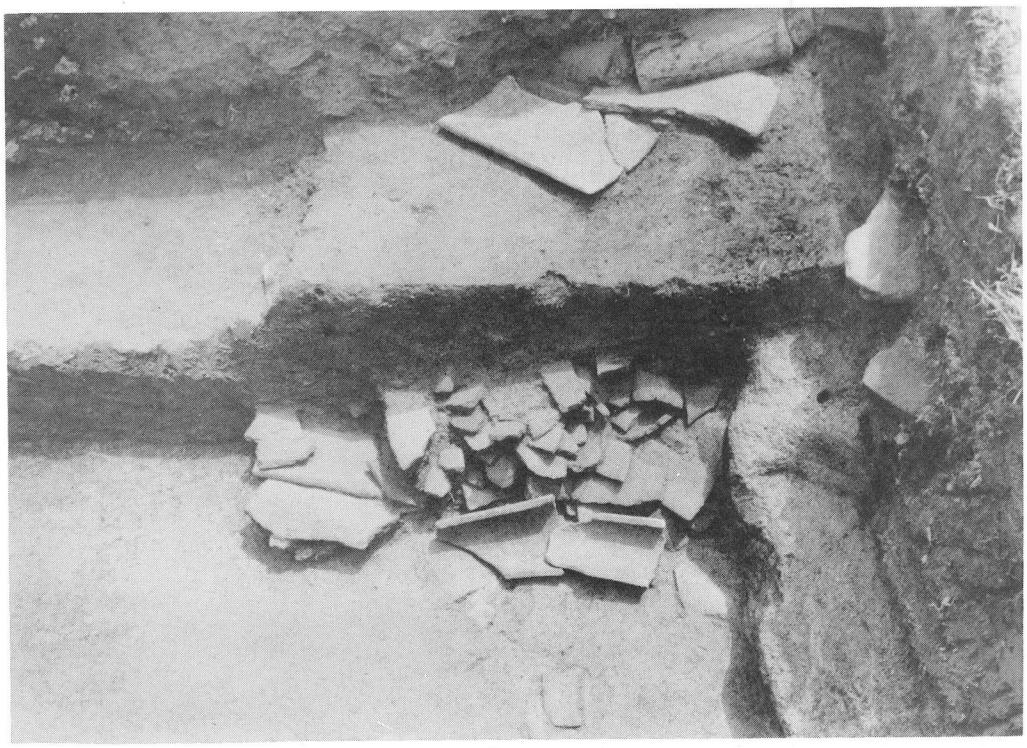


W T 瓦出土



E₂ T 瓦出土

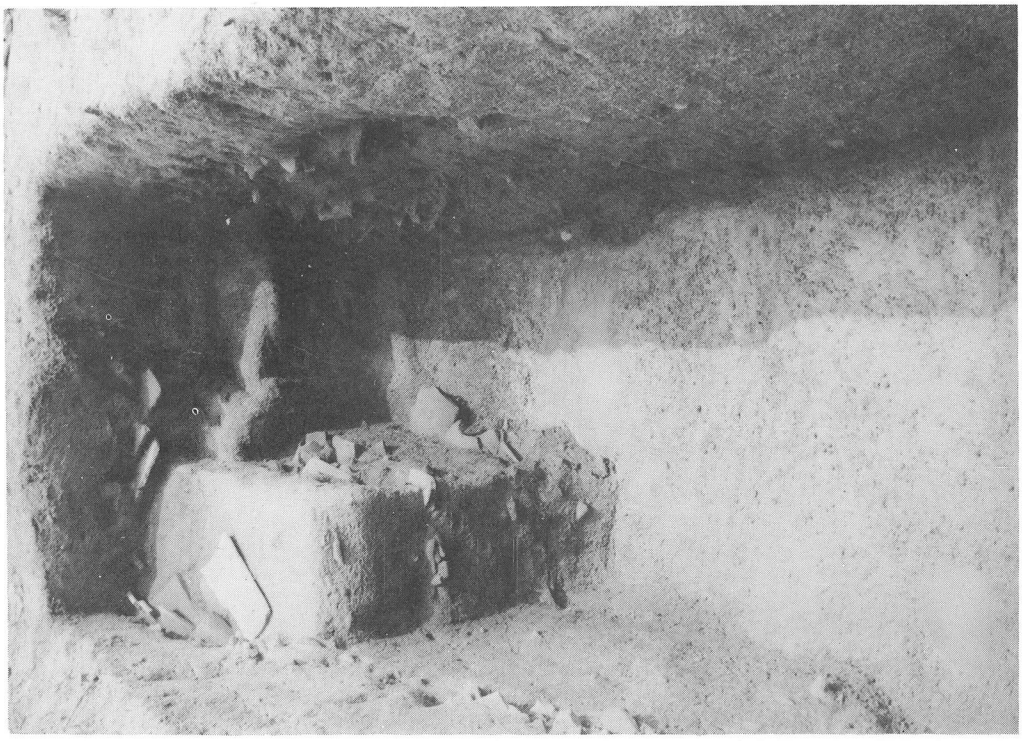
S_1T，小円礫出土



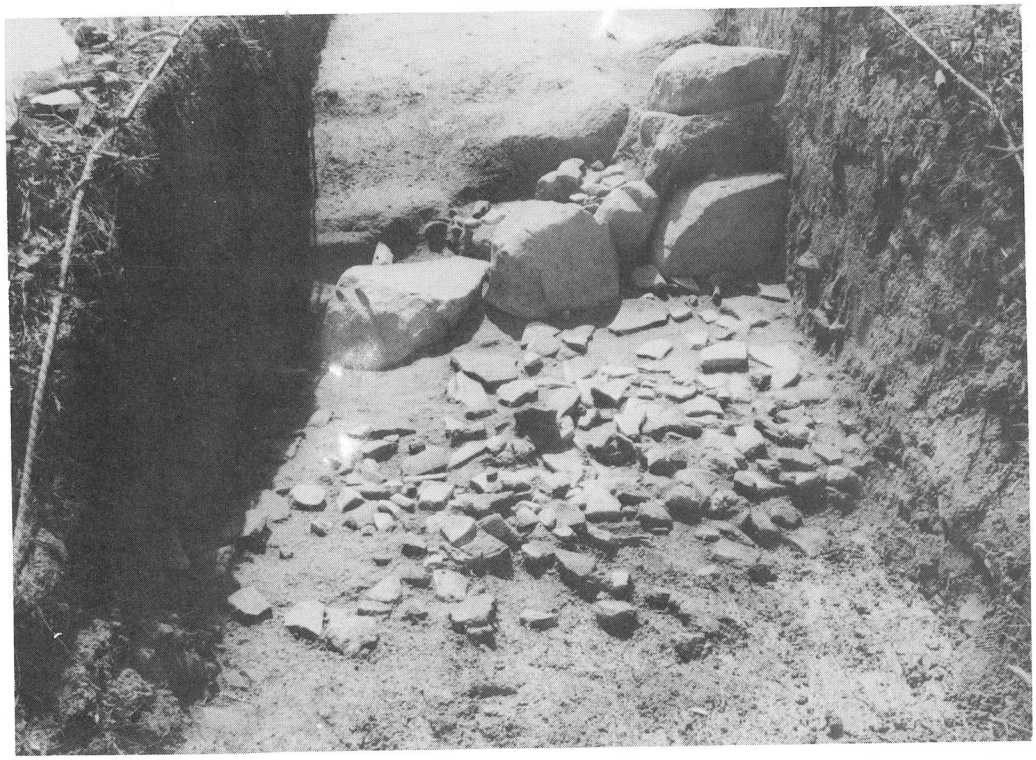
N_1T，上，下瓦層

図版第10，第Ⅲ基壇

N_1T，瓦溜3層出土状況



N_1T基壇前出し，溝，瓦層

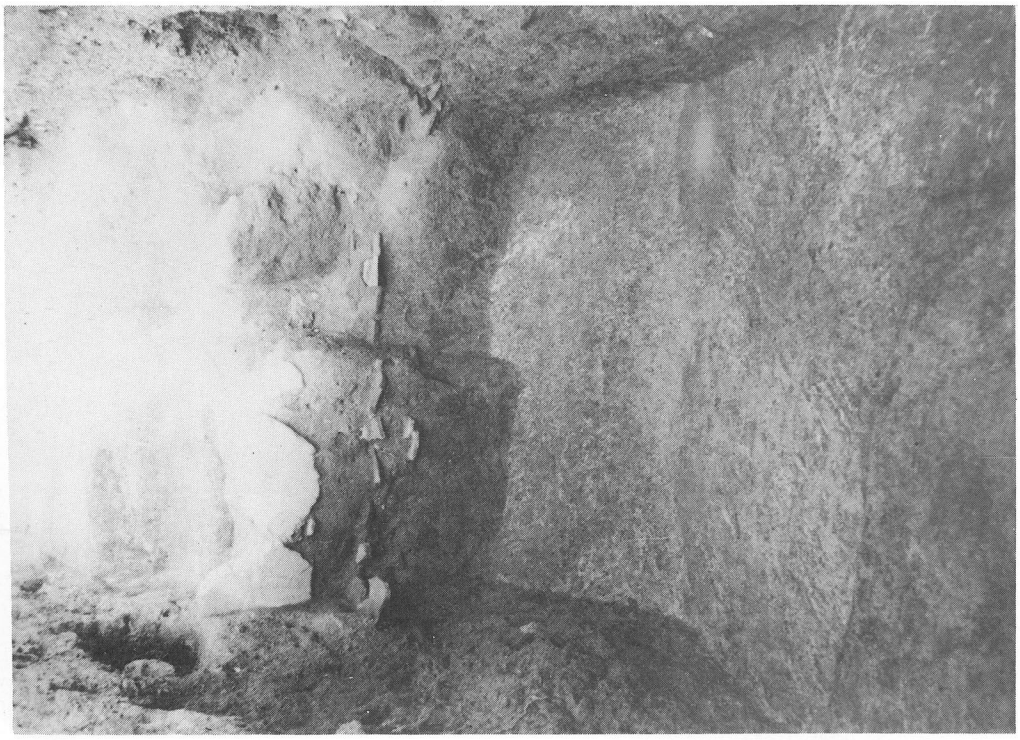


E_1 T，基壇東列石

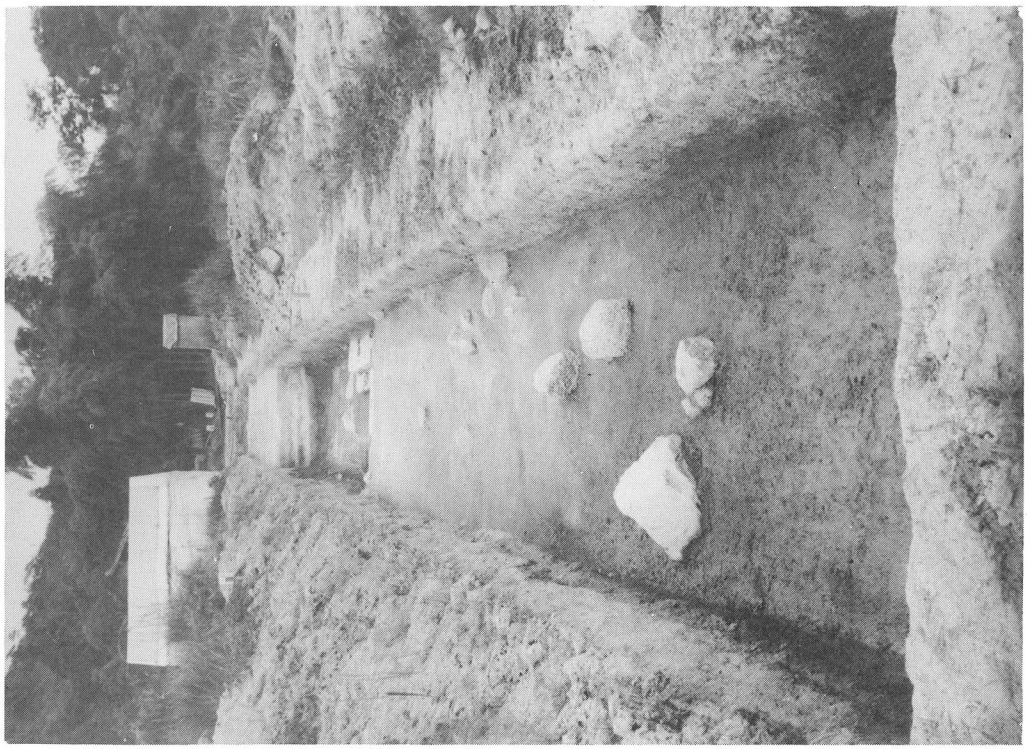
E_1 T′ 最下部礫

図版第12，第Ⅲ基壇

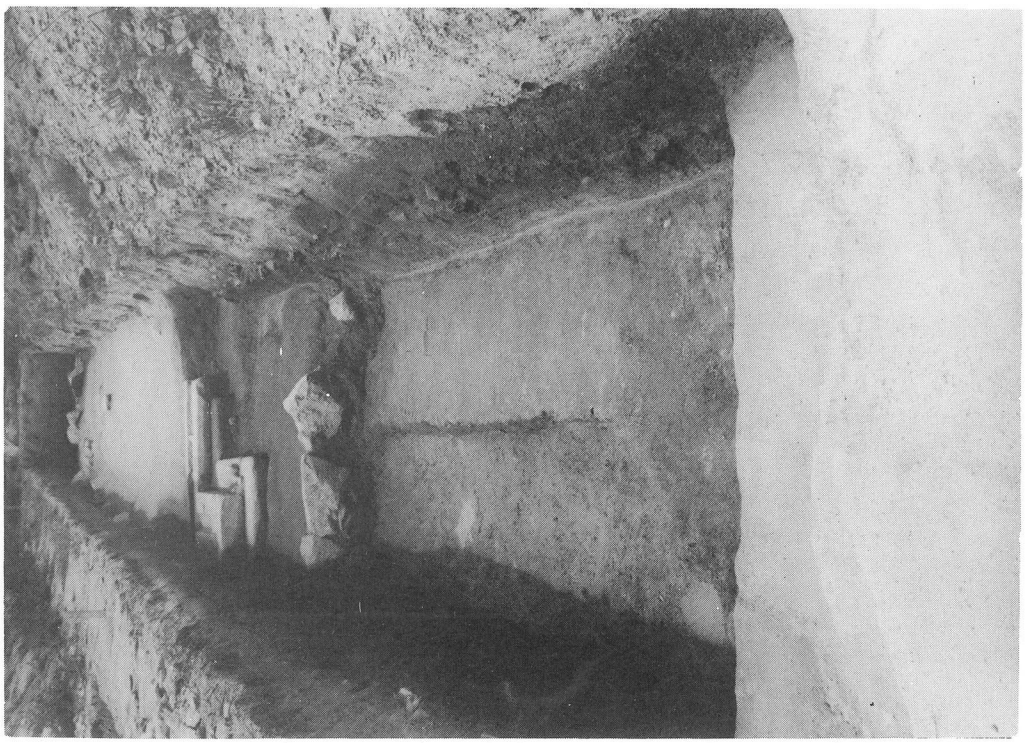
W_1T，基壇西側列石



W_1T最下部溝

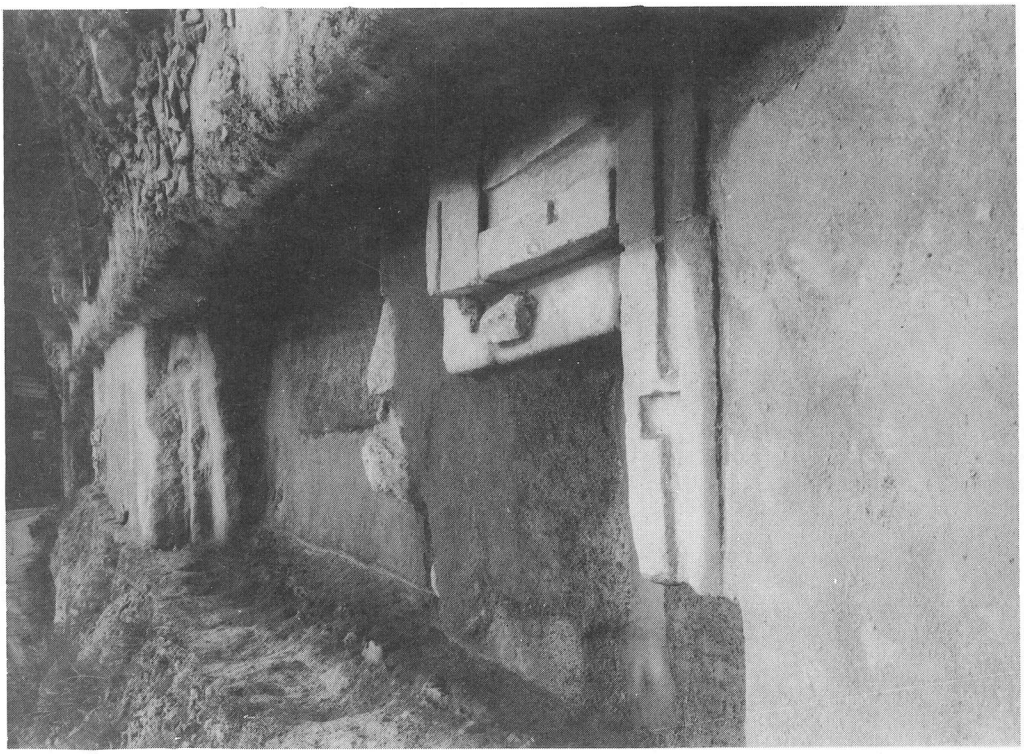


西門基壇



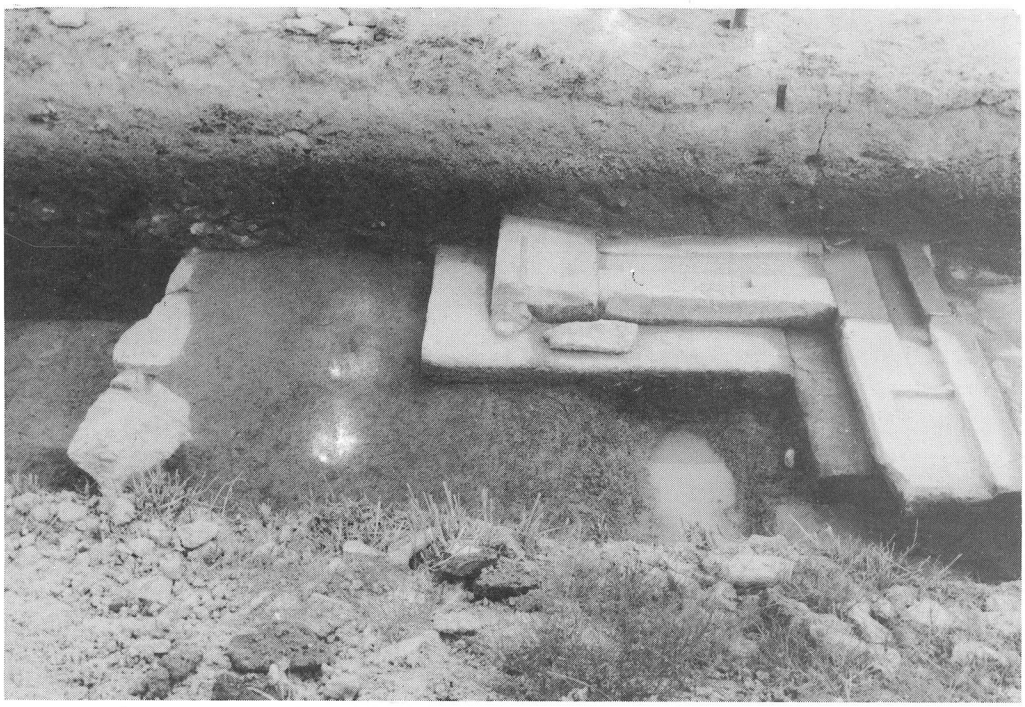
同右（手前は回廊）

図版第14，西門基壇



東階段及び回廊

回　廊

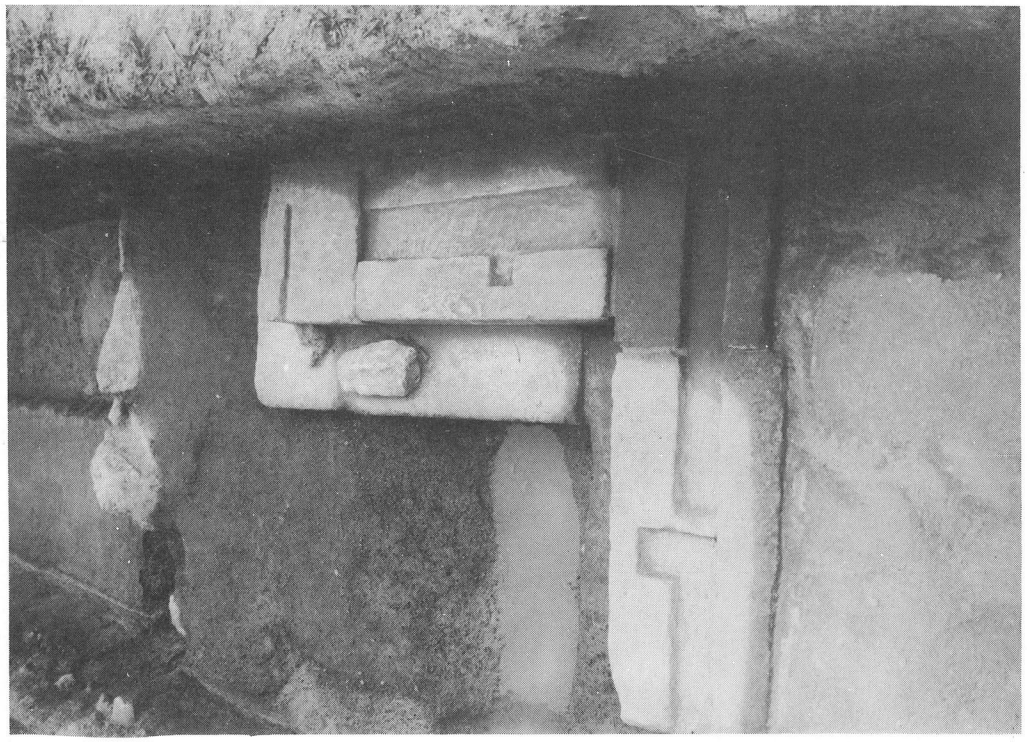


東階段

同上右半分

図版第16，西門基壇

東　階　段



東　階　段